

やはり転生オリ主の青春ラブコメもまちがっている。(リメイク)

狩る雄

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

前世に未練を残している転生オリ主が介入。

1 度目の青春ラブコメは失恋で終わった。2 度目の青春は日常を過ごしているにすぎない。3 人の先輩との出会いは青春を加速する。

## 目次

プロローグ	1
番外編	
文化祭1： 自分勝手	7
文化祭2： 困った人は、困っている	11
文化祭3： 俺たちだけの文化祭	18
体育祭： 透明な水には、お砂糖とスパイスで彩りを。	23
本編	
第1話 加速し始めた青春	29
第2話 俺によって変わる物語	37
第3話 初めての依頼は前途多難のようで	44
第4話 後輩と先輩	51
第5話 歪な転生オリ主	57
第6話 俺がいる証明	63
第7話 彩られる青春	69
第8話 今年もクリスマスがやってくる	76
第9話 次回、『玉縄』デュエルスタンバイ!	81
第10話 玉縄	88
第11話 草食系男子の青春ラブコメ	93
第12話 『実感』と『成果』	100
第13話 『本物』	106
第14話 先輩と後輩たち	113
第15話 俺たちのフェアリーテイル	119
第16話 ありふれた日常	128

第17話 『偽物』 136

第18話 彼女と過ごすクリスマスは 143

第19話 『一年の計は元旦にあり』って言われても やはり俺の青春は行き当たりばったりである。 150

第20話 求めるのは『加速』なのか『停滞』なのか 157

第21話 進路 165

第22話 ガールズトーク 170

第23話 自由の刑 176

第24話 未来への不安 183

第25話 その独白は、ほんの少しだけ異なる。 189

第26話 彼らのステージへ 192

第27話 また一緒に 199

番外編 このラノベ作家に祝福を！ 205

第28話 まだまだ雪の降る季節 213

第29話 乙女たちの戦いに向けて 217

第30話 隠し味 222

第31話 たった2人の後輩として 228

第32話 その花言葉は 234

第33話 春を夢見て、蕾は確かに芽吹いた。 241

第34話 咲いて廻って、雪の下で結われて、芽吹いて花開くまで。 249

第35話 陽の満ちるあの部屋から出て 257

35・5話 恋バナ 264

お誕生日特別編 4月16日 268

第36話 風花雪月 274

エピソード 青い春が幕を閉じ、そしてまた。

## プロローグ

2月半ば。

とうとう受験日となってしまった。

合格さえできればいい、そんな私でもちよつとは緊張している。スマホで友達とやり取りをしても、なんかイマイチだった。

友達と言っても、海浜を受けるらしいし、それなりに話す程度だったし。もう会うことはないか。

「混んでるわねー。」

送り迎えの車でいっぱいのように校門まで近づくことはできなさそう。寒いし、ここまで乗せてくれただけマシ。

「じゃあ、こっから歩いていくから。」

「そう?。」

「うん、行ってくるね。」

鞆と傘を持って車から降りる。

「がんばってきなさい。ていうか、雪には気をつけてね。あとあと、忘れ物はない?。」

「だいじょーぶだいじょーぶ」

お母さんに降ろしてもらったのは、総武高校から少し離れた場所。

寒い。

傘をさして身を縮こませて歩く。

「なんで今日に限って降るのかなー、もう。」

ため息は白くなった。

冬に入ってから何回か雪は降ったけれど、昨日までは晴れていたのに。千葉ではあまり雪は降ることはないし、運が悪い。

「いってー!!」

その声に後ろを振り向く。

学ランを着た男子が見事に転んでいる。

心の中だけで笑う。

キョロキョロと周りを見ているのは、カッコ悪いとこ誰かに見られたか確認しているんだろうな。血相を変えて鞆の中を確認しているし、いきなり落ち着いて受験票をずっと見てるし、なんていうか挙動不審。

顔はまあまあ、か。

知らないフリして、私はゆっくりと校門に向かって進む。ここで焦って転んだら、なんか縁起悪そうだし、カッコ悪いし。

総武高校が見えてきた。

スマホを見て時間を確認してもまだ30分以上余裕。

「はー」

また ため息をつく。

今から憂鬱。

勉強もそれなりにはやったし、塾の模試でも合格ラインはあるって言われた。でも進学校みたいだし 絶対受かる自信なんてない。去年はほぼ満点合格の人が何人かいたらしいし、できる人も受けるだろうし。

それでも受験勉強が今日で終わりっていうのは、いいことか。

「受験票、 受験ひょう……」

ヤバイヤバイヤバイ

受験票が鞆の中にない。

たぶん部屋だ。

絶対忘れないようにーって、勉強机の上に寝る前に置いておいた気がする。

急いで携帯を探すけれども、ポケットの中にはない。

車の中に置いてきたのかもしれない。

も、もしかしたら、  
落としたのかもしれない。  
後ろを向く。

「ん？」

「え？ あー えつと……」

さつき男子と目が合う。

試験直前に読むような社会の参考書を片手に持っている。

知り合いを探す時間もない。

仕方ない、この男子を使うか。

「ちよつと、お願いがあるんですけどー」

「なにかありました？」

大体の男子ならドキツとするはずなんだけど。

さつきみたいに動揺しない。

「さつき見事にこけてまし、た…ね……。」

一体、私は何を言っているのだろう。

明らかに頼み事をする流れじゃなくなってしまった。

「そのことか。大丈夫、怪我はなかったから。」

「それはよかったです……じゃなくて！」

「じゃなくて？」

「えーと……」

ペースを完全に崩された。

携帯を貸してくれて頼むだけなのに、上手くいかない。

なんでこんな簡単なことができないのだろう。

「もしかして、受験票とか？」

考え事していた彼が、伺うように聞いてきた。

なんか真剣になってくれる。

「そ、そうなんですよー。」

「なら、学校事務の人か試験官の先生に頼めばいいはず。仮の受験票



で済ませることが出来るから。付いてきて。」

さつきまでより柔らかくなつた声がかげられた。

凍りついた道を滑らないように、少しだけ早いペースで歩いていく。そんな彼の少し後ろをついていく。

「親への連絡はした？」

「その、携帯も忘れちゃつたていうか……」

「なるほど。もし受験票を見つけたら心配するだろうし、携帯を貸すから後で連絡した方がいいな。」

「は、はい。そうします。」

「あと面接にも筆記にも、成績には全く反映されならしいな。」

「いや、らしいってなんですか……」

「一度調べたから知ってるだけ。」

ちよつとは安心した。

「ところで、ちよつと面接の参考程度にこの高校を受験した理由聞いてもいい？ 言いたくないならいいけど。」

「なんでまた……まあ、制服がかわいいからですかね。」

彼氏作りたいとか、楽しい高校生活を送りたいとかあるけど、一番はこれだ。

「……部活とか校風とかどうなの？」

「特に知りません。」

「そうか……」

なんだか心が軽くなつていた気がする。

もし彼が何も話をしてくれなかったら、ずっと俯いていたままだった。

校舎に入ってからスムーズに進む。

白衣を着ている女の先生に彼が話をしてくれて、仮の受験票は呆気なく手に入った。

携帯を借りて連絡を入れたとき、泣いているお母さんをなだめる方が大変だった気がする。

「いろいろありがとうございました♪ 忘れてることに気づいたときは心臓止まるかと思いましたよー。」

「どういたしました。」

「また社会の参考書を片手で読んでいたらしい。」

彼の時間を使ったことになるのか。

一応、謝らなきやなー

「その、ごめんなさい。」

「じゃあ、高校入ったら責任取ってくれ。」

「え？」

「冗談だけだな。俺は余裕で受かるつもりだし。またな、一色さん。」

なんかいい人すぎるでしょ。

名前、聞きそびれたな。

\*\*\*

入学式の日放課後には全員が連絡先を交換し合う。

人間関係ができる第一歩。

ちなみにラインアカウントが最低限。

メアドや電話番号はあまり開示しない。

もし、寝坊だとかサボりだとか、交通事故だとかでこの日に休んでいたら苦勞することになるだろう。もちろん私たちのクラスは全員出席している。

「今日からもうサッカー部見に行くのか。超次元サッカーの熱血少年？ じゃあ、また明日な。」

男子3人の会話がようやく終わったみたい。

鞆を持って早々に教室から出ようとする彼にようやく話しかける。

「男子が自分から名乗らないのもどうかと思います。」

「それもそうか。俺は…」

「私の名前は、一色いろはです。」

「俺の名前は……」

「いろはちゃんでも、いろはさまでも……、月村君なら特別に、呼び捨てで、いろはでもいいですよ。」

「一色さんで。」

「むう…それで、名前は？」

「月村伊月。ていうか、さつき呼んでたよね。」

「なるほど。よろしくお願いしますね、月村君。」

「よろしく。」

「まあ、そんな些細なことはどうでもいいんですけど、携帯出してください。」

「絶対、些細なことじゃなかったよな。」

そう言いつつも、携帯を潔く出した彼の連絡先を登録する。電話番号とメールアドレスもちろんもらった。

「では、行きましようか。」

「どこに？」

「学校探検ですよー。」

今のうちにカッコいい男子の情報を仕入れておかなければならぬ。  
い。

なんだか楽しい学校生活になりそう。

## 番外編

### 文化祭1： 自分勝手

進学校によっては、3年に1回だったり、百周年記念だったり、文化祭や学園祭に対して消極的な場合がある。何かと多忙な学校側が意図的に避けているのだとか、過去に問題があつたとか、理由は様々だろう。まあ、今は他校のことは置いておこう。

ともかく、ここ総武高では、毎年文化祭が開催される。

「そうだ！ 今日放課後までに文化祭実行委員会を決めなきゃならん！」

朝から耳に響く、そんな熱血担任の声に、クラスメイトの多くがお互いに顔を見合わせ始める。

ていうか、今日から委員会あるのかよ。

さて、各クラス男女1名以上という指示なのだが、その計2名すら選出されないのはよくあることだろう。理由は簡潔に言うならば『めんどくさい』。男女1名ずつなんて指示なのだから、先にどちらか1名が決まるのを待っていることもある。

「1時間目が体育だから、俺はここで抜ける！ 委員長、後は頼んだ！」

完全に出ていったことを見計らったクラスメイト全員が同時に溜息をつく。この数ヶ月で憤りを通り越して、すでに呆れに変わっているのである。

「……じゃあ、さっさと決めるか。」

うちの委員長は発言力がある。言い方を変えれば、トップカースト

とも言うだろうか。

まず彼の言う通りに多くの人が免除される。

条件は運動部及び、吹奏楽部や美術部に所属することだ。

つまり残ったのは、帰宅部、文化部やマネージャーである。

その後、最終決定は残ったメンバーのみに委ねられた。

じゃんけんといった手段を誰もが避けて、女子側では議論が始まったのだ。早くも徒党を組み、『吊るし上げ』の作戦を企てる。しかも貼りつけたような笑顔で『押し引き』を使うのだから、男子が逃げたいくらいのギスギスだ。

まあ、結論はわかっている。

味方のいない状況という、彼女を孤立させることは何度も見させられたからだ。

\*\*\*

早速、放課後から各クラス2名以上が会議室に集められた。

特に女子が多いことは察してほしい。

「文化祭実行委員をはじめます。」

ほんわかした笑顔で生徒会長がそう告げる。

無理やり参加させられて意欲がない男子の数人にやる気が芽生えた。

「それじゃあ、実行委員長の選出移りましょう。誰か立候補いますかー?」

意欲的に参加した人も、さすがに実行委員長は避けるらしい。

俺たち1年生からすれば、2年生に任せたい気持ちもある。

「あの……雪ノ下さん、だよね?」

「はい。」

確か国際教養科2年で、成績トップの人か。

大人びた雰囲気を持っていて、優等生という言葉が最も当てはまるだろう。

「やっぱりー、はるさんの妹さんなんだね。」

たぶんOBの人なのだろう。

「ねえ、雪ノ下さんならできると思うけど。どうだろ？」

「実行委員として善処します。」

真面目な断り方である。

人選としては間違っていないのだろうが、本人がやらないという意思を示した。

「そっか……」

「あのー、……みんなやりたがらないなら、うちやってもいいんですけど。」

「ほんとう？ えっとー？」

「2年F組の相模です。」

もしかして、クラスメイトの相模の姉だろうか。

よく愚痴を聞くとだけ言っておく。

「あんまり、前に出るの得意じゃないんですけど。こういうのちよつと興味あつたし。うちもこの文化祭を通して、成長したいって言うか。」

胡散臭い。

ていうか、あざとさが足りない。

隣の一色さんかというと、5本指をちよつとだけ合わせて『頼りになるー』って顔をしている。本心は、自分から立候補してくれる人がいてラッキーってところだろう。

「いいと思うよー。他に立候補がないなら、相模さんでいいかな？」

生徒会長への返答、相模先輩への信任を籠めて、全員で拍手を返す。その後は、各部署のふりわけや、今後の活動日程の確認をしていく。

生徒会のサポートを受けつつ、慣れないながらも今日のところは無事に終わらせたようだ。

多くの人がさっさと帰っていく。

俺たちもその波に乗って自転車置き場までたどり着いた。

「サッカー部は？」

「葉山先輩に、行かないってもう言っちゃったんですよねー。」

「そうか。」

すでに夕暮れ時、ここから冬にかけて日の入り時間も早まってくるのだろう。

「文化祭が終わるまで、あまり行けなさそうだな。」

「そうですねー」

そこで会話が途切れる。

家の近いクラスメイトと一緒に帰っているのだけであるし、まあ、こういう静寂も悪くはない。

「……えつと」

「ん？」

「一緒にがんばりましょうね♪」

「まあ、同じ部署になれてよかったよな。」

あくまで、俺が勝手にやっていることだ。

だから、謝罪よりもその言葉の方が嬉しい。

## 文化祭2： 困った人は、困っている

次の日から、文化祭実行委員の副委員長として、雪ノ下先輩が抜擢されたのだ。すでに打ち合わせていたよう形で確定事項のように発表された。

そして、優秀すぎた。

全ての部署の仕事を理解していて、その進捗確認に加えて、適切な仕事の追加も行っていく。とにかく抜け目がないし、気づきにくいことを指摘してくれる。優れたアドバイザーのおかげで余裕のある仕事ができている。雪ノ下先輩の評価は鰻登りであって、委員長である相模先輩は比較される。あくまで、委員長の顔を立てるような仕事ぶりだけでも、それすらも評価される。

隣の一色さんというと、上手くバレないように『うわあ』って顔をしていた。

それでも、

—— 順調に進んでいたはずだった

定例会議の時に、クラスの方にもつと顔を出すことを、そのメリツトを含めて説明したのだ。自分たち自身が楽しんでこそ良いものができるだとか、先人の知恵にあやかるだとか。誰かに感化されたことが考えられる。

ちゃんと考えれば、両立なんてできないことはわかる。しかし、『めんどくさい』ことを最小限に留めて、クラスの催し物を手伝う流れとなった。その皺寄せがやってきて、残ったメンバーは仕事の山である。

溜息と、キーボードを叩く音が、今日も響く。



扉が開けば、相模先輩かと思って視線を向ける。

「つて、葉山先輩じゃないですかー！」

さつきまでうんざりしながらも仕事をやっていた一色さんが、元気に駆けて行った。

それを見届けて、俺も席を立つ。

「先輩、いくつかやりますよ。」

「……あ、お、おう。」

高校生にして社畜のような目である。

それも、こういう状況がもたらしたのだろう。

雪ノ下先輩の次に、量の多い山からファイルを2つ取った。

「……悪い。」

「いえ。こういうこと、得意なんで。」

「……そうか。」

先輩は、どういう意味で受け取ったのだろうか。

葉山先輩に元気よく話しかける一色さんをちらりと見た。

「よつと。」

再び席に着いて、表計算ソフトを開いて数値を打ち始める。

あー、こういうの、グラフ化したら綺麗そうだな。

「なんか、増えてませんか？」

「減りはしてるよ。」

「ほんと、いつもいつも……」

一色さんも席に着いて、書類のチェックを行っていく。

お金関連は特に、少しでも数値が間違っていたら大変だからだ。

「……頼るのは大事でしょうけど、頼る気満々の人しかいないんですよね。」

その呟くような声が、静寂の部屋では耳に入る。

「ぐ、具体的にはあれだ。俺に仕事を押し付ける連中だ。」

一色さんの持っている書類がほんの少し、くしゃつとした。

「俺以外の誰かが楽をしているのは許せない。」

そう、言いきった。

「君、最低だね。」

生徒会長は諫めるけれども、優しい声だった。

「そつちも手伝うよ。」

「確かに、雑務にも皺寄せが言っているようです。一度考え直します。それと、お手伝いの件はありがたくお受けします。……ごめんなさい」

その謝罪は、たった独りに向けたもの。

「さつ、もう一踏ん張りがんばろ♪」

生徒会長のおかげで雰囲気は戻り、また仕事に戻る。

扉が、開いた。

「遅れてごめんなさい！」

「：おつかれ。相模さんたちはクラスのほうに行っていたんだね。」

「うん。そうそう。」

『うわあ』って、一色さんが小さく声を漏らしてしまった。

誰もが委員長御一行様に意識が向いていたが。

「相模さん、ここに決済印を。不備についてはこちらで修正してあるから。」

「うん、ありがとう……。ていうか、うちの判子渡しておくから、押しちゃっていいよ。ほら、委任っていうやつ。」

「……では、今後は私がやっておきます。」

「楽しいことやってるとー日がはやーい！」

そんな独り言と、形式的な挨拶だけで、会議室から出ていった。

3人とも、様子見がてら来ただけなのだろう。

ちよんちよんと肘をつついて、紙を渡してくる。

『私って、普段あんななんですか？』

その質問の返答を書いて、こっそり返す。

『あれは空気読めてなさすぎ。』

ていうか、責任感あるだろ。ちゃんと。』

そのお返事はなく、そつとポケットに入れていた。

「あー、やるか。」

そう俺が呟けば、残った人が次第に仕事を始めていく。

またパソコンに数字を打ち始める。

劣等感、それだけなのだろうか。

何かに困っていることだけは、ちゃんとわかる。

\*\*\*

今日も今日とて、定例会議がある。

サボりがちなメンバーもこれには参加している。しかし会議が終了すれば、彼ら彼女らはクラスに行ってしまうし、俺たちには雑務が待っている。進捗状況の共有や、抜けがないかの確認、そういったことで会議の重要性が多忙な時期でも感じられるのは、雪ノ下先輩の手腕のおかげだ。そんな雪ノ下先輩がたった1日だけ休んだけれども、決して誰も責めることはしない。

「本日の議題ですが、文化祭のスローガンについてです。」

募集した案が、ホワイトボードに並べられていく。SNSや提出ボックスで集まったものを、その部署の担当があらかじめ選んだのだろう。ネタ要素を籠めてくる人も多いし、激務だったことは察せられる。

友情や努力など、ありきたりなフレーズに誰も頷くことはない。

『一意専心』は、何かしら期待を籠めているのでしょうかね。

彼女たちは、その四字熟語の意味を知ろうともしないだろう。

「おつ、ああいうのいいよな。1人はみんなのために。」

発案者は、ヒーロー好きな方か。

高校生は横文字が好きな場合が多いが、その綴りを選択したのだから、間違いない。

「そうですよねー！」

葉山先輩自身も好きな言葉なのかもしれないが、この状況を打開できる可能性も示唆しているかもしれない。『One For All』に葉山先輩が反応したことで、一色さんを含めた、多数の女子が賛同の声をあげる。

あちこちで『いいよね?』と、自然と味方を増やしていく。

これで、反対する意見を出せるなら、かなりの人物ではないだろうか。

今の俺には、できない。

「おお。独りに傷を負わせてそいつを排除する、1人はみんなのために、よくやつてることだなー?」

机に肩肘をつきながら、あの先輩が愚痴った。

上手く収まりそうだった空気を覆すことはない。

ただ注目及び敵意を集めたただけだけでも、雰囲気は確かに変わる。

「じゃ、じゃあ、うちらから！」

『☆絆☆』

くともに助け合う

文化祭く』

相模先輩自身が意気揚々と、そう書いた。

俺も、目が腐りかけた。

しかし、俺も、わざわざ敵を作ることはいらない。

「うわあ……」

「な、なにかな。変だった?」

葉山先輩の手前、相模先輩は好印象を崩したくないから、下手に取り繕った笑顔で対応していくが、それも次第に剥がれていく。

対する先輩は言いづらそうに、しかしどこか煽るように、相手の心理についていった。

「嫌なら、他に案出してくれる?」

「それじゃあ……。人、よく見たら片方楽しんでる文化祭。」

正論を、淡々と述べた。

正しいことを隠さない姿勢が、まぶしい。

一色さんは、キョロキョロしている。

その対象は葉山先輩だけではなく、俺も含まれる。

先輩の自業自得とはいえ、どうにかしたいよな。

「あつははははつーバカだ、バカがいる!もうさいつこう!ひ、ひい、あー。ダメだお腹痛い!」

「笑いすぎだ……。」

凍った空気の中で、OBの女性が大笑いである。

ずつと真剣な表情を見せていた平塚先生に、諫められた。

「いやあ、いいねいいねー!」

「説明を。」

「……いや、人という字は人と人が支えあつてとか言ってますけど、片方寄りかかってんじゃないっすか。」

先輩が、両手で人という字を作る。

「誰か犠牲になる事を容認してるのが『人』。だから、この文化祭に、あー、この文実に、相応しいんじゃないかと。」

「……そうか。」

「あー、俺とか超犠牲だよな。アホみたいに仕事させられてるし、ていうか人の仕事押しつけられてるし。あつでも、それともこれが委員長さんが言うところの『共に助け合う』って事なのか。助け合った事が

ないのでよく知らないんですけど。」

——俺って助け合ったこと、あつたか？

ともかく、先輩の思惑通りにヘイトを集める。

「ふふっ、……」

笑いを必死に堪えている雪ノ下先輩に全員が注目した。

ここで雪ノ下先輩が、先輩にどういう判決を下すのか。

それで、『悪』かどうかが決まる。

「却下。」

清々しい笑顔が、たった独りに向けられた。

咳払いをして、真顔に戻る。

「今日は解散にしましょう。」

「え、でも……」

「実行委員全員、各自で考え、明日決めましょう。以降の作業については全員全日参加にすれば、遅れも十分取り返せる……でしょ。」

「そう、だね……。じゃあ、みんな明日からまたお願いします。お疲れ様でしたー！」

その言葉で多くのメンバーが席を立ち、半数ほどは先輩を睨みながら、会議室から一度出ていく。ともかく、ようやく彼ら彼女らも仕事をやるだろう、たった独りの敵を犠牲にして。

もちろん、ちゃんと感謝している人はいるし、同情している人たちもいるし、そしてちゃんと見てくれている人もいる。

### 文化祭3：俺たちだけの文化祭

総武高には1クラスが調理実習できるほどの家庭科室がある。しかし喫茶店をするクラスも多いし、外にも屋台が並ぶ文化祭では基本的に満員である。たった1つの机を使うことすら上級生に遠慮してしまう。

だから、物理室なのだ。普段の授業では使わないガス栓がいくつもあって、水道や換気扇も完備されている。昔は化学実験室としての役割があったのかもしれない。保健所にも学校側にも、ここを使うための交渉と検査には骨が折れた。

「そろそろ、全部ですね。」

「そうだな。」

早朝から、

エプロンと三角巾を身に付けた調理班は、各中華料理の仕込みをして、次々と蒸していった。

男子だけで作ったのはジャパリまんである。

遊戯部所属の相模たちが案を出してくれた。

ベーシツクな肉の他に、カレーやピザソースや焼きそばなどなど。具材は食べてみないとわからないというやつだ。

「あとは売り子次第だな。ていうか、一色さんもまさかこつちに来るとはな。」

「まあ、結構やりたい女子がいましたからね。」

中華喫茶『パンダカフェ』のなのだから、チャイナ服を着て、気になる男子にアピールできる。

「でもでも、こういうのも、結構ありますし。」

これくらいあざとくないとなあ。

手作りによる低コスト生産が、最大の目的である。

俺たち男子も、それに関しては強いられた。

「小籠包やごま団子作れるのって、そうはいないよな。」

一色さんは小籠包までマスターして、藤沢さんたちのサポートを受けつつ作成していった。

「なんですか、料理できるアピールが気になる人に成功したみたいですが、それはお互い様ですしでも今はすきな人がいるのでごめんなさい！」

畳んだ水色のエプロンを握った手を振りながら、ほとんど聞き取れないくらいの早口である。

「ていうか、葉山先輩の劇、始まつちやいますよ！」

「行ってらっしゃい。」

「なにいつてるんですか、サッカー部の先輩なんですし、行きますよ。」

「えっ、いや、エプロンまだ着てるんだけど……」

「はやくはやくー」

すでに満員のF組の劇を、一緒に見に行く。

男の娘が実在していたのかつて、感じた。

——今日くらい、いいよな？

校外の人も来ていて、一緒に歩いても、目立たない。

\*\*\*

文化祭も佳境に入り、このライブが終われば閉会式である。

調理場の後片付けをしていたので最後尾から見ている。

一色さんまで付き合ってくれた。

葉山先輩のバンド演奏、最前列で見たかっただろうに。

上着のポケットに入れていた携帯が、同時に振動する。



「うわあ、これって、そういうことなんですかね……？」

グループラインの差出人は葉山先輩であり、サッカー部に対して相模先輩の目撃情報がないかの確認である。

「たぶんな。」

文実しか真意を理解できないが、委員長の失踪である。

雪ノ下先輩と比較され続けたことで……、

いや今はどこにいるかを考えるべきだ。

「ちよつと、探しに行く。」

それだけ告げて、体育館から出た。

たぶん、誰かがどうにかする。

でも、ちゃんとしたいつて思えたから。

「待ってください！ わたしも手伝います。」

「……いいの？」

「はい。でも、うーん、なんでだろ……。まあ、こういうのって、ポイント高いですよね♪」

「一色さんらしいな。……さて」

どうにかして、雪ノ下先輩たちが時間を繋ぐだろう。

それでも、残り時間はないに等しい。

「女子トイレ。可能な限りでいいから、見てきてくれるか？」

「了解です！」

「サンキュ。」

二手に分かれ、俺は闇雲に走って探す。

後片付けに追われる人を上手く避けていく。

校内で独りきりになれるところ、いや人のいないところの候補なんて、限られている。

階段を駆け上がる。

普段は閉められているけれども、文化祭ということで大量の横断幕を設置するために、鍵を借りたままのはずだ。

「あっちかよ!？」

校舎の屋上に上がったものの、特別棟に2人の人影が見えた。

息を整えながら、携帯を取り出す。

まずは一色さんに、次にサッカー部のグループラインにメッセージを送り、そして雪ノ下先輩宛てにメールを送った。

そして、再びまた走り始める。

「月村君!」

「メッセージ:見たのか:」

珍しく髪がちよつと乱れている一色さんと合流できた。

二人して息を整えながら、手摺を使って階段を上がっていく。

「ちよつ、葉山先輩!？」

あの先輩のシャツの襟を掴んで、壁に押し当てていたのを、葉山先輩はやめる。

「なにあいつ、てかだれ?」

「まじでキモいね。」

「あんなの気にするこたないよ。」

そんな言葉を投げかけて、友達は相模先輩に付き添って去っていく。

体育館に行ってくれるだろう。

——ちゃんと、見てくれたのだし

おかげで、成長できただろう。

前に出ることもしたし、周囲の協力もあつたし、挫折も味わえたし。

「どうして、そんなやり方しかできないんだ……」

「さ、先に、行きますねー!」

憤りを抑えてゆつくりと去っていく葉山先輩に、一色さんが付いていく。

まだまだ夕暮れは遠く、晴れ晴れとした空である。

「……はあ」

ずるずると、壁に寄りかかっていく。

「……なんだ?」

立ち去らない俺を疑問に思ったようだ。

同情とか憐れみとか、助けたいだとか、そんなことは思っていない。

たった数日だったけど、もっと見ていたいというか。

「月村伊月です。先輩の名前、教えてもらってもいいですか?」

「……比企谷、八幡」

「じゃあ先輩。後輩第一号として、今後ともよろしくお願いしますね。」

「……はあ、さいですか。」

影に隠されているけれども、瞳はいつもとは確かに違った。

「ロクなことにならないぞ?」

「言ったじゃないですか、慣れてるって。」

だから、変わりたい。

体育祭： 透明な水には、お砂糖とスパイスで彩りを。

夏休みにおける生活リズムの崩れがようやく元通りになってきた頃にあるのが、体育祭だ。私立高校である総武高でも毎年開催される。運動が苦手な人や体力があまりない人、そしてボッチは好きにならない行事である。

総武高では 各クラスのメンバーが半分ずつ白組と赤組に分かれて競う。自由な校風によつて、学年やクラスを横断的に競技に参加するのだ。

『さあー、体育祭もいよいよ大詰め。ここまでは白組が優勢。我らが葉山隼人の活躍を大きな得点源に、試合を優位に進めてまいりました。ですがー、』『まだまだ勝負の行方は分からないー！』

定番である競技な100m走や200m走は葉山先輩の圧勝だった。文武両道を掲げているとはいえ陸上部が強豪とはいえないため、運動量の多いサッカー部が主力メンバーとなっている。黄色い声援を投げかけられ、囲まれている彼は困惑気味である。

「ちっ」

そんな様子を見て悔し涙を流す男子、嫉妬に駆られる男子、状況に同情する男子、そして歯痒さを味わっている赤組女子がいる。

「なんなんですかあの女たち。体育祭だからって、調子に乗るな。勢い任せに抱きつくな。」

ここは葉山先輩たちがいる場所から離れた位置にある木陰だ。クラスメイトに付き添われて、休んでいるように見せかけておいて、策士は敵情視察を行っている。ちなみに草むらや木の裏に隠れるという選択は 古典的で重い女と思われるらしい。

「あーもう、なんで私赤組なんですかねー！」

『一色さんの出席番号が奇数だったから。』というマジレスは心に閉まっておき、別の返答を用意する。

「そこは、ほら。葉山先輩なら赤白関係なくちゃんと見てくれるって。」

「そうですねー。それとこれとは別ですよー。」

「あそこであつくと、葉山先輩は嫌がりそうだけだな。」

「え、まじですか、それどこ情報ですか?」

「ちよ、近い近い。」

急に立ち上がって近づいてくるから心臓が悪い。

熱中症を心配して、様子を見に来てくれるという作戦はどうやら上手くないかなかつたらしい。

「あの、一色さん、そろそろなんだけど、大丈夫?」

「はい、もうバツチリですよー!」

クラスメイトの藤沢さんが呼びにきてくれたようだ。友達がいないに等しい一色さんにも、それなりに話す者はいる。仮面とも呼べる笑顔を貼り付けて競技の集合場所へ向かっていった。

俺もそれなりに話す者たちのもとへ行こうとすれば、一色さんが小走りで戻ってくる。

「月村君、賭けは忘れないでくださいね。」

「あつ、はい」

計算された『後ろ手』のポーズにドキッとすれば、そんな返事しかできなかった。白組と赤組に分かれてしまったことに対して、気を紛らわせるための一色さんの提案が『賭け』だった。

負けたほうはなんでもいうことを聞くというもの。

俺も一色さんもそれなりには互いを分かっているので、せいぜいジュースかスイーツを奢る程度のもだろう。

だから、こんなにドキドキする必要はない。

「どこ行ってたんだ?」

白組の待機場所であるブルーシートに行けば、談笑する3人のうち1人が話しかけてきた。3人ともクラスメイトであつて サツカー

部に所属している。体育祭を自分で楽しむというより、観戦することを楽しんでいるようだ。

「ちよつと 日陰で休憩。」

「なるほど。今日暑いしな。」

「ところで次ってなんだ？」

「騎馬戦。」

正式名称、女子対抗千葉市民騎馬戦。

ルールのにはただの騎馬戦であるようだが、騎馬に乗る者が洋風の鎧を身に着けている。

「なあ、あれセイバーだよな？」

「運営、絶対FG○好きだな。」

「……動きやすそうにしているみたいだけどな。」

始まって早々、赤組の優勢。

国際科2年の雪ノ下先輩が無双している。

「鮮やかすぎるだろ……」

「お、一色さんも鉢巻取られたな。」

「ああ。……なんでニヤニヤしてるんだ。」

「さあー？」

「次、俺たちの出番だし行くか。」

立ち上がった3人に俺も続く。

棒倒し。

騎馬戦よりは知名度が低い競技だろう。総勢30名によって1本の棒を倒すという簡単なものだが、攻めと受け守りをちゃんと配分することが求められる。策や司令塔、士気が重要となってくるのだ。

葉山先輩が大将に対して、向こうは男の娘の先輩。

士気については互いに申し分ない。戦力で言えば、サッカー部をはじめとする運動部が偶然にも多いこちらが有利だ。策も、連携を重視するという定石だ。

平塚先生の合図によって、選手も応援席も一斉に盛り上がる。特に

放送席の女子の先輩が白熱している。

「我が人生に一片の悔いなし。むねんーっ!! くっ、右手が疼くッ!!」

赤組の作戦は、『ガンガンいこうぜ』に則って、自由自在に攻めと受けを行ってくるものだ。単騎突っ込んできた厨二病先輩によるオーバリアクションに困惑し立ち止まり、白組の陣形は乱れる。

「行かせませんよ、先輩。」

「……どうしてわかった?」

「身近に策士がいますんで。とびつきりあざといのが。」

緑のジャージを着た先輩の行く手を阻む。

赤の鉢巻の上に白い包帯を被せて紛れこんできた。

「あと、サッカーにはMFっていう遊撃がいるんですよ。そして葉山先輩はFW。棒倒しは攻めと受けの2つに分けることはルールではない、ですよ。」

厨二病先輩に意識を集中させて、多角的に攻めていくという作戦だったのだろう。確かにDFの陣形は崩れているが、俺たちが補助的に守備に回ればいい。赤組の受けも、攻めに集中しているメンバーによって崩されようとしている。

「そうか。だが詰めが甘いぞ。」

「それはどういう……っ!」

広角的に受けに徹していた俺たちに対して、厨二病先輩を援護するような一点突破が襲う。

攻め方を急に変更することでまた陣形が乱された。

本当は裏を突く作戦をいくつも用意していたのかもしれない。

棒自体を守る人数は5人であって少なめだ。

攻めに集中していた葉山先輩たちが戻れるはずもなく、棒は倒れた。

「先輩、やりますね。」

「なあ、お前もしかして……」

「断じて違います、好きな女の子がいるので。　　ていうか放送席のせいです。」

「……ああ、よくわかった。」

犯人はヒートアップしすぎて鼻血を出しておられる。

\*\*\*

「だーかーらー、なんでもいいんですよ。女子がこんなチャンス言ってくれるの　もうないかもしれないよ。」

「いや、勝ったとはいえ、煮えきらない勝利だったというか……。」

あの棒倒しは赤組の反則負けだったらしい。

お互いに策を練りすぎた気がするし、体育祭の熱に感化されてしまっていたようだ。

久しぶりに俺は本気になっていたから、曖昧な決着に満足していない俺がいる。

ともかく、総得点的には白組の勝利となったのだ。

「はあー、まあ、それが月村君らしいんですけど。ていうか珍しく行事にやる気出していましたね。」

夕暮れの下の公園、綺麗な指が硬貨を入れていく。

そうして、俺に自動販売機に1つのボタンを押させてくれる。

「ふむふむ、それが好きなんですか……っでもしかして私のこと意識して買ったんですかちよつと揺れてますけどごめんなさい好きな人がいるので。」

その早口を聞きとることはできず、水分を口に含む。

聞き返しても誤魔化されるだろう。

「じゃあ、また来週……っってなんで飲んでいるのでしょうか。」



「このいろ〇すはとっても価値ありますよね。　ではではー！」

透明な果実水はいつもより甘酸っぱくて、お砂糖とスパイスを感じて、その甘さと刺激が心地よかった。

## 本編

### 第1話 加速し始めた青春

イチヨウの葉が庭に運ばれてきた。

心地よい風、

夕日が照らす畳の部屋で寝転び、物思いに耽る。

青春とは虚像であり、透明である。

桃色にも灰色にも、そして、'亜麻色'にも、何色にでも染まる。  
そして、

ほんの一瞬のことで気づけば遠く過ぎ去るものだ。

まさに泡沫の夢のようなもの。

青春時代の思い出が次々と頭に浮かぶ――

「あれ？もしかして寝てます？ ふふ、悪戯しちやいますよ」

大好きな女性に似た音色で、我に返る。

「は？ 起きてたんですか？」

まるで人格が変わったように、

目を細めて低音ボイスで言われてしまった。

そんな少女に対して冷静さは保ったままだ。

「ああ、いろはか。おかえり。今日もかわいいな。」

「なんですかそれとうとうボケてしまったんですか。まだ生きていてもらわないといろいろ困るんでちゃんと長生きしてください」

その早口で特徴的なアクセントをつけた『照れ隠し』にはグツとくるものがある。

「ていうかそれ、お祖母ちゃんの名前ですよ。私はなつきですよ。」

孫娘は学校帰りなのだろう、見覚えのある懐かしいブレザーの制服を着ている。ゆるふわセミロングや容姿、性格といった点でまるで生き写しのように彼女と似ていた。

「あ、ほらほら！ 買い物一緒に行ってくれてるって約束したじゃない

ですか！」

「何か買ってやろうか？」

「っ！……ありがとう おじいちゃん!!」

自然と声が出た。

癖とでもいうだろうか。

対して、なつきは先を読まれたことで一瞬動揺したな。

「あーところで、学校の宿題ですね、お年寄りから昔の話を聞きましょう！というのがあります。」

急に思い出したように笑顔になって、

ちよこんと小首をかしげて聞いてきた。

「おじいちゃんなら、薄っぺらい……丁寧なお話してくれるかと思いましてー。」

嬉し涙が流れる。

人生を聞いてくれる嬉しさが哀しみを勝まさつたのである。

「若いころか……。」

告白できないまま終わってしまった青春と、

大好きな彼女に振り回された青春。

「いろいろあったが、

——やはり俺の青春ラブコメはどっちも……

。

。

。

。

ジリリリリリ

「うるせえ、」

目覚まし時計を叩いて止める。

なんだか長い夢を見ていた気がする。

まだ6時半でずいぶん早い時間だ。俺は昔から目覚まし時計というものが嫌いだったので、いつも『お袋』に起こしてもらっていた。窓から自動車の有無を確認すると、公務員である父さんや母さんはもう出かけていることがわかる。

毎日大変だな　　と思いつながら朝の準備を始めた。

俺は顔を軽く洗面所で一洗いし、制服へと着替える。このブレザーに腕を通して　もう約半年なのだが、学ランではないことに違和感を未だに感じている。一定数の男子の準備は一瞬だが、世間の青春を謳歌している生徒諸君はもつと時間がかかるだろう。

朝ごはんは今日も抜く。それほど生活リズムの乱れた大学生活を経験していたのである。オレンジジュースだけ飲んで、早朝から作ってくれたお弁当を持って家を出た。

自転車に跨ってスピードのある安全運転を始める。ここまで起きてからの所要時間は10分である。

俺の名は月村伊月。元21歳。

いわゆる転生者または転移者だ。神様には会っていないが　そういう一次作品や二次作品はよく読んでいたため、自分の身に起こった状況の理解はできた。

二次創作を書くために、何かの学園もののラノベを買った帰りだったはずだ。途中で別れた後、横断歩道でスピード違反の車に轢かれてしまった。あの帰りは同じ学部のリケジョと帰るとかいうラツキイベントだったはずだ。

気づいたら、

名も知らない県立高校受験当日。大学3年だった俺はとにかく焦った。転生に対する事実ではなく、試験内容に対してである。

英語なんて1年勉強しておらず、社会なんて3年以上前。定期的に中学生に勉強を教えていた経験があったとしても　この2科目の苦戦は免れなかった。

幸い、父さんと母さんは、'親父'や'お袋'に似ていたし、違和感なく俺は「いい子」だったと思う。結果が出た時、英語と社会の点数は心配されたが。

今では、

前方に見えてきた千葉市立総武高等学校に通う高校1年生だ。7時になる前に無事到着することができたので、自転車を止めてグラウンドに歩いて向かっていく。

「一色さん来てないじゃん」

思わず口に出してしまったが、ひとけ人気はないようだ。

この進学校である総武高校にもサッカー部がある。しかし俺は部員ではなく入部届も出してない。言うなれば、部員たちをサポートするマネージャーの仕事のサポートなのである。部室の鍵を開けてタオルやスポドリの用意をする。20人程度の部活であるため独りでも十分間に合うだろう。

ふと考える。

なぜ部外者の俺が鍵を持っているのだろうか と。

自問自答を繰り返していると、サッカー部員の姿がちらほら見え始めた。サッカーは観るのは好きなほうだが練習風景なんてテレビの向こうの超次元サッカーしか見たことはない。口出しをする権利も技能もないけれど、走り込みに対するやる気と時間がイマイチであることは素人にも分かる。真面目なのは葉山先輩くらいである。文武両道を心がけているという、見た目も中身もイケメンさんである。

彼の近くにはいつのまにか一色さんの姿があって、彼女の黄色い声援を受けて彼は感謝を言う代わりに笑みを返す。そもそも彼女がマネージャーとして入部したきっかけは青春ラブコメのためである。もちろんライバルは多いが、部活内恋愛として一步リードしているのではない。しかし彼は好意に気づいているが応えることはない。

さっさと自分の教室に向かう。

元々サッカー部のマネージャーじゃないし、十分にやるべき仕事もこなした。

すでに多くのクラスメイトがいて、挨拶をしたら適当に返される。

彼らとは親しいか親しくないかで言えば困る関係である。話題を振られれば会話に混ざるし、同じ空間で過ごす学友としては接することができている。転生の経験による世代ギャップよりは都会の高校特有の活発さによって躊躇してしまっている。

席に着いて物理の問題を解き始めるが、シャーペン握る手に力が入ってしまう。いわゆるガリ勉強さんにも話しかけてくれる女子が1人いた。しかし心を落ち着かせようとしていたのにタイミングが悪い。

「月村君、おはよー!」

明るい声の挨拶が耳にスツと入ってきた。

「おはよう、一色さん。朝からお互いにお疲れ様だったな。」

どこか遠慮がちに挨拶を返す。

視線は彼女の後方で彼女を直視しない癖があるが、これが意外とばれてはいない。

「なんですかそれじぶんのほうが頑張っていたのにそういうこと言ってくれますか、ちよつときめかけましたがやつぱり冷静になつてみたら無理ですごめんなさい。」

彼女の早口はまだ全ては聞き取れないが、ごめんなさいって言っていた気がする。

「ていうか、月村君もお疲れ様。」

「朝起きれさえすれば問題ないよ。今日は放課後もあるんだろう? がんばれ。」

いつだったか…。

朝練のときは早起き大変だって話から、いつのまにか俺の早起きが始まった。何を言ってるのか わからねーと思うがおれも何をされたのかわからなかった…。

彼女の背後から視線を外して解答に戻る。心臓の鼓動は速くなつたままだが、表情には出ていないはずであるし彼女も気づいている様子はない。

「そ、そうなんです。部活頑張ってるから、数学の宿題やってなかったりして。とにかくヤバいんですよー。」

手のひらを合わせて、文系の彼女が懇願してくれる。可愛い女の子が可愛い仕草をしたら可愛いのはまちがいない。

「じゃあ、昼休みな。」

「いつもいつも、ありがとー！月村君。」

いつものことだ。

答えを写させてだとか ノートを貸してだとか、そういうことは言わない彼女だからこそ『教える』ことに昼休みの時間を割く。人に頼ることの多い彼女だけれど、実はこのクラスの誰よりも裏でがんばっているのだ。要領もいいし 一度決めたことは人の力を借りてでも責任を持ってやり遂げる。

クラスでよく話す彼女は 一色いろは。

見た目の可愛さや仕草の可愛さで、学年を問わず男子に人気である。しかしそんな人気を集める彼女だからか、モテたい女子とはあまり上手くいっていないらしい。葉山先輩にアタックしかけていることを疎む上級生の女子も少なくはない。本人は気にしていないようだが 女子の友達は少ない。

ちらりと隣に座って携帯を見ている彼女を見る。

よく手入れされている亜麻色のセミロングの髪はふわつとしていて。たしか地毛だとか言っていて、染めていないのなら好感が持てる。瞳は大きめで、顔は非常に整っていて化粧を軽くしている。少々寒くなってきたし薄桃色のカーディガンを制服の中に着ている。全体的に少し着崩している。

チャイムが鳴り、担任が入ってくる。

なかなか熱い人で、思い込みが激しい教師だ。自身の理想とする、教育'をする、そんな教師であって俺はなんだか好きになれない。

多くの者が席にゆっくりと着き、スマホを机の下に隠した。

いつも通り単純な朝のHRののち、1時間目。

俺たちの国語を担当するのは、平塚先生だ。

勉強にやる気を見せるのではなく先生の魅力が高いからだろう、周りの男子と女子のテンションが上がっていた。

たしかに、

あれだけ若いのに生活指導を担当する教師だ。その人望と手腕を俺は尊敬している。背が高くスタイルもいい黒髪ロングのかっこいい系美女だ。

年齢は30前後で未婚だっけ。

なんだか隣から視線を感じてちらりと見たが、いつも通りの一色さなんだった。加えて、教卓の平塚先生から恐怖のオーラを感じた。

「あれ、明らかに枚数が足りないぞ あれ…」

作文の提出ということで、後ろから受け取り前に回していく。しかし、平塚先生の持っている作文用紙は少ない。半分ほどだったため、彼女の拳が火を噴いた。

2時間目英語 ヤバかった。

何年も英語を学んだがまだ抵抗感があって 英会話は日常生活レベル以下である。

3時間目体育 ヤバかった。

体力は人並みにあるけれど、球技は観る専門である。

4時間目物理基礎 楽しくてヤバかった。

古典物理学の初歩とはいえ 解析力学に役立てることは十分可能な範囲だ。

そして、

全学生が待ち望む昼休み。

こちらを見ながら一色さんがウィンクしてくれる。

「それじゃあ 先生、お願いします♪」

まるで音符マークがつきそうな声だ。



「それじゃ、始めるか。」

これでも教員志望の大学生だったため、高1の数学なら即興で教えられる。担当する数学教師は、毎回宿題を出す量が少なく、授業の復習及び予習が中心である。

今回もサポートする程度で、彼女は自力で解いていく。

——男子と女子がこれだけ仲良さげなんだ。世間の高校生が喜びそうな『青春ラブコメ』だろう。

しかし今日もいつもと変わることのない、

月村伊月と一色いろはの日常だった。

窓の外を見るとイチヨウが風で舞っていた。

転生してからももうすぐ9ヶ月だが、青春はゆつくりとだけれどまだまだ残っている。

## 第2話 俺によつて変わる物語

「入学してから半年間を振り返って」

『私はこの高校に来てよかったと思う。千葉県の中でも随一だと信じていたこともあつて、高校受験はとても緊張した。無事合格したときの感動を私は忘れることはないだろう。』

まず数学と物理の授業が、個人的にも教育的観念から見ても、実に面白いものだ。高校において理系科目の授業は学生の個人差が大きく出てしまう。毎回の課題による復習、これに尽きる。生徒の自主性を高めるとともに、習慣づけを可能としている。さらに教師は教え合いを推奨している。たしかに満足型学級ならではの手法であるが、この進学校なら効果的である。私もクラスの苦手な人に教えることがよくある。教えられる側のメリットはもちろん、教える側としても知識の定着を図ることができる。

さて、本題の青春については、謳歌していると言おう。そもそも青春とは虚像であり透明である。桃色にも灰色にも、何色にでも染まらる。十人十色の青春があつて、みんな違う色の青春を思い思いに過ごしているのだ。友達100人作れたイケメンもいれば、友達作りに失敗したボッチだっている。青春はまちがいつづけてもいい。なぜなら青春に定義などないのである。

結論を言おう。謳歌していると思うなら謳歌していることになる。成功したかどうかより、『わが生涯に一片の悔いなし』って言える青春こそが理想である。

※各行事ごとにもなんだかんだあつたが、無事に終わって一安心している。』

放課後、国語教師の平塚先生に職員室に呼ばれてしまった。気温が少しずつ下がってきているので暖房の効いた部屋は快適である。ここで仕事をずつとしていたら頭がボーツとするぐらいである。

さて、あまり先生に叱られるということは好きではない。自分は世渡り上手と自負しているほど宿題は必ず提出する。期限ギリギリに

なることが多いが。提出したレポートになにか問題があったのだろうか。たしかに深夜アニメ視聴後のテンションで書いたものだ。誤字脱字があっても、おかしくはない。

びっしりと書かれた1枚のA4プリントを読み直して平塚先生のほうを向く。ここは後手に回ることにはしようと考えたのである。

「なにか、問題でも?」

先生は額に手を当てて深々とため息をついた。

「月村、私が授業で出した課題は何だったかな?」

「『高校入学してから今までを振り返って』ですね。」

高校1年生2学期中盤、それは中だるみの時期の1つとされる。高校生活に慣れていくと、緊張感がなくなる。そして、なんとかなるさ! っとなる。初心忘るべからず。この課題はそれを目的としているのだろう。さすが俺の尊敬する教師の1人である。

「そうだな。前半部分は『理科教育』、後半部分は『青春』。なぜ論じているんだ? 君は大学生なのか? それとも世紀末覇者か?」

まさかの確に当てられるとは思わなかった。おそらくそう文章が見えてしまったからで、喩えに使っているだけだろう。確かに一般的な高1が書くようなものではなかったか。

よし、ここははぐらかそう。

「先生も、北〇の拳見るんですね。」

「まあな。だが話を逸らすな。」

「あ、はい。」

失敗しちゃったぜ。

「普通こういうときは普段の生活を省みるものだろう。例えば、行事や友達付き合いだ。」

自主性を重んじる学校ならではの特別活動ばかりで、学生らしさのある催しは楽しいものだった。文化祭については実行委員会と軽食喫茶のことを書けばいいし、体育祭もまだ記憶に新しい。そして、友達付き合いじゃなくてクラスメイト付き合いなら書けるな。

ここまでで文章の大まかな構成が決まった。

「すみませんでした。書き直します。」

「お前もそれを言うか…」

素直に頭を下げて挽回のチャンスを求めたが、平塚先生には呆れられた。常套手段は悪手だっただろうか。例えば、以前にこういうやりとりがあつたとか。ここは国語の授業に關しても褒めて話題転換してみるかと思案する俺に対して先生は口を開く。

「私はな、怒っているわけではないんだ。」

たしかに表情を見ても怒ってはいないことがわかる。

ちなみにタバコ吸い始めたことで尊敬の気持ちは少し薄れた。ストレスが溜まる職業でもあることを考慮したとしても、校内で吸うのは問題とならないのだろうか。

先生は真面目な顔でこちらを見てきた。

「君は部活をやっていないな？」

「芸術もスポーツも苦手です。今はサッカー部の雑用係みたいなものです。」

音楽も美術も家庭科も体育も苦手な俺はどの部活を選べるだろうか。理系の部活も見て回ったが、いい雰囲気づくりができている場所はなかった。

そして選択肢の1つであるボランティアの部活も見つけることはできなかった。

「友達はあるか？」

「いません。」

その質問には平然と答えた。ふと過去の高校生活のことが思い出されたのである。俺が理系の部活動に入らなかつたのは過去と向き合うことを恐れていたからなのだろう。あの3年間を思い出して、前世を感じて苦しんでしまうかもしれない。

「……彼女とかはいるのか？」

「生まれてからゼロです。」

遠慮がちに聞いてきた質問に対して、安心させるがごとく答える。

これは平塚先生が未婚であって、心の底から結婚を求めていることが関わってくる。俺たち高校生が青春ラブコメをしていることをどこか遠い目で見ている。

——俺の青春ラブコメはいつになったら始まるんだろう

先生は何か思案を始めて、顔を上げる。

「とりあえず作文は書き直せ。」

「はい、わかりました。」

帰宅後の課題が増えてしまったが大した痛手ではない。

文化祭楽しかったです（キャピ） って書けば、赦してもらえるだろう。深夜テンションとアニメ視聴後に書いたことが原因だったのである。そして、このまま挨拶して帰ろうかなと思った矢先に 呼び止められた。

「本当に君は似ているな。比企谷、いや由比ヶ浜だろうかか。」

由比ヶ浜さんっていう人の名前は軽く聞いたことがある。確か、美少女で男子から人気があつたはずだ。

「ともかく、君にはある部活に所属してもらおう。」

平塚先生が顧問をしている部活ということだろうか。平塚先生はタバコを灰皿に押しつけ、パソコンをログオフする。詳しく聞こうと口を開く前に席を立てて背を向けた。

背中で語る系の教師で ついていくしかなかった。

向かっていった先は特別棟。放課後であるため、楽器演奏の音や歌が響いている。

「あの、校舎の中ってことは、音楽か美術で？」

どちらも未経験の上に、小学生レベルあるかどうか不安なところである。人数と許可さえあれば部活が作れるこの学校ではバンドや軽音が多い。せめて遊戯部がいんだけだな。

どこかへ連行される途中 おそろおそろ聞いてみた。

「着いてから詳しい説明をしよう。……着いたぞ。」

立ち止まった先は1つの普通教室。  
今の俺からすれば、

——何の変哲もない場所だった。

先生は、ドアをノックする。

「どうぞ。」

男子の低い声が聞こえて、平塚先生は先に中へ入っていく。

男子1人と女子2人が暗い表情を浮かべていた。

1つの長机の長い辺で、男子と女子たちには距離があった。

「お前は……」

先輩と雪ノ下先輩はそれなりに知っているけれども、もう1人の女子は知らない。。

「新入部員を連れてきたんだが……なにかあったのかね？」

誰も答えないという沈黙が続き、ようやく、どこか猫背の男子が口を開く。

「……いや、何もありませんよ。」

「そうか。改めてきたほうがいいかな。」

先生は苦笑した。

それは誰にでも嘘だとわかる。

2年生は最近修学旅行に行っていたし、そこで何かトラブルがあったのだろうか。

「それでも、構わないですけど。」

続けて低い声で先輩が言う。

その言葉からはすぐに解決するような問題ではないことがわかった。

事情も知らなければ、彼らの事をよく知らない、そんな俺がこの暗い雰囲気但至少でも緩和する方法は話題転換だ。

「はじめまして。1年の月村伊月と申します。どこかの部活に入部を希望したいと相談しまして、平塚先生に連れてこられました。できれ

ばどのような部か教えてくれませんか？」

雪ノ下先輩がようやく口を開く。

「……そうね、ではゲームをしましょう。ここが何部か当てるゲーム。さて、ここは何部でしょう？」

思わず首を傾げた。

一体なにがはじまるんです？と脳内でダンディな男が言うほど、出鼻を挫かれてしまった。加えて、先輩が目を見開いていることが目に入った。

周囲を見渡して情報を集める。冷めてしまった紅茶、読んでいた本、1つしかない長机、そしてここは屋内なのだ。

「文芸部、でしょうか？」

「はずれ。」

フツと笑みを零して雪ノ下先輩は不正解を言い渡す。

手作りであろうお菓子の包みから独特な甘い臭いがする。クツキーが出していい香りではない。焦げてしまったようで色は黒い。

「調理部、いや化学部でしょうか。」

「し、失礼だし！」

茶髪の女子に怒られてしまった。

しかしどこか顔は明るくて、ツツコミ属性持ちなのだろう。

「奉仕部だ。困っているやつに救いの手を差し伸べる。それがこの部の活動だ。」

先輩がそっぽ向きながら口を開けば、気まずさは少しだけ穏やかになっていた。

平塚先生も笑みを零す。

彼らの場所に俺が介入することで、どういう風に物語が変わっていくのか楽しみにしているとでも言わんばかりだった。ここがどの物語の世界か分からないし、もしかしたら単なる平行世界かもしれない

い。バイオハザードが起きて、奉仕部ぐらし！なんてさせないでくれよ。異世界転移もしたくない。まあ、それらはもちろん転生経験のある俺の妄想に過ぎない。

そうそう、先生の出した『依頼』は

「高校生の悩みを聞かせろ。そして高校生らしく悩ませろ。」

先輩も、俺の『違和感』が何かを考えていた。



### 第3話 初めての依頼は前途多難のようで

いつも通りの時間に起きて学校に行き、何気なく授業を受ければ、すでに放課後である。部活に全力疾走していった者、授業で疲弊して背伸びをしている者、帰宅することなくまだお喋りを始める者、みなそれぞれの青春を思い思いに過ごしている。

「今日はどうするの?」

隣の席で座ったままの、一色さんは携帯をいじりながら話しかけてくる。先ほどの世界史の授業では机の下で操作していたが、今は堂々としている。かくいう俺も前世同様あまり気が乗らない科目であるため、本日課された数学の宿題を消化していたのだが。

「人に呼ばれているから 無理だな。」

一色さんの質問はサッカー部のマネージャーのお手伝いをするかどうか、そして俺は手伝えないことを伝える。ちなみに奉仕部には半強制的に行かなければならないのだ。平塚先生の拳の味を最も知っている比企谷先輩が帰り道に語ってくれた。

「女子?」

急に真顔になるからドキツとしちゃう。

「先生に、かなー?」

「そうですか♪ 私もちよつと用事あるから行けないですよー。じゃあ、また明日です!」

可愛い女子が可愛い敬礼をすれば可愛い。

ところで彼女も行けないとなると残されたマネージャーたちが苦勞しそうに思える。しかし あの葉山先輩のイケメンさのおかげである。参加率が低い女子もいるんだが、マネージャーの人数自体は多い。特に午後練のときはギャラリーまでいる。それにしても、葉山先輩に猛アタックをしかけている一色さんが諸事情があるとはいえ休むのは珍しい。

「月村君とマジ仲いいよね。」

「それなー」

「わかるー！」

一色さんが鞆を持って教室から出て行って、俺も荷物を纏め始めていたところへクラスメイトが近づいてくる。先ほどまで携帯片手に大声でお喋りをしていた女子グループである。派手な金色に染めていて、髪型も主張が激しい。葉山先輩狙いのはずだとか、にやんついてるよねだとか、はげどーだとか、もう彼女たちの会話についていけない。

もちろんついていく気もない。

「カラオケワンチャンない？」

「あるあるー！」

「月村君もどう？」

ようやく俺に話を振ってきたが、やんわりとお断りを入れる。心の中では完全否定であるのはバレていないようだ。

なぜカラオケという遊戯で精神を摩耗しなければならないのだろうか。大学でも経験したが、やはりカラオケに行くメンバーは厳選したほうがいい。お互いに知らないアニソンやボカロを歌ってもいい雰囲気こそ至高である。

「えー、付き合いわるーい。」

「ガチしょんぼり。」

興味を失くして離れていってくれたので、荷物を持って教室から出ていく。ここまで冷静を保った俺を褒めてほしいものだ。イライラしていた要素は一色さんの陰口に対してである。根も葉もない噂をでっちあげて話題の1つとしていた。

ここでもし彼らに文句を言ったとしても、その場の解決でしかない。加えてスクールカースト上位である者の言葉にしか耳を貸さないだろう。自分に都合よく人の性格や考え方は変えることはできない。だから、できることは敵も味方も作らず中立と見せることだ。影ながら一色さんをサポートしてあげればいい。

そうやって、自分に言い聞かせる。

枯れ葉が目立ってきた外の景色を見ながら、拳には自然と力が入っ

ていた。

奉仕部の扉を開けば紅茶の香りはするけれども、どんよりとした空気が流れている。軽い会釈とともに席に座り、持参したラノベを開く。比企谷先輩や雪ノ下先輩は各々真剣に本の字を見つめている。由比ヶ浜先輩は携帯をいじりながら たまにキョロキョロしている。言葉はなく、行動することすらなく静寂の時間は流れていく。奉仕部の活動は不定期である。総武高生が直接依頼を持ってきたり、サイトを介して依頼を持ってきたりする。

だから、基本的には暇なのである。

つまり、この場所が換気されたことはこの1週間はない。1つの長机の端と端で、男子2人と女子2人は分かれている。

ノックとともに平塚先生が入ってくる。返事はまだしていないが、もしかしたら転機になるから無意識に急いでいるのだろう。引き連れていたのは2人の女子であって、『依頼』である。癒し系美少女生徒会長の城廻めぐり先輩と、一色いろはだった。

「あ、いろはちゃんじゃん。」

由比ヶ浜先輩は口を開くと、一色さんは首をちよこんと傾け笑顔で挨拶を返す。

「結衣先輩ですよね、こんにちは〜」

「うん、やつはろ〜」

これが彼女たちのコミュ力の高さか。2人とも総武高生の中でもトップを争う美少女である。お互いにそういう視点で見えてはいないだろうが、校内の有名人であることはまちがいないので知っているのだろう。

「やつきぶり。」

「えと、はい、こんにちは。」

挨拶をすれば、戸惑いつつ返してくれる。確かに言っただけけれども、まるで俺が奉仕部にいることを困惑しているようである。彼

女の用事が依頼に関係することなのかと、俺も困惑している。

先輩たちには俺たちがクラスメイトだということが伝わったようである。

「2人は、一色さんと面識あるんだね。……もうすぐ生徒会役員選挙があるのは知ってる？」

城廻先輩はうんうんと頷きながら言って、真剣な表情となって本題に入り始める。生徒会は学校行事の運営や各種委員の上に立つ組織だ。城廻先輩は3年生であってそろそろ任期が終わり、この選挙で次の代へと変わる。2年生を中心として選ばれていくため、詳しくは確認していない。

「ええ。既に公示も済んでいますね。立候補者も発表されていたと思います。」

「さすが雪ノ下さん。そうなの。もう、副会長以外、は発表されてるの。」

代表して部長が口を開くと、城廻先輩は笑顔で軽く拍手する。ちなみに彼女の素の行動であって、表情豊かで純粹無垢な天然の癒し系美少女である。世知辛い生き方をしている比企谷先輩は頬が緩んでいる。

「それで、選挙も公示までは終わったんだけどね。」

「こうじ……？」

「確かに、選挙の日にと立候補者は一度発表されましたね。」

これは分かっているなと思っただけで、由比ヶ浜先輩をフォローする。市内ではなかなかの偏差値を誇る総武高合格は並々ならぬ努力をしたのだろう。ガッツはあるので、よく宿題を手伝っている。そんな先輩は感謝をジェスチャーで示して、誤魔化すように笑う。

「そ、それでそのコウジがどうかしたんですか？」  
分かってないじゃん。

「一色さんはその生徒会長選挙の候補者なの。」

城廻先輩は一色さんを見ながら言いきった。

それは俺も初耳だったため、思考が止まる。

「あ、今向いてなさそうとか思いませんでした？」

「いや、別に。そういうんでも……」

一色さんは計算高い笑みを浮かべて尋ねると、比企谷先輩は屈した。おそらくそう思っていたのだろう。

ようやく俺も思考を再開する。

一色さんは生徒会長に立候補するとは思えない。たしかに意外と真面目で責任感もあつて、努力家だ。しかし1年生で生徒会長になるということは、人望と度胸が必要だ。加えて、立候補の理由が分からない。葉山先輩が生徒会長やるんだったら意地でも副会長やりそうだが。

まさか先ほど聞いた陰口のうち、『あの1つ』は本当だったのだろうか。直接聞くことはなかったとはいえ、事前に対策することができなかった。そんな自分に腹が立ってきた。

「それで、何が問題が？」

部長が話を進めるために口を開くと、城廻先輩が答える。

「一色さんは生徒会長に立候補してるんだけど、当選しないようにしたいの。」

「……要は選挙に負けさせてほしいってことですか？」

「えつと……つまり、生徒会長をやりたくないってこと？」

八幡先輩や由比ヶ浜先輩は不思議そうに問いかける。奉仕部各々が聞きたい情報を少しずつ引き出していく。

「あ、はい、そうです……。」

一色さんはおそろおそろ答えた。

表情は曇っていて、クラスで見せた笑顔は仮面に過ぎなかったのか。心の底では今日の公示に対して『悩み』を持っていたのだ。すでに冷めているマツカンを口に含む。

それに鬼の大和撫子がいることだし、せめて俺が言うことにする。本人からは言いづらいだろうし、今からでも力になりたい。

「一色さんは立候補されられたってことですね。あまり良く思っていないやつらが拙い悪戯をしたんでしょう。」

先輩たちは一色さんのせいじゃないと納得してくれたようで、各々考え込む。おそらく熱血担任は 自分のクラスの生徒が生徒会長になるだろう状況を喜んでいいる。そして自分に都合のいい理想のサポートを始めるだろう。すでに聞く耳を持たないので、生徒指導である平塚先生を通して奉仕部に来たのだろう。

「無論、しでかした子らにはこちらで指導する。推薦人30人の署名は本名だったしな。」

平塚先生が口を開く。

少しは怒りが呆れに変わってくれた。

「応援演説で失敗すればいい。応援演説が原因で不信任になるなら、一色はノーダメージだ。」

一早く先輩が解決策を提示する。

一体どれだけの人がこんな手を思いつくだろう。どんな手段を取っても、助けを求める人を助けることに先輩は長けている。確かに危ういものだがその考え方は、今の俺には眩しかった。しかし空気がさらに重くなり、賛成の声を出すことはできなかつた。まさにその解決方法が地雷であつて、比企谷先輩も失言をしてしまったと口を閉ざす。

もし先輩に手札がもつとあればよかつたのだが、数少ないカードで最も扱いやすい『自分』を使ったのだ。本人は分かつていて、その『やり方』を選ぶのだ。おそらく先輩は1度どころか何度も、自分を犠牲にしてきた。自己犠牲をしているのだと周りからは見えてしまう。そして雪ノ下先輩や由比ヶ浜先輩はそんな『やり方』を拒絶してしまつたのだろう。

もちろん、決して彼に対する嫌悪などではない。

優しさが裏目に出てしまつたのではないか。

真実は、今の俺にはわからない。

だから先輩を同情及び憐れむことはまちがっている。

だから俺は1人の後輩として付き合うだけで、向き合うことはしない。

## 第4話 後輩と先輩

30人もの推薦人、おそらくそれ以上の人数によって拙い悪戯が行われた。一色さんは強制的に生徒会長選挙に立候補させられることとなったのだ。今の状況として、立候補者は彼女だけであって信任投票である。具体的な依頼内容としては、生徒会長になることを阻止するということだ。

解決策は、今のところ3つある。

まず比企谷先輩の言うように応援演説が原因で落選するという方法だ。具体的なやり方はともかく、確実に落選させるには当日の雰囲気用最悪にするレベルの演説が求められる。依頼人である彼女の名誉は傷つけられることはないが、一体どれほどのヘイトを『独り』が負うことになるだろうか。

もう1つは、新たな立候補者を擁立することだ。この学校でも生徒会選挙とは人気投票のようなものだ。美少女であつて人気のある彼女から票を確実に奪える人物が必要となってくる。また、その立候補が生徒会長という職に前向きでないと、誰かを犠牲にしていることに他ならない。

最後は、あまり表沙汰にできない方法だ。学校側が得票数を操作して、結果だけ提示するということ。これなら彼女に確実に勝てる人物でなくとも、依頼は完遂することができる。しかし選挙管理委員や学校側の落ち度とはいえ、認められることはないだろう。

冬が近づいてきたのがわかる。

早めの帰宅であるのに、すでに夕暮れどきとは言えず暗くなってきた。自転車の速度で相対的に感じる涼しさもすでに冷たい。

入部直後から比企谷先輩と帰宅することが多くなり、ラノベやアニメの話を中心に雑談する。前を向いて並走しながら目を合わせず、独り言を呟き合うことで成立する会話に過ぎない。だから、奉仕部の過去については触れたことはない。それでも彼と話すというのは、信頼



できないクラスメイトと言葉を交わすよりはるかにマシだった。

おそらく先輩も一定の距離を保って話す俺を気に入ってくれているのだろう。インドアで家が大好きな先輩が、駅行こうぜ という一言を呟く。部活の後輩とはいえ、人を遊びに誘うことを選んだのだ。静かに笑みを浮かべて、わかりました と呟く。やはりお互いに静寂を好んでいても、時には話し相手を求めるのだ。

自転車を、偶然見つけた無料の駐輪場に停める。少し駅から離れていて、それほど多くはないので帰りも出しやすいことだろう。秋葉原に敵わないとはいえ、中央駅にはアニ○イトや映画館といった施設が集まっている。何気なく書店に寄りV R M M O R P Gに関するラノベの新刊を1冊だけ買って、先輩と合流する。

数多くある喫茶店の中から、某有名ドーナツ店を選択して入っている。某有名コーヒー店は一瞥したものの避けたため、独りで入店したことはないのだろう。かくいう俺も一色さんを頼らなければ注文すら憚られる。

「おや、珍しい顔だ。」

小さめでいろいろな味を楽しめる球の集合体を買って、席に座ろうとしたら話しかけられた。ランキング上位に入るだろう2つを買った先輩に対して視線は向けられており、知り合いなのだろう。たぶん大学生の女性がいる4人席に会釈して座る。

「……まじかよ。」

そう小さく呟いて先輩は渋々座ったところ、あまり得意ではない部類の人らしい。嫌悪しているのではなく、警戒しているようで動きがぎこちない。無料でもらった氷水を口に含んで冷静を保とうとしている。

「へえー、比企谷君が男友達を連れてくるなんて珍しいね。君のおかげでちゃんと座ってくれたよー。」

「……友達じゃなくて 学校の後輩ですよ。それに男友達も女友達もいませんよ、1人も。」

油断すれば多くの男たちが惚れてしまうような美貌の彼女とは目を合わせず、眩くように告げる。ここで部活の後輩とは言わなかったあたり、目をつけられれば面倒ごとになると思ったのだろう。平塚先生の拳の味同様その恐怖を知らないために 助けられたと言っていないのか悩ましいところで、心の中で苦笑いするしかないが。

「はじめまして、月村伊月って言います。比企谷先輩とはボツ仲間といったところでしょうか。」

「ふーん、わたしは雪ノ下陽乃。よろしくね。」

まるで観察するようにこちらを見つめられて、自己紹介を交わす。しかし、その苗字には思わず反応しそうだった。比企谷先輩と知り合いたいよりは、雪ノ下先輩の姉もしくは従姉妹なのだろう。ベクトルが違うとはいえ並々ならぬ雰囲気纏っている。

視線を本に戻したことを見るに、そこまでは目をつけられなかったようだ。彼女の目を気にしながらも、外に冷たく硬いチョコがかかっている中には甘いクリームを含むフレンチクルーラーへ先輩はがつつく。俺はそれぞれ違うトッピングを持つボール状のドーナツを1つずつゆつくり味わっていく。

「こんなところで何してるの?」

「とりあえず、暇つぶしを。」

「私は友達とご飯行くまでの時間つぶしなんだ。」

「じゃあ、お邪魔にならないうちに退散しますね。」

「えー、まだ先の話だよ。いいじゃん、一緒に暇つぶししようぜ」

そう言っただけで近づけられてきた綺麗な指から、先輩は手のひらを全力で逃がす。確かに彼女の甘い囁きには甘い毒があるように思えて、先輩は常に離れる方法を模索している。蠱惑的な笑みを浮かべて姿勢と視線を変える。いくつもの仮面があるように、人によって接し方が変えるのだと、前例があったため理解する。

「比企谷くんみたいなタイプが一番いいよね。後輩くんもそう思うでしょ?」

「ここで言われているのは、付き合いたい異性のタイプなどではない。簡単に言えば、一定の距離を保って話してくれる『独り』だとい

うことだ。おそらく才色兼備である彼女には、男女問わず多くの人が集まるのだろう。中にはお近づきになりたい存在としてアタックをかけられる。

一色さん及び多くの女子にアプローチをかけられる葉山先輩もこういう気持ちで、だから、誰とも付き合うことはないのだろうか。

「まあ、そうですね。」

「そういうところは君もいいよね。比企谷くんが気に入ることも頷けるよ。」

俺や先輩が話しかけることがなければ会話は途切れる。しかし、どうしても先ほどまでいた暖房のない場所と比べてしまう。これが心地よい静寂なのだと感じてしまい、久しぶりに読書ができた時間だったのではないか。

「雪乃ちゃんは元気？」

「……まあ、普段と変わらず、ですかね。」

「それはよかった。それで、調子は？」

あまり良い雰囲気を築いているとはいえないことを先輩は誤魔化した。また、どうやら姉もしくは従姉として 雪ノ下先輩と先輩の関係が気になるようである。

読書に集中することにして、そういった事情には踏み込まないことにする。話が飛び火したらたまらないのである。

俺自身、踏み込んでほしくないのだろう。

生徒会選挙というワードに対して、意識が現実に戻ってくる。どうやら現生徒会長である城廻先輩と知り合いのようで感慨深く話しているだけのようだ。再び、意識を仮想現実に戻そうとしたが、近づいてきた海浜の女子高生3人に対して意識を向ける。

「……折本。」

「うわ、超ナツいんだけど！レアキャラじゃない？」

呟く先輩の表情は硬くなっていて、出会いたくない人と出会ってしまったことがわかる。初対面のメンバーも多いので互いに自己紹介を交わしていく。どうやら中学時代の同級生の1人であって、過去に

1度告白したことがある1人らしい。

「まあ、昔のことなんで……」

そう呟かれた言葉だけしつかりと耳に入ってきた。誰もが優しい笑みを浮かべて 思い出の1つとして数えてくれた。しかし、先輩が本気だったことはこの場では俺にだけ伝わった。それは失恋の経験があるかないかによるのだろう。携帯に登録された1つのアドレスを宝物にして、クラスで交わす1言を胸に刻み付けた。人によって初恋は根付いていて、思い出や笑い話になんてできないのである。そして、失恋の経験は一種のトラウマとして残る。

ここまで思考して、

過去に告白する勇気がなかったことで後悔が蝕み、

今も告白する勇気がないことで諦めを抱いてしまう。

2度目の青春ラブコメもダメそうだ。

葉山先輩の話題が出てから雪ノ下さんは一早く電話して本人を呼び寄せた。折本さんたちのグループのうち1人が彼とお近づきになりたいとのこと。願いに応えたのだろう。もつとも彼女にとつて遊びの範疇なのだが、葉山先輩からしてみればいい迷惑である。こういったことに慣れているようで、15分もすれば折本さん達は帰っていった。

「うん、いい感じに時間もつづれた。じゃ、わたしはもう行くね。比企谷くんの後輩くん、付き合ってくれてありがとうね。」

そう言つて彼女は帰つていったが、嵐が過ぎ去ったといつてまちがいはない。残されたのは会話についていけなかった被害者と言つていい男3人のみ。葉山先輩にずっと聞きたいことがあったが、先に口を開かれた。

「君たちは……ヒキタニ君は、陽乃さんに好かれているんだな。」

「は？アホか。あれはからかつてるだけだろ。」

「あの人は興味が無いものにはちよっかい出したりしないよ。……何もしないんだ。好きなものをかまひすぎて殺すか。嫌いなものは徹

底的につぶすことしかない。」

クスッと笑った先ほどまでの表情は消え、真剣で暗い表情で言った。その事実に対して先輩は何も言わない、何も言うことはない。その会話は終わったとみて、月村伊月はようやく声を出す。なるべく嫉妬を抑えながら、聞きたいことを直接聞きだす。

「じゃあ、さっきの女子とか、みんなの好意は気づいているんですね。他にもサッカー部のマネージャーとか。今のところ、葉山先輩が『1人』を選ぶことはありますか？」

「……ないよ。」

俺の真剣な表情に面じてだろうか、本心を答えてくれた。

ここで俺が出せた勇気に、どれほど俺は救われたか。

「そうですか。葉山先輩も頑張ってくださいね。」

この夜、

葉山先輩は敵ではなくなった。

今は、これだけでいい。

たったこれだけなのにこんなに勇気があるんですね、先輩。

## 第5話 歪な転生オリ主

11月も末となり、

今、奉仕部部員4名はバラバラになっている。

どれだけ方法を並べたとしても新しい立候補者を擁立することが最善、いやその方法を選択するしかなかった。しかし、2年生であつて交友関係が広い由比ヶ浜先輩ですら、新しい候補者を見つけることは容易くなかつたのだ。名誉職であるとはいえ、忙しいイメージが浸透してしまつていふことによる影響も少なくはない。それよりも、歴史ある進学校であるからこそ、相応しい人物がなるべきという風潮が漂つているのである。

だから、雪ノ下先輩が立候補することを宣言し、由比ヶ浜先輩も続いて立候補した。2人の胸中は分からないが、確かな決意を持つている。

このままいけば2人のうち1人が一色さんに勝ち、1人が奉仕部から距離を取ることとなるだろう。そして、奉仕部という場所は何か別の場所となつてしまうほど脆くて儂いものなのだと入部したばかりの俺ですら理解した。奉仕部に近しい者みんなが感じるのではないか。

「葉山せんぱーい！」

「ナイスシュート!!」

「キヤー!!」

黄色い声援が寒空に響く。

こういった応援や歓声もマネージャーたちの仕事であつて部員たちを活気づける。

奉仕部は、全国優勝といったチームの目標がないからだろうか。何気なく放課後に集まり、時には依頼を受けて頭を悩ませる。そして成長していく。どちらも人の集まる場所だと言えるのに、こちらには華やかな青春が表面的に表れていた。けれど、青春に優劣をつけることなどできないし、つけようとすることはまちがっている。

比企谷先輩は、何もしない。

俺も奉仕部に顔を出すことはなくなり、サッカー部のサポートを何気なく行う日々である。このままいけば、一色さんの依頼は解決する。だが、この解決策が正解なのだとは言いつけることは奉仕部の一員としてできなかつた。

「べー、マジですごいわー」

「ああ、どうもです 戸部先輩。」

茶髪であつて見た目も口調もチャライのに、ムードメーカーかつ気が利く先輩である。練習終わりで身体が冷えないようにタオルで汗を拭きながら、話しかけてくる。

俺が考え事をしながら行つていたのはサッカー部応援サイトの作成である。先日行われた海浜高校との練習試合の結果を寒空の下のベンチで、膝にマイノートパソコンを置いて纏めていた。マネージャーの人数の多い午後練については1週間に一度様子を見に来る程度である。

「伊月君が来てからホント助かるわー。こういうの得意なのいなかったしー。」

相変わらず独特なイントネーションに対して、軽い会釈を返しておく。

あまりアクセス数がないことはご愛嬌なのだが、部員たちのモチベーションアップに繋がるなら幸いである。元理系大学生として持ち合わせていたスキルを活用したのだ。そういえば最近プログラミング学習の必修化があつたし、こういつたスキルが当たり前になってくるのだろうか。かくいう俺も日常生活レベルであつて、研究者レベルまでには至っていない。

「じゃ、俺着替えてくるわー。おさきに。」

「はい、お疲れ様です。」

グラウンドを見るにすでに片付けも部員たちが終わらせていて、俺が手伝うこともないだろう。葉山先輩主導の下、洗濯も彼ら自身で行うようになったのである。なんてホワイトな環境なのだろう、マネージャーたちは歓喜していた。

パソコンを鞆に入れ、1年の駐輪場へゆつくりと向かう。すでに自転車はほとんどない、そこに灯りに寂しく照らされた一色さんがいた。今日はサッカー部の方へ顔を出しておらず、帰ったものとはばかり思っていたのだが。

「お疲れ様。」

そう告げた彼女の声はどんよりとしていた。

俺を待っていたかどうかなんて自惚れたことは聞かない。

家族にも教師にもサッカー部の先輩にも言えない悩みを誰かに聞いてほしいのだ。比企谷先輩たちはその誰かに当てはまりうる人であつたが、聡い彼女は彼ら自身が問題を抱えていると分かつたのだろう。平塚先生も仕事で忙しかつたのかもしれない。顔が広くて聡い彼女は、いつも『独り』抱え込む。味方を作ろうとして敵を増やし、加えてある一定の味方に対して迷惑がかかりすぎることを嫌う。

「帰ろうか。」

「はい。」

自転車を手で押しながら門を出る。

こうして2人並んで帰宅することは初めてではない。クラスメイトへの愚痴を傾聴したことから始まつた。友達とも言えず、知り合ひとも言えない、この関係は言葉にはできない。強いて言うなら、クラスメイトを超える何かだ。

もし名付けたのなら、そこで崩れさるかもしれない。

「今日、担任に呼ばれました。是が非でも生徒会長にしたいみたいです。」

「あの熱血担任は 話を聞かないからな。」

「ですよ。」

静寂が訪れるが、俺から話題を提供することはない。

今、彼女と向き合っているのは確かだ。

「今日なんか、生徒指導室に呼び出して演説の練習させられたんですよ、いい迷惑です。」

「それは最悪だったな。」



「あー、それに、そもそも私に確認しないからこうなっただけですー！」  
「ああ、マジでそうだよな。俺もよく苦労させられてる。」

再び静寂が訪れたが、彼女の表情は少しだけ穏やかなものになっている。ただ彼女の話にきちんと耳を傾け、同じ立場として確かな同意を示していっただけなのである。一定の距離を保ちつつ、傾聴というアプローチを自然と行ったのだ。彼女の言い分は理解できるところが多いし。

「ふう、ホント、楽でいいです。」

「それはなにより。」

今一瞬だけ素を見せてくれた。

必要以上に踏み込まないけれど、俺から離れることはない。近しい者と遠い者、どちらでもない存在というのは時には必要になってくる。彼女は近しい者を増やすことを誰よりも求めてしまうから、遠い者がどんどん増える。

「それで、依頼はどうなっただけですかー？」

声色が変わり、よく学校で見せる笑顔となった。

だから、普段の話し方に切り替える。

「雪ノ下先輩と由比ヶ浜先輩が立候補するのは確かだぞ。」

「なら大丈夫そうですね。でも、何かあったりしますか？」

「これが正しい解決策なのかなって。比企谷先輩も乗り気じゃないし。」

「……そうですか。」

一色さんから見れば、今の俺は浮かぬ表情をしているらしい。

奉仕部の先輩たちの関係が続けさせるには、俺が立候補する手がある。もちろん一色さんや先輩たちに勝つことは容易くないだろう。それでも、選ぼうとしている俺がいる。

「立候補するなーんて言わないでくださいね。月村君が生徒会長になっちゃったらこういう時間もなくなるかもですし。」

「お見通しなんだな。確かに俺も嫌だな。」

「です……っ！ほんとうに頼りになる人だとはおもいますけどこのま

ま付き合うのは好きな人がいるので無理ですごめんなさい。」

「お、おう。」

しどろもどろに俺は返事をする。

一色さんが納得する最善手を思考しながらであったため、またも彼女の早口を聞き取ることはできなかった。加えて、すでにいつも別れることとなっている公園まで来たので聞き返すことはできない。

「そ、それじゃあ、また明日ですー」

「ん、また明日。」

彼女は手を振って公園から出ていった。

おそらくこの近くに住んでいるのだろうが、詳しい場所は知らない。彼女がここまでは同行させてくれているのだから、応えることはまちがっていない。

この一定の距離は寂しく、この信頼は心地よかった。

自転車に跨って反対方向に向かおうとしたところ、走ってくる足音に対してゆっくりと振り向く。

「いつもありがとう。」

儂い表情を浮かべる1人の女の子はそれだけ告げて去っていく。

彼女にとって俺は特殊な人物なのだ。

通常、彼女は助けてくれる人を自分で作る。自分の長所を活用して多くの人から愛されるように気を使うのだ。しかし世渡り上手に思えて、いいイメージを守ることを誰よりも頑張っている。例えば、自分磨きや人脈づくりがあてはまる。

俺と彼女の出会いがクラスで隣の席になったことに過ぎない。生きることを頑張ることを諦めかけていた俺にとって彼女は次第に眩しく見えていった。そんな彼女のいろいろな姿を知りたいと思ったのはいつだったか。

計算高い女子、一喜一憂する女子、真剣な女子、素の女子、1人の女の子、すべてが合わさって『一色いろは』である。

『○○伊月』と『月村伊月』のように揺れることはない。さっきだって、俺は寂しさと喜びがそれぞれ溢れてきた。

やはり転生オリ主の青春ラブコメはまちがっている。

離れることと近づくことを同時に行ってしまうのだ。この違和感が彼女にとって、ちょうどいい安心感をもたらしているのだと思う。なぜなら、彼女は人が離れすぎることとも人が近づきすぎることとも嫌うから。

しかし、先日出した勇気のおかげで喜びの方が勝った。<sup>まき</sup>  
だから俺にとっての最善手を考え始めてしまう。

## 第6話 俺がいる証明

放課後、ある用事を1時間と30分ほどで済ませて学校を出た。  
寒さから逃げるように素早く駅近くのサイゼに入る。

ドリンクバーはあるのはもちろん、他のファミレスと比べて安価なものが多い。ドリアやピザは美味しくコスパ最強である。和食や焼肉といった別ジャンルに手を出していないところも好きだ。

すでに多くの高校生がいて、宿題を終わらせる者、2人でカフェを楽しむ者、晩御飯として来た者、みんな思い思いの青春を過ごしている。待ち合わせしています と店員さんに告げて、比企谷先輩のもとへ向かう。

すでに6人という大所帯となっていて、自己紹介を交わしていく。

比企谷先輩のクラスメイトの厨二病の材木座先輩、女子の川崎先輩、男の娘の戸塚先輩。そして、比企谷先輩の妹さんの小町さんと、川崎先輩の弟の大志君。

2人掛けの机を引っ付けて、ドリンクバーを頼めばようやく腰が落ち着けた。今のところ、事情を知らないメンバーたちに和気藹々と説明したところのようだ。厳格な会議などではないから、時間がかかることは承知である。

「それで、準備はできたのか？」

「はい。推薦人を集めることはサッカー部を中心に声をかければ余裕でした。あの熱血担任のサイン……手続きに時間がかかりましたね。」

俺が遅れた理由は30人分の署名を集めるためであって、あの担任の長話のせいである。感情豊かにクラス2人目の生徒会立候補を喜ぶのは遠慮してほしかった。比企谷先輩は頷くが、他のメンバーは首を傾げる。

「ここから本題に入る。まず雪ノ下と由比ヶ浜の残留という小町の願いを最優先する。他の候補の擁立はないとすると、生徒会長候補は一色いろは しかない。」

ここまででは理解してくれたようで、みんなは頷く。

妹さんを引き合いに出したのはたぶんシスコンだからだ。他の候補の擁立に関しては2年生で顔の広い由比ヶ浜先輩ですら無理だったから、この場の俺たちでは難しいだろう。公示の予備日まで時間はあまりない。

「ここに一色も誰もダメージを負わないという条件が追加される。」

「一色さんが生徒会長になりたくない理由を全て解決すればいいんです。そうすれば、依頼内容は撤回される。その一手として、俺は副会長に立候補してきたってわけです。」

「それって月村さん自身はいいの?」

小町さんは鋭いところを突いてきた。

比企谷先輩の言った言葉には重い意味がある。誰かが傷つかない世界を作ることには誰かを犠牲にしていることに相違ない。宝くじで大金が当たる人もいれば、宝くじにお金を費やし続ける人もいる。受験で合格する人もいれば、不合格となる人もいる。

「気になる女子と生徒会活動やるって憧れませんか?」

俺にダメージなんてないのだ。サッカー部のマネージャーのサポートを続けていることと同じで、勉強を教えることと変わりない。誰かのために役立ちたいという思いがあるから、ボランティアをやったしアルバイトもやったし教職を履修した。

彼女に振り回されてきたけれど、傷つけられたという自覚を持ったことはない。

誰も口を開かない、何かまちがっていたのだろうか。

「……ともかく、交渉材料を揃えなければならぬ。川崎、お前が生徒会長にいいかもって思う奴、挙げてみてくれ。」

「雪ノ下と由比ヶ浜、それに葉山。海老名は仕事はできるだろうけど向いていないね。三浦だけはないと思う。……それから、相模かな?」

「はあ? 相模い?」

「文化祭、それから体育祭でも委員長やってたし。」

2年生を中心に名前を出しているのだろう。俺や小町さんたちは

話についていけないとはいえ、重要なことである。相模先輩は体育祭委員長として、時には あたふたしながらもテキパキと働いていた気がする。

「あと、……あんたとか。」

「ああ、そりゃ面白い。けど、月村のように30人も推薦人集められねえんだ。」

川崎先輩は比企谷先輩を向いて遠慮がちに言った。

確かに比企谷先輩が生徒会長ひいてはリーダーシップを発揮するのは面白い。多くの人を寄せ付けることはないけれども、確かに俺たちはここに集まっている。大学の研究室のような、小数精鋭の場所だからこそ輝きそうである。多数の大学生を相手に、講義ができるかは疑問であるが。

「葉山はわざと外して、海老名さん、三浦、相模、ついでに戸部。そして一色に生徒会長候補になってもらう。……その、戸塚も名前借りていいか?」

「いいけど、変なことに使わないでよ。」

「ありがとう、戸塚。」

「ん?候補は一色さんにやってもらうんじゃないの?」

「ああ、最終的には一色だな。だからまあ、これは当て馬だな。勝手に名義を借りる。そして、とにかく推薦人を集めまくる。」

「推薦人を集める過程が署名制である以上、1人につき1票。もし候補者を多くすれば、雪ノ下先輩と由比ヶ浜先輩が得る票が減ります。しかし、実際に立候補させるのではなく牽制に過ぎませんが。」

「つまり最後の一手として一色いろはへの交渉材料に使う。もちろんリスクはあるし、俺は負いたくない。だから、人じゃないものに責任を託す。ツイッ〇ーだ。」

今や全国的に普及されたSNSの1つだ。この場で使っていないのは比企谷先輩くらいだろう。リアルで起こったことをネット上で呟いたり、知り合いや他人のツイートに反応したりする。大学生にとっては必須アイテムとなっているまでである。授業を実況したり、板書をアップするのは先生によっては緊張することらしいから

やめてさしあげろ。

「それを使って、選挙の事前予想を作ります。」

その最大の利点は拡散力と秘匿性だ。

ハッシュタグで総武高の名を使い、グー◯ルフ◯ームにつなげることでそれらしさが出るだろう。架空のグループが『俺たちで生徒会選挙やってみた』などと呟けば、すぐにリツイートの連鎖となる。完全な捨てアカになるだろうし、それぞれの票数を開示する必要はない。そもそも比企谷先輩が挙げた人たちは立候補しないから、各数値をパーセンテージで示すことで雪ノ下先輩と由比ヶ浜先輩を仮定上で負けさせる。演説も何もしていないから完全な人気投票と化し、3人の中で最も顔の広い一色さんなら勝てる。

重要なのは投票者の考えを乱すことで票を分割させて、雪ノ下先輩への牽制及び一色さんへの説得材料とすることである。

詳細説明に対して、うまくいくのかな という声が出始める。

初めに比企谷先輩が考案した各応援アカウント作成よりは確実性がある。後から名前を変更して全てを一色さんの推薦数にしようと考えていたのだ。しかし一色さんがそのツイートを見ないわけがないし、葉山先輩を応援するまでである。もう少し、そのSNSが流行する前であつたなら、一色さんや由比ヶ浜先輩がツイッ◯ーをしないという前提条件は満たされただろう。

「まあ、やってみなければわかるまい。他になにかあるでなし。」

材木座先輩の言う通り、俺たちには想像以上に手札がなかったのだ。比企谷先輩が自分自身をカードとして使うことを避けた場合、新たなカードを創造するしかなかったのである。それが成功するのは必然とは言えない。期間が3日間という短期決戦であるからこそ成り立つはずだ。

お開きとなって帰宅すれば、

まだ両親は仕事に行っているようだ。

帰宅後、

ノートパソコンを開いてアカウントを取得する。  
転生してからはそのSNSを一度も使ったことはなかった。

俺は、人を頼ることも求めることもしなくなった。

比企谷先輩は、求める人だけが自然と集まる。

だから、羨望を抱く。

一色さんは、人を求めて頼ることに長けている。

だから、憧れを抱く。

自分にならないものを求めることは人を好きになる心理である。

大切だからこそ、比企谷先輩を傷つけたくないし、一色さんを傷つけたくなかったのだ。これが残された時間で成すことのできる最善手であって、今から一色さんを傷つける。異世界転移といった非現実的トラブルに巻き込むのではなく、俺自身が選んだ行動によってである。

誰も傷つかない世界なんてない。

だから責任をもって償うつもりだ。

大きな力を持つ者には責任が伴うというけれど、

力のない転生オリ主でも責任が伴うのではないか。

それは正しいとは断定できず、まちがっているとも証明できない。

この世界で生まれた比企谷先輩たちには歩んでいたはずの人生ストーリーがあつて、転生オリ主である俺が介入することは許されるのか許されないのか。誰にも『依頼』することができず、この悩みを解決することができるのは神様だけなのだろう。

近づくことも遠ざかることもできないままだった。この世界の人、特に好意を持っている人を傷つけることがたまらなく怖いのだ。一色さんや比企谷先輩たち、そして両親とも一定の距離を保ち続けてきた。

『異物』がこの世界で生きることを楽しむなんて自己中心的でひどくおぞましいことなのだ。それでも生きていたいから独りをわざと選んできたし、近しい者を作ることを避けた。



だから俺はここにいる証明を独りで探しつづける。

## 第7話 彩られる青春

月村伊月はよくできている後輩である。

同情や憐れみを抱かずに、俺なんかを慕ってくれる。

ここに第一の違和感があるのだが、今は置いておこう。

ラノベやアニメの雑談にも乗ってくれるが、俺たちの抱える問題については深く追求してこない。周囲の空気を読んで人に合わせようとするとところは昔の由比ヶ浜に似ている。だが言うべきところを察して、ところどころで本音を出す。トップカーストに入れるだろうコミュニケーション力をわざと隠している。

よくできすぎていて、だから違和感の塊なのだ。

自覚を抱いて青春をわざとまちがいつづける。

俺自身がまちがうことだらけなので、後輩を助けることはできないし、向き合うつもりもない。

しかし、うわべだけの馴れ合いよりは、ボツチ先輩とボツチ後輩の関係が何倍もマシだと思う。あいつなら特別サービスで、特別棟1階横という俺の昼休みの定位置に招待してもいいだろう。

あの後輩もほろ苦い人生でもう少し甘さを感じてもいいのではないか。

千葉のソウルドリンク マツカン好きに悪いやつはいない。

あの後輩をもう少し分かりたいと思うことは傲慢であるだろうか。

棚にあった1冊の本がふと目に入る。

スライムに転生したという創作物のラノベ。

転生ものの話題にだけはどこか深く触れないようにしていたのだ。気づけばあの後輩に感じていた違和感は少なくなっていた。

本棚からラノベを鞆の中に入れる。

文化祭の時の、借りを返そう。

\*\*\*

選挙予想を稼働させて、すでに3日経って金曜日。

今日の放課後で勝負を決めなければならぬ。

まず、予想を超えて多くの票が集まってくれた。前提として葉山先輩が出ないことをコメントしたら見事に炎上してくれたこともある。現在の状況としては見事に一色さんへ票が集まったのだ。傾向としては1、3年生が中心である。

理由を考えてみよう。

葉山先輩が出ないことで候補者に信憑性が薄れた上に、今のところ公示されているのは一色さんだけなのである。元々の知名度に加えて、1年生で立候補した話題性もある。人気投票に過ぎない状況で、軽い気持ちで投票してみた人が多いのだろう。

もちろん、雪ノ下先輩や由比ヶ浜先輩とこのまま当日争ったとしたら、本人のやる気や公約といった面で勝ち目は薄い。応援演説に葉山先輩まで出てこられたら、大敗である。

昼休み、現状を比企谷先輩に説明する。

ポツンとある1つのベンチに2人で座って昼食を食べながらだ。親が作ってくれた弁当であることに對して、先輩は購買で買ったパンだということに少し申し訳なさを感じる。しかし本人は気にしていないようで、途中自動販売機でコーヒーを奢ってくれた。その甘さと温かさは寒空の下でも心地よかった。

いくつか作成したデータ資料という名の武器を手渡す。

「それで？一色の方は任せていいのか？」

「はい、ちゃんと伝えます。」

「そうか。お前も暇なときはちゃんと部活来いよ。」

先輩なりの応援は心に響いた。

がんばれ という取り繕った言葉ではなく、戻ってくる場所があることを教えてくれた。そして、雪ノ下先輩と由比ヶ浜先輩のことは任せろという意味を含んでいた。その一言は俺にとっては何よりも励みになる。

「いつもありがとうございます。」

「……先輩だからな、こんなんでも。」

先輩の自然さは本当に心地いい。本人は俺を助けた自覚などないのだろう。いつもはどこか捻くれているのに、たまに本気の顔をするのだ。一定の距離を保ちながらも、自然と親身になってくれる。頼りになるかどうかを言えば、葉山先輩や雪ノ下先輩たちの方が上手だけれど、自然と慕ってしまう。

徐にブックカバーを外せば、アニメ化もされたWebサイト小説のラノベが現れる。

俺が最も避けていたジャンルだ。

「転生して、チートをもらってハーレムを作るのも、1つの青春なんだろうな。リア充爆発しろとは思うが否定はしない。」

心臓がドクンと音を立て鼓動は速くなる。

「思い思いの青春を謳歌するくらい、認めてやる。」

もし一言で表すのなら、先輩は『たまにカッコいい』。

風が枯れ葉を運んでいった。

この『傷み』が、少し和らいだ。

「そうですか。」

前に広がる景色に目を向けて答える。

イチョウの葉を全て失った枯れ木はどこか軽そうに見えた。

心臓の鼓動は確かな音色を奏で始めた。

この音色が俺の青春は虚像ではないことを証明してくれる。なら、1度目の青春はもう思い出でいい。

\*\*\*

5 限目の数学をどうにかやり過ぎし、

6 限目の国語には緊張を感じ続けていた。

最後のチャイムが鳴つたと同時に騒がしくなる。

「放課後、ちよつといいい？」

「はあ……いいですよ。」

疑問を抱いたまま、荷物を持って席を立つてくれる。一色さんを伴って教室から出ながら、話す場所を考えていなかったことに気づく。奉仕部は先輩たちが話し合うだろう。

平塚先生の姿が見えて生徒指導室を借りることで事なきを得た。

ここに来るのは2度目だが、生徒だけが使用するというのは珍しいのではないか。鞆をソファに置いて向かい合つて座る。各種資料を出す準備をしようとして、手が止まる。

本当にまちがっていないのかと。

些細な違和感や疑念は棘となり、しこりとなり、いつか彼女を傷つける。未来に不確かな懸念事項を残すことはもうしたくない。近づくことも遠ざかることも選ばず、どっちかずという逃避を俺はずつと選んできたのだ。自分から逃げることで彼女を傷つけてきたのである。

「どうかしました？」

「一色さんはなんで生徒会長になりたくないんだ？」

それなら、やることは決まっている。

今までちゃんと向き合っていると自分に言い聞かせておいて、本気で向き合つたことなどなかったのだ。自分に言い訳をして、そしてまちがいつづけたのだ。うわべだけの関係など俺は求めてはいない。

「えー、それはもうメンドクさそうだし、そもそも出たくて出たんじやないですしー。」

彼女は本音を俺に語ってくれているのに、俺は本音を彼女に隠し続けていたのだ。同意を示して会話に合わせるだけで、俺自身の本音から逃げていたのである。

「平塚先生にこっぴどく叱られたみたいだよな。でも、まだ腹が立つ

てる。」

「え？」

俺が負の感情を口に出したことを、彼女は驚く。

「勝手に嫉妬して、勝手に悪戯して、ここまでやられたしやりかえしたくならない？」

「たしかにこのままじゃ納得いかないですけどー？」

それも彼女の本音である。

このまま生徒会長になることから回避したとして 現状は変わることはない。問題を後回しにして、さっきまでの俺のように停滞しているだけに過ぎない。雪ノ下先輩と由比ヶ浜先輩に負けたという結果がつき、問題は悪化するかもしれない。このままでは彼女が傷つくことは変わらないのである。

「できる なんて不確かなことは言わない。俺がやりたいからやる。だから、力を貸してほしい。」

「……でも、自信ないよ。」

紛れもない彼女の核の本心が見えた。

理由を与え、そして初めて俺が頼ったから見せてくれたのだろうか。いいイメージを守ることや勝ち気な部分がいっつも先に出るけれど、確かに不安も感じていないわけではないのだ。

「あ、言っただけで生徒会副会長として立候補するから。その、もう推薦人集めて提出しちゃったし……」

「え？……はあー、意外と抜けてるとこあるんですね。」

夕日に照らされた彼女の苦笑いは眩しかった。

それは初めて見る表情だったのだ。

「月村君に乘せられてあげます。こき使うので覚悟してくださいね。」  
とびきり底意地の悪そうな笑みも可愛いと思ってしまう。

「ああ。見返してやろう、生徒会長」

「いや、選挙まだなんですけど。」

何も言い返すことはできない。

俺は本来どうにも締まらない奴らしい。

クスッと笑ってくれる一色さんは本当に表情豊かだ。

この小悪魔の表情にはいつも振り回されている。

無色透明だった世界に色をつけてくれたのだ。

\*\*\*

12月になってすぐ、といっても例年よりずいぶん遅くだが、生徒会役員選挙が行われた。比企谷先輩が話して、雪ノ下先輩も由比ヶ浜先輩も立候補を取り下げた。一色さんは都合よく葉山先輩に応援演説を頼み、無事に生徒会長として信任された。公約に関しては完全に雪ノ下先輩のすばらしき案であった。進学研究室の創設と部活動部費給付基準の緩和である。俺や比企谷先輩が意図せず、最強タッグが組まれたのだ。

俺は比企谷先輩に頼もうかとも思ったんだけど、残念ながら上手いこと回避されたため、由比ヶ浜先輩に頼んだ。演説は雪ノ下先輩が推敲したものだったし、顔が広いことは長所であるから人選としては合っていたのだろう。

そうそう、今年の生徒会選挙も地味で無難な信任投票だった。どっちでもいいけど、とりあえずマルつけとくか、的なの。

そして、今日から新生徒会が始動するわけだ。

会長 一色いろは

副会長 月村伊月

会計 本牧牧人

書記 藤沢沙和子

元生徒会メンバーはおらず、最低限の人数だ。この学校の生徒会にはそれほど発言力はなく、一般的な委員会活動に近いものだ。めだかボ○クスの生徒会を基準にしないほしい。

本牧さんは、モチベーションが高くて真面目な男子だ。

唯一の2年生ながら、俺たちを同僚として扱ってくれる。さぞ優秀な会社員となることだろう。

藤沢さんは、眼鏡で三つ編みな文学少女だ。

なにかと気を使ってくれる。さぞ優秀な事務員となるだろう。

そして、活動初日。

部屋の模様替えが行われていた。

前生徒会メンバーの私物を回収してもらい、歴代置いて行かれた私物は処分してしまう。元メンバーもないし、心機一転ゼロから始める生徒会活動なのだ。一色さん主導のもと、一色さん好みの部屋を作っているのである。

ふと考える。

生徒会室の私物化っていいのかと。

第一に文房具や印刷機は完備されている。生徒会メンバーの家を中心に集めてきた小さめの冷蔵庫や暖房器具を設置していった。あまり家具の必要ない大学生なら一人暮らしできるまでである。一色さんは俺を通してずいぶん比企谷先輩に懐いたもので、先輩を働かせながらお喋りしながら作業の指揮をする。

ここも俺がいていい場所になるのだと思えば、自然と働くスピードは速くなっていった。

空欄を埋め、いくつもの定理を用いて、俺の青春をゼロから証明するのだ。ただし連立方程式の解を求めることができたかどうかより、『わが生涯に一片の悔いなし』って言える青春こそが理想なのだ。

つまり簡潔に分かりやすく言えば、2度目の青春を謳歌しているのだと確かに今、実感しているのだ。

いや結局、自分の感覚任せなのかよ。

ホント締まらない締め方である。

とある転生オリエントのたった1つの物語はまだまだ続くし、それでいいのかもしれない。



## 第8話 今年もクリスマスがやってくる

12月も半ばというところ。

年の瀬が近づき冬休みが近づいてきた。特別棟までの道のりで、あつという間に過ぎた日々を思い出す。

先輩方からの引継ぎも終わって生徒会活動はようやく本格始動となった。予想通り小規模で、文化祭や体育祭を除いた各行事の運営が主だった仕事だ。校風が生徒の自主性を重んじることもあって、企画及び実施が比較的簡単に許されて活動資金まで提供してくれる。

ふと考える。

高校生向けイベントの考案って一色さんの得意分野であるし意外と天職なのではないか。俺を含めて仕事大好き人間が3人もいれば、なんか行ける気がする。

他にも、定期的なアンケートによって生徒の意見を取り入れることもあるが、めだかボ○クスみたいに目安箱を設置して依頼を受けることなどしない。もしそんな仕事をしたらSKET DONCEみたいに生徒会vs奉仕部が起こり、生徒会は大敗するまでである。そもそも俺が板挟みになるのは嫌だし、そんな対立は起こることはないだろうが。

生徒会長によって丸パクされた公約の、進学研究室の創設と部活動部費給付基準の緩和についてはすでに進めている。進路科の先生に話をすれば、時間と労力をかけて前者は解決する。後者は、学校事務に頭を下げて資金を確保し部長会の財布の紐を緩くすればいい。それほど、雪ノ下先輩はもたらした公約は無難かつ需要の高いものだったのだ。

ドアを軽くノックして「どうぞ。」と聞こえれば、「こんにちはです。」と部室の中に入る。それがいつも通りの入室方法であって、俺が来たこと知らせることができる。

「よう。」

「こんにちは。」

「ツツキー！ そっか、今日は生徒会ないんだね！」

奉仕部にヒツキーあって、ツツキーあり。

冷たい風と温かい言葉が同時に迫ってきた。挨拶を交わして、空いていたたった一つの椅子に座る。そうすれば、腰を落ち着けたという確かな実感を得る。

ともかく生徒会活動は毎日あるわけではない。生徒会長は極力働きたくない系女子だし、生徒会メンバーはすでに書類仕事が速い。まだ外部組織との連携がなかなか上手くないくらいだろうか。

「調子はどうかしら？」

「ありがとうございます。ようやく慣れてきたってところででしょうか。」

雪ノ下先輩に手渡させた紅茶の淹れられた紙コップから温かさが染み渡る。こういった嗜好品の良し悪しは気にしないはずの庶民に最高だと感じさせるほどの腕前である。紅茶の淹れられた紙コップを片手に本を広げる比企谷先輩のように、持参したラノベを開く。そんな先輩は雪ノ下先輩を心配そうに見ていた気がした。

時折り、由比ヶ浜先輩が会話を始める。

クラスで聞いた加湿器の話、スマホの機種変更の話、次々と話題を出して会話を続けるのだ。会話に特別な意味などないし雑談に過ぎないが、3人が別々の道を選んでいった時よりはマシと思ってしまう。「そういうえば、もうすぐクリスマスなんだねえ……あつ！平塚先生にストーブとかお願いすればつけてくれるもらえたりしないかな!？」

「それはさすがに難しいんじゃないかしら。」

「あの人の場合、自分へのご褒美のほうが先だろ。」

「余ってる石油ストーブ持って来ましょうか？」

「え、ほんと!？」

「マジかよ……言ってみるものだな。」

こうして、何気ない日常が過ぎていく。

由比ヶ浜先輩が沈黙を破ることで馴れ合いを続けているに過ぎない。そもそも奉仕部のカタチは元々こうだったのかもしれない。彼

らの出会いの場面に立ち会ったわけでもなく、彼らが解決してきた依頼について聞いたことはない。奉仕部という場所に享受してもらえばかりで、奉仕部の過去も未来も知ろうとしたことなどないのだ。

「暗くなってきたね。」

「……そうね、今日はこの辺にしておきましょうか。」

思考に囚われそうになったとき、部活のお開きを部長は告げて各自荷物を纏め始めて席を立つ。そして、電気を消せば一気に冬の夜を感じてしまう。

別れの挨拶を交わして、由比ヶ浜先輩がバスの時間に間に合うように元気よく走っていき、雪ノ下先輩は儂い微笑を浮かべて鍵を返しに行く。俺も先輩もその奉仕部の鍵に触れたことは一度もない。

言葉を交わさず、それぞれの駐輪場へ歩いていく。基本的に校門に俺が少しだけ早く着いて合流する。いつも通りだからこそ息が合うだけであって、お互い知らないことだらけである。結局、転生のことは言っていないし聞かれることもない。

「コンビニ寄るぞ?」

「え、お腹空いたんですか? あ、もしかして小町さんにご飯抜きに処されたとか!」

今日もまた自転車で並走しながら雑談を交わしていたなかで、先輩は言う。ただ呟き合っていた時よりも確かな言葉の投げかけ合いがそこにはあった。

「……いつかマジでありそうだからやめてくれ。洗剤買いに行くだけだ。」

「それならスーパーかドラッグストアじゃないですか?」

「それもそうだな。ここでもいいか。」

道路沿いにあつた力〇チに自転車を停めて店内に入る。仕事帰りの人や大学生で賑わっている。飲料はもちろんのこと、食料品や菓子類も充実していて、もはやドラッグストアを超えた何かである。目的的地である洗剤売り場にはコンビニよりはるかに多種多様なものが揃っていた。

「ところで、家で何を使っているとか知っているんですか？」

「……どれでもよくない？」

「洗剤自体の香りの好みもありますし、合わせる柔軟剤にもよりますよね。」

これ絶対一番安いものを選ぶうとしていたな　と心の中で思った。面倒くさい表情になっている先輩が手紙を取り出し出したので、横から覗き込む。クリスマスのシールが貼られていて、洗剤を帰りに買ってきてほしい旨が書かれている。しかし、今求めているどの洗剤を買えばいいかについては書かれていないようだ。

ところで、『小町のクリスマスプレゼントリスト』という目立つタイトルの下に、図書カード・ギフトカード・白物家電が箇条書きされていることはジョークでいいのだろうか。

ところで、『でも、お兄ちゃんの幸せが一番欲しいです。きやー！今の小町の超超ポイント高い！』という追伸は本気にしているのだろうか。

「図書カードもギフトカードも最近いいデザイン売ってますよね。プレゼントとしても申し分ないと思いますよ。」

「残念ながらそんな金はない。もうこれでいいか。」

選ばれたのは　攻撃的な名前のメジャーな商品でした。液体タイプと粉末タイプ、それぞれのメリットについて話そうとしていたのだが、粉末タイプを持ってレジに向かってしまった。

俺は何も買うことはなく先輩とともに外に出る。

「先輩だったら、何が欲しいですか？」

「……さあな。」

子どもたちはクリスマスには欲しいプレゼントを願う。もしクリスマスに願えば　なんでも一つだけ貰えるとするなら、何を願うだろうか。ここにいる証明を探し続け、ここにいる証明を創り始めた俺は一体何を求めるのだろうか。金券のように変換できる物でもなく、家電製品のように形ある物でもないことは確かだ。

クリスマスを彼女と過ごしたいという願いには、何か足りない気がしたのだ。

ちなみに翌日聞いた話では、お願いされていたのは洗濯用洗剤ではなく食器用洗剤であったらしい。言葉というものはなかなかどうして上手く伝わらないものである。

## 第9話 次回、『玉縄』デュエルスタンバイ!

6限目 オールイングリッシュの授業後、机に突っ伏す。

英語の授業を英語だけで行うというもので、グローバル社会で必須の実践的英語を身に付けることができるのは確かだ。しかし、かつての青春ではライティングとリーディングに溜まった英語スキルを全振りしてきたので、コミュニケーション英語にスキルポイントが溜まっていないのだ。英会話が苦手という固定観念がガチガチに固まっているまでである。

助けてドラ○もん、ほんやくこんにやく出してー

「またどうでもいいこと考えてませんか？ はやく行きますよー？」  
「そうだった、休んでる暇なかった……」

荷物を持って席を立ち、一色さんと一緒に教室から出ていく。もちろん比較的話す男子に挨拶を忘れない。また明日、部活頑張れよという意味の定型文を言えば、また明日 生徒会頑張れよという意味の定型文が返ってくるに過ぎない。それでも、挨拶を欠かさないのは日本人として教育を受けたからではないだろうか。

廊下に出れば俺たちが生徒会役員であることは周知されているし、男子と女子が並んで歩いていても浮いた話をされることはない。せいぜい、一色の可愛さを求める男子がチラチラ見るだけだろうか。悪意や嫉妬といった感情を表面的とはいえ向けられなくなっただけで、生徒会長になったメリットはあったのではないか。

「英語苦手なんですネー？ いつもいつも弱りきってますし。」

「どうしてあの授業を受けて平然としていられるんだ。あれ、もしかしてサボってるとか。」

「やだなー。生徒会長なわたしが集中してないわけないじゃないですかー。」

「集中して……」  
「ました。」

特別棟まで行けば あまり人もいなくなってくるので、会話を始める。今日は生徒会室ではなく、奉仕部へ向かっているのである。一色

さんが奉仕部に行くことは普段はない。つまり目的があつて行くのであつて、生徒会は奉仕部に依頼をしたいのである。対立どころか、こうも早く頼ることになるとは思わなかつた。

一色さんがニヤリと笑つて扉をノックして、「どうぞ。」という部長の声がある。怒られない程度に勢いよく扉を開けば、急に半ベそをかきはじめる。この一瞬でなにかあつたのかと思うほどの豹変ぶりである。

「せんぱーい、やばいですやばいです……本当にやばいんですう。」  
「いろはちゃん、どうしたの? とにかく座つて。」

まずは甘える声で庇護欲をそそのめる。加えてブレザーから出ているカーデイガンの余つた袖で涙を吹くふりをする。この一連のあざとさを受けて、由比ヶ浜先輩の純粋な優しさが報酬として手に入った。雪ノ下先輩は眉間に手を当てていて、比企谷先輩はギリギリ踏みとどまつたようだ。

「あ、結衣先輩ありがとうございます。」

けろりとした表情で用意された椅子に座つたところはちよつとポイント低いんじゃないだろうか。俺もいつも通りの挨拶を交わして奉仕部にある特等席に座る。今日も本を持つ比企谷先輩はどこか浮かない顔をしている。

「とりあえず、話を聞きましょうか。」

冷静ッ!

先ほどまでの小悪魔の小悪魔的行動を完全にスルーして、早く本題に入るよう部長は促す。

「それがですね。今の仕事が超やばいんですよー……」

「どうやばいんだ?」

口を開いた瞬間 テンションが一気に下がってしまった、ように見える。もちろんこれも小悪魔の技で、先ほどは屈しなかつた比企谷先輩が庇護欲を刺激されてしまう。

「もうすぐクリスマスじゃないですかー?」

「ああ、そうだな。……いや、話飛びすぎだろ。」

「え、飛びましたか？」

「そうだよ、ヒッキー。」

まさか俺には耐性があると思ったのか、そう そんなものはない。分かっていて思わず擁護してしまうほど、副会長は生徒会長に甘いのである。俺は悪くないと話の腰を折りたいはずの比企谷先輩は諦めて 腐った目で先を促す。

「で、クリスマスってことで、近くの高校と合同で地域のためのクリスマスイベントをやろうって話になってまして、なんかお年寄りとか小さい子相手のイベントっぽいんですけど。」

「へえ、どこの学校と？」

「海浜総合高校の生徒会から学校側に連絡が来てしまって 平塚先生に丸投げされ……平塚先生に頼まれましたね、はい。」

運悪く逃げ道を塞がれてしまったのだ。先輩から聞いた拳の味を俺はまだ知らないが、言い訳をして腐った根性を見せてしまえばすぐに味わうことになるだろう。

「それで始めてみたものの、なんていうんですかねー。うまくまとまらないってというか……」

「完全に主導権は握られていて、会議は滞っています。」

「まあ、別の高校と一緒にならそんなもんだろ。気にすんなよ。」

「ですよねー？」

他校との合同イベントなど意見がすれ違うに決まっている。親睦を深めたいのなら せめてその2校だけで完結するものにしてほしい。そもそも初のイベント運営なのに荷が重すぎる。まだ生徒会発足したばかりかつ少人数の俺たちは地域との連携だけで精一杯になっってしまうだろう。

「ていうか、こっち来る前に城廻先輩に相談しろよ。」

「えっと、ほら、受験生に迷惑かけるわけにはいかないじゃないですか！」

指をビシッと掲げて 思いついた言い訳を言う。前生徒会長である城廻先輩は一色いろはの天敵であって、小悪魔には純粹無垢な天使の光は眩しすぎた。彼女は指定校推薦みたいだし 快く力を貸して



くれるだろうが、敵を考えるなら先輩たちが適任なのである。ちなみに比企谷先輩を生贄として、魔王 陽乃さんをアドバンス召喚してもいいが、敵の殲滅とともに俺たちへ胃痛をもたらすだろう。

「もう先輩たちしか頼れないんですよー?」

「そうね……。だいたい状況はわかったけれど……。どうかしら?」

今まで沈黙を続けていた雪ノ下先輩がようやく口を開く。

「いいじゃん。やろうよ。ツツキーも入ったしき、前みたいみんなで頑張ってもいいかなって、思う、んだけど……」

だんだんと声は尻すぼみになっていった。

由比ヶ浜先輩は依頼をきっかけとして この雰囲気解消したいのだと思う。互いにどこか遠慮し合って、言葉を使った馴れ合いをつづけているのが現状だ。バラバラに動いた生徒会選挙の時と違って みんなで動けば変わるかもしれないから。

「そう。なら、それでもいいと思うわ。」

「いや、やめといたほうがいいんじゃない?」

一色さんが感謝を述べるより先に比企谷先輩は口を開く。良い方向に変わるか悪い方向に変わるかはつきりしないからではないか。だから 変わらないことを選ぼうとしている、いや、変わることを選ばないと言うべきだろうか。

「え?なんで?」

「これは生徒会の問題だ。それに、一色も最初から奉仕部を頼るのはいいことじゃない。月村がいるからなんとかなるかもだろうが。それに俺たちはあくまで手助けするだけだから、本当に困った時に来い。」

「えー?なんですかそれー」

文句を言いながら先輩に促されて 一色さんは奉仕部の外へ出ていく。

「ツツキー、本当に大丈夫なの?」

「幸い、まだ時間はありますからね。あれ、このままだとクリスマスも働かなきゃいけないのでは。当日に有給休暇とか取れないよな。

あー、マジで海浜の生徒会はブラック企業だー。」

「ツツキーがヒツキーみたいになってる!？」

比企谷先輩が話をつける時間稼ぎをする。

「お二人は冬休みどうするの？ 部活の方はいつまで？」

「年末は予定があるの。だから、終業式までかしらね。」

「なるほどです。」

「ゆきのんと年越しとか初詣行きたかったなー」

「ごめんなさいね。」

扉が開く音がすれば 一色さんと合流しますと挨拶をして、先輩と入れ違う。どうやら依頼を遠ざけることには成功したようだ。しかし時間を稼げたとして、変わらないことはいつまで選り続けることができるのだろうか。俺自身選ぶことから避けているので答えは見つからないままである。

「先輩はどうするって?？」

「恥ずかしいらしいんで、現地集合らしいです。」

どうやら先輩だけは協力してくれるようで、憂鬱さが少しは晴れてくれる。

実を言えば、あまり時間はなくて30分後には海浜との会議がある。防寒の準備を整えた俺たちは自転車で駅近くのコミュニティセンターに向かう。学校指定の上着を羽織っただけの俺と違って、一色さんは水色のマフラーを首に巻いている。

俺は自転車を押して歩く。

一色さんは基本的に徒歩であって、よくある恋愛物語なら2人乗りをするだろう。生徒会役員だからトラブルを起こしたくないのもあるが、あれって危ないのだ。注意して運転したとしても、いつ車や自転車が飛び出して来て転倒及び横転するか分からない。

「ロマンないですねー。」

「ロマンより俺は安全を選ぶから。」

「それってまさか——」

交通事故で入院した経験はない。だがしかし交通事故で気づくこ

ともなく転生したのだ。一色さんの小悪魔的頼み方をされてもこれは譲らない。実際、半年くらい経つまでビクビクしながら超安全運転をしていた。今も住宅街の曲がり角に見かけるカーブミラーで車の有無を確認することは多い。

「って!! その、もしかして聞いてましたか?」

「ヴェエアア!? ……ごめん、聞いてなかった。」

「大丈夫です気にしないでください。というかヴェエアアってなんですかそれ……」

本人がいいと言うなら気にしないでいいのだろう。

あー、心臓がびよんぴよんした。

道路沿いにあつたカ○チに自転車を停めて店内に入る。以前来た時と同じくやはり仕事帰りの人や大学生で賑わっている。今回の目的は菓子類であつて会議に持っていくものである。もちろんあちら側もお菓子やジュースを用意しているが、合同だからこそ甘えるばかりではなく対等だということを示さなければならぬ。

香りが強いものや音がするものは選ぶことはなく、個別包装かつ食べたい物を籠に入れていく。どうせ会議のこういう菓子類は余つてしまつて持ち帰りになるのだし、必要経費として学校側に請求するのだ。条件さえ満たせば、残りは好みの問題だ。

とりあえず、ビスケットとココア風味のチョコが最高のアル○オートを買つておく。ファミリーサイズはミルクチョコといちごしかないのが残念である。今年発売された黒胡麻は今度自分で買うことしよう。しかし、キャッチコピーである『午後の、楽しい時間に』は全くあてはまらないだろうな。ところでそもそも、このフレーズを知っている人つてどれくらいいるのだろうか。

一色さんの選んだものが入っている籠を受け取つてレジに運ぶ。レジ打ちが終われば領収書してくれるように店員さんに言って、一色さんには支払いを任せて、籠を運び袋に詰めていく。

丁寧さを深くは求めず、嵩張る2つの袋を持つ。

「えつと、なんか 慣れてますね。」

「……あー、ほら、中学でこういうことやってたから。」

時間もあまりないことだったし自然にテキパキと動いたことが、不自然に見えてしまったらしい。前世に生徒会活動をしていたわけではなく、大学のサークル活動では何度も買い出しの機会があったのだ。文化祭のときなど自動車がいっぱいになるまで飲料を買ったこともある。

「へえー。——本当、頼りになりますね。」

ニコツと笑いかけてくれれば顔に熱を感じる。

しかし、どこか寂しげであったことは気のせいだろうか。

「せんぱーい！お待たせしましたー！」

自転車の前籠に荷物を乗せてコミュニティセンターまで向かえば、階段に腰掛ける先輩が見えた。俺は片手を挙げ、一色さんは走って向かっていく。

## 第10話 玉縄

1度目の会合に來ただけであって、このコミュニティセンターは2度目である。2階には申請すれば利用できる部屋があつて目的地である。1階には図書館もあり、また 3階には大きなホールがあつて、そこでクリスマスイベントをやることになっている。

すでに本牧さんと藤沢さんは着いているはずで、あの空間でたった2人かと思うと ちよつと足早になつた。

一色さんが扉をノックして、「はい、どうぞ！」などという活気溢れる声がすれば、こちらは意気消沈してしまう。

「おつかれさまです。」

「お待たせしました。」

「いろはちゃん、伊月君、こっちこっち。」

気を引き締め入つて挨拶をすれば、海浜総合高校の生徒会長が呼びかけてくる。全く許可した覚えはないのに名前呼びなのはフレンドリーなだけであつて、ナンパ野郎ではないはずだ。

「君も生徒会の人かな？ 僕は 玉縄。海浜総合の生徒会長なんだ。」  
前回出席していなかつた先輩に対して自己紹介をしたので、一色さんが先輩を紹介する。

「この人はうちのヘルプ要因です。」

「……ああ、どーも。」

「いやー、よかつたよー。総武高校と一緒に企画できて。お互いにリスペクトできるパートナーシップを築いてシナジー効果を生んでいけないかなと思つててさー。」

俺と一色さんは微笑むことしかできず、先輩は心の中で啞然とするしかなかつた。そして生徒会長に同調するように群がつてきて自己紹介していく。俺たちは先輩を生贄として置いて、本牧さんと藤沢さんと合流する。

どうにか先輩も逃げ出すことができ、今は折本さんと話をしている。中学の時の同級生である彼女は生徒会メンバーというわけではなく助っ人の1人である。

ともかく合計10人もの戦力を相手に、俺たち4人は戦っていないかなければならない。もちろん先輩は数合わせの手札などではなく、切り札である。隅の席に逃げようとした先輩を2人で誘導して座らせる。

お互いに持ち寄った菓子類を机にセットすれば、会議開始である。「じゃあ、初参加のメンバーもいることだしアイスブレーキングから始めよう。」

しかしすぐにバトルフェイズには移行しない。会議において発言しやすい雰囲気づくりのために、事前になんらかのコミュニケーションを通して打ち解けるといふものだ。俺たち高校生が行ったとして、堅苦しい会議の前に行う馴れ合いに過ぎない。

自己紹介に加えて好きな本の紹介を全員がしていったため時間は大いに消費された。ビジネス書の名を挙げていったので、それが意識高い系喋り方もとい業界用語の参考書なのだろう。

対して、俺たちは「ちょっと時間がかかりすぎていますね。」と言い訳をしておいて、自己紹介だけにしておく。がっこう〇らし！は引かれるかもだし、ニセ〇イでも言おうとしていた。どちらも実写化は上手くいくんでしようかね？

「よし、前回に引き続いてブレインストーミングをやっていこうか。」とにかく自由にアイデアを並べていくという会議の手法だ。確かに多くの企業でも用いられているらしいし、大学でも経験した。有用性もあって時間がかかるが無駄ではない。ただ 向こう側の会長はいつになつても意見をまとめないがために停滞しているのだ。

このままだと言葉を並べるだけであって、進むことはしないのである。

「俺たち高校生への需要を考えると、やっぱり若いマインド的な部分でのイノベーションを起こしていかないか。」

「そうになると、当然、俺たちとコミュニテイ側とのWin-Winの関係を築くことを前提条件として考えなきゃいけないよね。」

「そうになると戦略的思考でコストパフォーマンスを考える必要がある

んじゃないかな。それでコンセンサスをとって。」

「一色 今これ何やってんの?」

「月村君 お問い合わせします。」

「高校生と他の協力団体の需要を考えること。費用についても考えること。……以上です。」

「ほーん……」

「みんな、もっと大事なことがあるんじゃないかな。」

「ここそと現状確認をしていたら、司会の玉縄さんが重々しい声を発する。会議室に緊張が走り、ようやく話を進行させてくれるのかと思うだろう。」

残念ながらそんなことはない。

「ロジカルシンキングで論理的に考えるべきだよ。お客様目線でカスタマーサイドに立っつていうかさ。」

意味 不明な発言に対して、俺たちは引きつった笑みを浮かべる。加えて 謎の手の動きろくろを露骨に回さないでほしい。これならまだオールイングリッッシュの授業を受けていた方が何倍もマシである。大柴さんもビツクリな会議である。

終わりの見えることはない、空虚でどこかまちがっていると思える空間が ここには広がっていた。

「先輩、どうでしたか?」

「いや、なにもわかんなかった。」

会議は1時間ほどで終わり、部屋の隅で先輩と話す。ノートパソコンを見せれば、マジかよという顔をする。文書作成ソフトで箇条書きによって内容を纏めながら聞いていた。2ページほどで羅列されたなかで、決まった具体的なことは1つもない。結局まだ場所と日時しか決まっていけないという状況なのだ。

「うちの仕事は 議事録とー、計画表、課題のチェックリスト? ですね。……その、どうします?」

「また議事録書こうかな。」

「計画表を確認しておくよ。」

「なら、私が課題のチェックやりますね。」

会議が終わったただけであって残業があるのだ。一色さんから早く受け取って議事録を纏め始める。俺たち3人は黙々と進めていく中で、時折り一色さんに確認してもらうが、反応はどこかぎこちない。海浜側に対して完成したものを見せつけてやって、帰宅準備に入る。

「みなさん、ご飯食べに行きませんか？」

先輩は先に帰ったようで、一色さんが俺たち3人に話しかけてきたので頷き合って合意する。

「どこにする？」

「えっと、その……」

「ファミレスでいいんじゃないですか？　とりあえず、外に出ましようか。」

本牧さんの質問に対して、一色さんの代わりに俺が答えてしまう。海浜側の人たちに挨拶をして、暖房で温かいけれど空気の籠った場所から風通しのいい駐輪場へ向かう。その途中でどのファミレスが好きかという話題を提示し、話し合って行き先を決める。親に連れて行ってもらうのなら選択肢が増えるが、やはりコスト的にサイズが選ばれた。

ドリンクバーは自然と避け、各自スパゲッティを食べて店を出た。今のところ、俺が話題を出して会話を生んでいるに過ぎない。親睦を深めるために一色さんが提案したものとはいえ、一色さん自身が少し遠慮してしまっている。

「はあー、ほんと めんどくさい。」

「ああ、厄介な初仕事だよな。……本牧さんと藤沢さんをもっと頼っているんじゃない？」

2人とは帰り道が反対方向なので、今はいない。



「男子としては 頼りすぎるのってどう思います?」

「そうだな……葉山先輩も頼ってもらうことは嬉しいと思う。協力してもらおう?」

「……やめておきます。」

「そっか。」

「月村君は何か相談したいことない?」

「今は、特にないかな。」

住宅街ということもあって街灯の光があるが、すでに冬の空には星が輝いていた。半分だけ見える月は綺麗だけれど、昨日より細くなっているのだ。だんだんと見えなくなる日が近づいているのだろう。

彼女に依頼をするにはまだ勇気が足りなかった。

大学生らしく悩むことはできても、まだ高校生らしく悩むことはできないのだ。

\*\*\*

彼といるといつも調子がくるう。

本気っぽい顔をするようになってからは、もつとだ。

1人の男子に頼ることは良くないはず。

真剣な表情で愚痴を聞いてくれるし、しつこくないし、最近は自然と助けてくれるし。

だからついつい頼ってしまうから、困る。

頼ってくれないことが少し気に入らない。

いつも頼ってばかりなわたしがめんどくさい。

どうしてほしいのか 教えてほしい

もつとちゃんとしてほしい

「それじゃあ、また明日です!」

「また明日。ゆっくり休んで。」

もう少し話したいと思っているのに

そんな優しい表情を見せないでほしい

ほんとに、たちがわるい。

## 第11話 草食系男子の青春ラブコメ

次の日も会議。

海浜総合高校は距離が離れていることもあって 放課後すぐに始まるわけではない。生徒会室でいくつか仕事を終わらせる。残念ながらクリスマスイベントのことは何も具体的に決まっていなかったため進められない。会議が滞れば、こうしてどんどん仕事は溜まっていくのだろう。

「今日は会議進むといいですね。」

「そうだね。」

向かう途中口を開けば、本牧さんは苦笑いで言葉を返してくれた。一色さんと藤沢には先に買い出しに行ってもらっている。冬の夕暮れ時とはいえ、まだ完全に暗くはなく学校帰りで賑わっているから大丈夫なはずだ。

「発言しなきゃなーって思うんですけど、雰囲気吞まれてしまうんですよね。」

「うん、ちゃんとしなないと……」

本牧さんも藤沢さんも、そして俺も場の雰囲気を読むことには長けている。雰囲気求められるれば意見を述べることはできるが、人が多くいる場では会話の主導権を譲ってしまうのだ。

自転車を停めて 戦場に向かう。

「一色さんに、その、俺って嫌われてたりする?」

「学年違いで遠慮はしていますけれども、そういうことはないですよ。……もしかして狙ってないですよね?」

「え、狙ってたんだ。俺は藤沢さんが少し気になっているかな……ごめん忘れてくれ。」

「え、気になってたんですか……はい、心に留めておきます。」

草食系男子2人だけの恋バナとか誰得である。しかし秘めていた想いを誰かに告げたことで、少しだけ心が軽くなったのを実感した。『がんばろう』という言葉はお互い口には出さないけれども、勇気も

らえたのは確かだった。

「2人とも、おっそーい！」

「ふふっ、それほど待ってませんよ。」

「コミュニティセンターの玄関で待っていた2人に『お待たせ』を伝える。

「あつ……。ありがとうございます。」

本牧さんが自然と手を出せば、自然と重い袋を手渡しした。

慣れないことをするから 2人とも顔真っ赤である。

「そこは気の利いたセリフ欲しいところなんですけどね。テイク2やってみます?」

「熱が悪化するでしょうが。」

茶化しながらも 俺にも自然と手渡ししてくれる。

締まらないけれど、たまには草食系男子もカッコつけたいものなのだ。またいつか彼女たちのどこが『好き』なのか、男同志で密かに語り合ってみるのも悪くないだろう。

「うーん、まだちよつと固まりきってないから昨日のブレストの続きからやっていこう。」

先ほどまでの俺たちの甘酸っぱい青春物語を返してください。比企谷先輩も無事現地集合し 会議が始まった途端、この一言だ。ちよつとどころではなく全く固まりきっていないドロドロの泥沼状態である。

「せっかくだし、もっと派手なことしたいよね。」

「それっ！あるある。やっぱり大きいことっていうか。」

高校生も大学生もすぐに机上の空論を出す。こうして突発的で面白いアイデアが出てくるのだと元理系学生としては肯定的に思ってしまう。ただしもう少し時間と余裕があるときにしてほしい。

折本さんの発言に玉縄さんのキーボードを叩く音が止まる。

「確かに、小さくまとまりすぎてたかもしれないな。……というわけ

で、ちよつと規模感を上げようと思うんだけど、どうかな？」

「そうですね、ちよつと微妙かなとは思うんですけどー？」

視線を向けられた一色さんは言葉を濁す。しかし言葉は上手く伝わらず、肯定として受け取られてしまう。どこまでポジティブシンキングなのか分からないが、そもそも形式的な確認を取っただけなのかもしれない。

「日程的にキツくないですか？」

「だな。規模を大きくするには時間も人手も足りないぞ。」

「ノーノー。そうじゃない。ブレインストーミングはね、相手の意見を否定しないんだ。時間的問題と人員的問題で大きくできない、それじゃあどう対応していくか。そうやって議論を発展させていくんだよ。すぐに結論を出しちゃいけないんだ。だから君たちの意見はだめだよ。」

俺と先輩の援護も躲されてしまった。

理屈っぽい理由で言い訳して、自分の中でいろいろ考えて完結してしまうのだ。こうして実際に聞く側に回れば、自分の醜い部分を実感してしまい思考の渦に巻き込まれそうになる。だが今はそんな場合じゃないし、憤りという感情をいつものように隠す。

「どう可能にするかを話し合おう！」

先ほどの長々とした発言で否定することは許されず、本来の目的である言葉を並べるところか 賛成しか許されない雰囲気となったのだ。今は人員的問題の解決のために、組織を巻き込もうとしている。まさに数の暴力であって、そう簡単には盛り上がる馴れ合いに割って入ることはできない。

「これはフラッシュアイデアなんだが、さっきの提案へのカウンターとして、2校のより密接な関係を築いて連携をとることで、最大限のシナジー効果を期待する方がいいと思うんだが、どうだろうか？」

先輩は玉縄さん1人に対して言い切った。この場を取り仕切っている者にのみ意見をぶつけることで、先ほどのように味方を増やさせないようにしたのだ。簡潔に言えば、「これ以上組織を増やすな。」と

いう否定的意見なのだが、相手の土俵に上がることで言い逃れできないようにする。

言葉を弄して 策略的に自分の考えを伝えることを選んだ。

「……なるほど。じゃあ、高校じゃないほうがいいね。大学とか。」

「マジレスすると大学生は自重しませんし、俺たち力りきんでしまうかも。アンパイではないんじゃないですかー？」

「そうだな。イニシアティブをとれない。ステークホルダーとコンセンサスを得るにしても、ブレないマニフェストをはっきりとサジェスチョンすることができるパートナーシップをだな……」

「何言ってるんですか……」

実際にやってみると、ぶつちやけ言った本人も何を言おうとしたか分からなくなってくるものなのだ。大柴さんってすごい人だったんだな。あと、いい子はネットスラングをリアルで口に出しちゃダメだぞ。

「確かに。それじゃあ……すぐ近くにある小学校はどう？僕たち高校生だけじゃなく、違う方向性も取り入れられるかもしれない。」

ビシッと指を掲げていきなり代替案を提示されたなら、俺も先輩も準備が間に合わない。頭の中、カタカナ単語でいっぱいになって言葉にできなかつた。

「うんうん、ゲームエデュケーションだね。」

「Winner Winだね。」

「ウィンウィン！ それあるー！」

「よし！小学生のアポイントとネゴシエーションはこつちがやるよ。その後の対応を総武高校にお願いできると嬉しい。どうかな？」

あ……ありのまま今起こった事を話すぜ！

『さらに規模を大きくするため協力者を増やすこととなる。大学生や高校は阻止することができたが、代替案として小学校を提示して盛り上がった。折本さんのグツジョブが入ったことで今まで意見を選ぶことを避けていた彼が決断したのだ!!』

「えつと……」

「これは大切な2択で、だから自分で決断するんだ。どちらでも月村たちは付いてきてくれる。ここは生徒会長である一色の判断に任せろ。」

不安そうに俺たちに一色さんが視線で尋ねれば、先輩が『魚そのものを渡すのではなく『魚の獲り方』を教える。』

「お任せします。」

藤沢さんも微笑みながら小さな声で伝える。

それは生徒会長に全てを丸投げしたのではなく、もつと堂々と命令してほしいからだ。俺たちは生徒会長の指示に従うし、もし間違っていたら正すし、責任も一緒に負う。本当に一色さんが生き生きと自分を出せていない、状況がずっと気に入らなかった。引つ込み思案の俺たちをもつと引つ張って行ってほしい。

一色さんの『決断力』で魅せてほしい。

「はい、小学生の対応は任せてください！」

小学生の協力というのはメリツトが確かにあるし、迷うよりもいつぞ賛成したのだ。海浜側は協力者を増やすという意見は変えることはないだろう。更に中学校が提案されるどころか、また他高校や大学まで意識が戻ってしまい会議が滞ってしまったら堪らない。

「小学生を呼ぶとして、どれくらい呼ぶのかな？」

そして本牧さんも、場に意見を述べる。

「そのためにも、保育園やデイサービスの人たちの人数も確認しないといけませんね。」

「じゃあ、俺たちは保育園の方に行きますが、どうします？」

一気に状況を動かすために畳みかける。

場の雰囲気を読むことに長けているということは武器である。うちの生徒会長が場さえ整えることができたなら、俺たちは実力を発揮できるのだ。俺は私利私欲のために比較的交渉しやすいだろう保育園を一早く選択した。

「そうだね。こつちでデイサービスの人たちには確認しておくよ。」  
今日の会議はこうして終わる。具体的なことはまだ何も決まってい  
ないが、今はまだまだ働けることは確かだ。少しとはいえ俺たち生  
徒会が前に進んだからなのだろう。

「ではでは、二手に分かれますねー！私と沙和子ちゃんは保育園に行  
きます。ここはよろしくですー！」

「よろしくお願ひしますね。」

「了解。」

「わかった、気をつけて。」

手持ち無沙汰な比企谷先輩には、もちろん重要な『依頼』があるの  
である。

「じゃ、先輩。俺たちが行くまでボディガードよろしく頼みます  
よ。」

「へいへい、お前も頑張れよ。」

美少女2人の護衛は役得だろうに、あまり乗り気じゃないところは  
先輩らしい。3人が部屋から出ていくのを確認して 作業に入る。  
パソコンで箇条書きにされたメモをもとに、議事録を纏めていく。

ふと考える。

先輩って知らない人から見れば不審者に見えないか と。

制服を着ているとはいえ、2人の美少女を侍らせているとはいえ、  
保育園の子どもたちから恐れられるかもしれない。しかしあれでい  
て、意外と年下の面倒見がいいことはギャップ萌えするのだろう。例  
えば、迎えの来ない園児の女の子と時間を潰していたら、実は同級生  
の妹でしたみたいなのドキドキの展開があるかもしれない。

纏めたプリントを玉縄さんに物理的に叩きつけてやりたいのをこ  
らえて、確認をしてもらえばさっさと退散することにする。海浜側は  
閉館時間ギリギリまでディスプレイを続けるようであるし、巻き  
込まれたくないのである。

「で、藤沢さんのどこが好きなんで？」

「世の中には言い出しっぺの法則ってものがあるんだよ。」

あれこれ言い合いながらも結局恋バナに達することはなく、保育園前で彼女たちと合流したのだった。いつものように二手に別れて、夜道をドキドキしながら帰宅していく。

草食系男子は今日も想いを密かに抱いて、選ぶことはしない。



## 第12話 『実感』と『成果』

海浜側がアポを取ってくれ、駅のすぐ近くの小学校から6年生女子8人を連れてコミュニティセンターまで来た。もちろん引率の先生も来てくださっているが高校生側に基本任せるつもりらしい。

「クリスマスってサンタさん来てくれるんだよね！」

「え、そうなの？」

「ねえー、なにをすればいいのー？」

どこまで話が伝わっているか確認すれば、これである。何を言っても集まってくれたのか分からないが、現状説明もなく放置というわけにもいかない。まだ具体的なことが何も決まっていないことが心苦しい。小学生たちの意見も聞こうという理由だろうが、あの会議に巻き込んだところで、この子たちは黙って聞いてくれるだけにすぎないだろう。

視線の高さを合わせたまま口を開く。

「クリスマスイブにね、地域のおじいちゃんおばあちゃん、保育園のみんながパーティーに来てくれるから、そのお手伝いをしてほしいんだ。今日は……飾りつけの準備かな。」

「へえー」

すでに場の雰囲気を読むスキルまたは癖があるようで、ヒソヒソ話を始める。

「どうする？」とか「なんか楽しそう。」とかぶつちやけ丸聞こえなのだが、待っていれば1人の子が代表して口を開いてくれる。

「いいよ。」

「ありがとう。」

タイミングよく本牧さんと藤沢さんが荷物を抱えてやってきた。折り紙や色画用紙やはさみ、のりなどを生徒会室からかき集めてきてくれたのだ。そろそろ始まるだろう会議については途中参加するこ

とにして、俺と藤沢さんで子どもたちの面倒を見ることにする。小学生たちの対応は総武側が受け持っているし 海浜側はすでにディスプレイで忙しいようだし。

「おにいちゃん下手―」

「もー、貸して」

紙飛行機しか自信がなく、十年以上前に折った花をぎこちなく折っていたら、ぶんどられる。パーティーでよくある輪っかを作るためにぎこちなくハサミを使っていけば、ぶんどられる。絵を描こうとする前に、色鉛筆をぶんどられる。俺の図工の成績は意欲関心だけで成り立っていたとだけ言っておこう。

どこか遠慮していた彼女たちも作業を始めれば 生き生きとしている。固定された作業をすることはなく、豊かな表現力を存分に発揮し多種多様な装飾物を作っていく。上手にできたと思えば見せてくれて、褒めることで彼女たちのやる気は連鎖的に向上していった。同姓だからすでに おねえちゃんとなった藤沢さんは囲まれて逃げ出せない。

「あのお兄さんとは知り合い？」

「そうだけど。」

独り黙々と作業をしていた子に話しかけたが、会話は続きはしない。たぶん比企谷先輩をチラチラ見ていたため 話題として提供してみたが上手くいかなかった。一度離れてパソコンと、はさみと折り紙を持って側に座りこむ。

「みんなのどこ行ってきたら？」

「見返す方法ないかなって探してる。なにかない？」

テザリング機能でネット回線を繋げたパソコンを開く。

『クリスマス 飾りつけ』と画像検索して、材料と技術的にできそうなものを探す。

「これ。」

「おお、雪の結晶か。」

指差してくれたのは切り絵だった。あらかじめ4つ折りしておいて、書いた線通りにハサミで切って開けば完成しているという簡単なものだ。「よし。」と声に出して意気込んで、鉛筆で折り紙に書きこみ始める。これは線でできた図形の応用だと思えば　なんか行ける気がする。

「できたよ。……え？」

「留美ちゃんすごい！」

「みんな見て見て！」

俺よりも早く完成した物を見た子どもたちは、はしゃぎ出す。

カンニングした俺が言うのもなんだが、それは盲点ともいえる装飾物だった。時間と労力をかければいいものができる可能性は高くなるだろう。しかし柔軟に考えることができたなら、簡単にいいものが完成するのだ。会議の様子を見れば　ブレインストーミングで並べられた案が目に入ってしまう。

ともかく、その完成品を見て「教えて。」の嵐に彼女は巻き込まれた。困惑から立ち直り　慣れないながらも教えているし、きつかけさえあれば大丈夫そうだ。

「月村君、すごいですね。」

「藤沢さんも、立派なおねえちゃんやってたな。」

俺たち高校生及び大学生は子どもたちからすれば、特殊な年齢層なのだ。友達とも違って　親や先生とも違う、一期一会のお兄さんお姉さんである。頼りになるおねえちゃんとも、どこか頼りないおにいちゃんとも、時には遊ぶ機会ってあっていいと思う。兄弟姉妹のいない子どもも増えているしな。

「○○先生、そろそろですかね？」

「ええ、貴重なお時間をありがとうございます。」

「いえいえ、こちらこそです。……よーし、外も暗いし帰る時間だ！」

「「えー。」」

「今度来たらクリスマスツリーの飾りでも作るか？」

こうして、目を輝かせてくれる子どもたちとの時間はあっという間に過ぎるのだ。別れを惜しむ声と笑顔が何よりも報酬で、楽しんでくれた証明を自然とくれる。ボランティアは楽しいという『実感』は確かにあったのだ。

「それで、どこまで決まりましたか？」

しかし本来の仕事が終わったとは言っていない。〇〇先生と手分けして子どもたちを送っていった後、会場まで戻ってくる。子どもたちとの楽しい時間をいい感じに締めたと自負しているのだが、こっちの状況はまだ芳しくないらしい。子どもたちが作ってくれた『成果』を丁寧にダンボールに詰めながら、状況を尋ねる。

「……悪い。一色たちに聞いてくれ。」

比企谷先輩はどこか浮かない顔をして 会議室から出ていく。

本牧さんからメモを見せてもらえば、前回よりはマシに思えてしまう。

何を悩んでいたかは俺には分からないが、悩んでいるという事実だけは分かる。しかし先ほどのように独りを孤立させないようにすることはできなかった。先輩たちにどんな言葉をかけてあげればいいのか、事情を深く聞くこともしない俺にはできなかったのだ。依頼というきっかけを遠ざけた奉仕部の関係は壊れることもないが変わることはない。

このままじゃいけないと思うし、雪ノ下先輩と由比ヶ浜先輩に会ってみようか。

その後、俺たちも会議室を出て今日は各自帰ることになった。

飾りつけの入ったダンボールや文房具などを借りている会議室に置いていくわけにはいかない。もちろん、明日には場所を確保してもらうつもりである。この際、もう会場設営を始めることで会議に発破をかけてみるのもいいかもしれない。

「それで伊月はいつもどんな様子ですか？」

「そうですねー、授業もちゃんと受けてますよ。生徒会もバリバリ働いてくれています。今日なんか子どもたちの面倒見よかったですかねー。あれ、もしかして 年下好き？」

「ここで好きって言ってもロリコンとか言うなよ？ いや、好きだけどな。」

「そうですか。」

「なんで残念そうなんですかねー……」

仕事帰りの親に連絡して来てもらったのである。

すでに暗くなっていることもあって、一色さんも送り届けることになった。知り合いの親って緊張するものだろうに すでに意気投合しているのである。今や俺を置いてきぼりに三者面談するまでに至っている。

「本当に昔から手間のかからない子で。」

「へえー。」

実を言えば、俺に『昔』なんてない。

似た青春を送ってきたようだが 出身地も違うし、人間関係も違うのだ。高校入学前というのはタイミング的にちょうどよかったのかもしれない。1度目の青春で得た繋がりを全てリセットして、ここに俺がいるのだ。

「もつと頼ってくれていいんですけどね。頼ってくれていいのよ？」

「ですね。もつと頼ってくれていいんですよ？」

「え、これ俺が外野なの？……ま、何かあればな。」

あらかじめ言っておいた公園で車は停まる。

「本当にここでいいの？」

「はい、ありがとうございます。」

「いえいえ、伊月のことよろしく願いますね。」

「はい。任せてください♪」  
足早に帰宅していったのを見届けて、車は発進する。

「好きなんですよ？」

「まあな。やっぱり気づくか。」

「あなたのお母さんですもの。がんばりなさいよ。」

どれだけ年を取っても、俺は母親には敵わないらしい。

「で、一色さんのどこが好きなの？」

母さんとはよく似ていると 父さんには言われる。

心配かけまいとしても 親には心配をさせてしまうものだ。

こうしていつも顔を合わせていても、

たとえ遠く離れていても、

安心させてやりたいと思うのは 俺が息子だからだ。

## 第13話 『本物』

もうクリスマススイブまで残り1週間を切った。

海浜側はずっとディスカッションを続けていて、外野から見れば音楽のジャンルの良さを述べ合っているに過ぎない。もはや『お互いにリスペクトできるパートナーシップ』なんてものはない。パーティーといえは演奏会という話題から派生していったのである。

総武側と言えば、

藤沢さんや一色さんが小学生たちと協力して装飾物を製作していった。さらに海浜側から抜け出してきた折本さんも協力してくれている。発注したツリーも無事届いて、すでに会場で飾りつけも順調に進んでいるのだ。

俺や本牧さんはといえば息抜きに顔を出す程度だ。比企谷先輩も知り合いの女の子を気に掛けて時折り手伝いに行く。俺たち男子組は、根拠を用意して海浜側に何度も進言するしかない。会議で内容が固まりきっていないので、仕事大好き人間がデスクワークすらできないのだ。小学生たちの様子を見に行ったとき 成果を自慢してくることが何よりも癒しである。

「6限の体育って マジでないとと思うんですよ。」

「終われば放課後だからって、ギリギリまでやるしな。」

「女の子の放課後って貴重なものなんですけどねー。」

「生徒会長ご苦労様です。」

「そっちの意味で伝わっちゃったか。」

夕日が照らす特別棟を一色さんと並んで歩く。

海浜側から会合を休みにすることを提案されたため 奉仕部に向かっているのだ。

比企谷先輩はいつも協力してくれる。

先輩がいれば憂鬱な時間は憂鬱ではなくなるのだ。このままずっと頼つてはいけないのだと思うが、それでも甘えてしまうのは先輩が頼りになるからなのだ。奉仕部の目的はサポートに過ぎないはずなのに同じ時間を過ごしてくれて、傷ついていく。

海浜側と言葉がすれ違いながらも会話を続けようとして、時には独りを選ぶうとする1人の女の子に寄り添っている。先輩がいなければ 状況はもっと滞っていただろう。

このまま頼り続けてはよくないと思えたから、雪ノ下先輩と由比ヶ浜先輩に相談しようと思ったのだ。

「待って。」

扉からそつと手を離す。

その行動に確かな理由は存在しない。

最近開くことのなくなった扉の前に立てば、声が聞こえた。

たぶん比企谷先輩に投げかけた雪ノ下先輩の言葉であつて、俺たちに向けた言葉じゃない。

先輩を呼びに來ただけなのに、なぜだか今は聞かなければいけない気がした。もしここで扉を開いてしまったなら奉仕部という場所は消える気がした。そして俺たちが変わるきつかけとなる気がした。

「そうじゃないよ。なんでそういうことになるの？おかしだよ。」

「いや、おかしくはねえよ。……自分のことは自分で。当たり前のことなんだ。」

感情の籠った由比ヶ浜の声と違って、あまり大きな声を出さない比企谷先輩の声は扉に近づいてくれたおかげで 奉仕部の外に漏れる。俺や一色さんにとっては話の途中からだ。奉仕部に関わったのも途中からなのだ。

それでも、察することはできた。

「……そうね。」



「違うよ。2人が言ってること全然違うもん。あのね、ヒツキー1人の責任じゃないんだよ。考えたのはヒツキーだし、やったのもヒツキーかもしれない。でも、あたしたちもそうだよ。全部、押し付けちゃったの。」

「……いや、それは違うだろ。」

「こうなってるのってヒツキーだけが悪いんじゃないかって、あたしも、そうだし……ゆきのんの言ってること、ちよつとずるい思う。」

「……今、それを言うのね。……あなたも、卑怯だわ。」

たぶん俺たちのように、2人は先輩ならなんとかしてくれると思うたから信頼して、結局は『やり方』を否定して傷つけてしまった。本当はもっと頼ってほしいという優しさを隠して 一定の距離を保つてしまったのではないか。同情とか憐れみとか、安易に近づきすぎることを先輩は拒んでしまう。

だって、先輩が大切だから。

だから傷つけないし、信じるのだ。

「待て、そういう話がしたかったんじゃないよ。」

先輩が2人の言い争いを止めようとする。もし、先輩が口に出さなければ 俺たちは扉を開けてしまっていただろう。扉を隔てて外から聞いているだけでも辛いものだったのは確かなのだ。

「ゆきのん、言わなかったじゃん……言ってくれなきゃわからないことだって、あるよ。」

「……あなただって言わなかった。ずっと取り繕った会話ばかりしていた。」

それは俺の責任でもあるだろう。日常に隠れた本当から目を逸らして、奉仕部の過去も未来も聞こうとしたことなどなかった。ありのままの今を続けることが最善手だと自分に言い聞かせてきたのだ。

「だから、あなたが、あなたたちが望んでいるならって、そう……」

一気に壊れる可能性から、変わらないことを選んだ。

「言わないとわからない、か。でも、言われてもわかんねえことあるだろ。」

「そんなこと……」

ない という断言を由比ヶ浜先輩はできなかった。

「……言われても、たぶん俺はそれに納得できないと思う。なんか裏があるんじゃないかって、事情があつてそう言ってるんじゃないかって勝手に考えるかもしれない。」

「でも、そのぶんちゃんと話せば、ヒツキーともつと話せば、あたしは……」

「そうじゃないんだ。」

伝わらなかつた1人1人の感情。

すれ違いが起きた。

大切に思うからこそ 傷つけ合つた。

「言つたからわかるっていうのは傲慢なんだよ。言つた本人の自己満足、言われた奴の思い上がり……。いろいろあつて、話せば必ず理解し合えるってわけじゃない。だから、言葉が欲しいんじゃないんだ。」

「だけど、言わなかつたらずつとわかんないままだよ……」

「そうだな……。言わなくてもわかるっていうのは、幻想だ。でも……。でも、俺は……」

言わなくても伝わりとか心が通じ合うとかっていうのは、この現実で『理想』のままなんだろう。

比企谷先輩とのラノベの雑談、由比ヶ浜先輩との日常会話、雪ノ下先輩との勉強の話、藤沢さんとの生徒会、本牧さんとの恋バナ、平塚先生の授業、戸部先輩との部活の話、葉山先輩との相談、クラスメイトとの定型文、小学生との遊び、玉縄さんたちとの会議、そして『一色さんとの青春』。

話したい。仲良くしたい。一緒に過ごしたい。安心させたい。頼ってほしい。分かつてほしい。傷つけたくない。そうやってどれだけの時間と回数を重ねても何か足りない。

「それでも……」

先輩が声を絞り出せば、俺も身体が震えた。

「それでも、俺は……」

「俺は、『本物』が欲しい」

先輩にとつての『本物』が何であるかははっきりしない。自分にとつての『本物』を探しに行くことが重要なのだ。

考える。

安らぎを貰いたい。頼りたい。甘えたい。デートしたい。好きと伝えたい。そして、ずっと側にいたい。しかしそもそも、『異物』が人を愛するなんて自己中心的でひどくおぞましいことなのだ。だから、俺という転生オリ主は醜い感情を隠すし、ちゃんとすることは無い。それでも、

めんどくさい俺を望んでくれるのなら――

俺も『本物』を求める。

真剣に聞いていた一色さんもどこか腑に落ちた顔をしている。

「私には、……分からないわ。ごめんなさい！」

雪ノ下先輩が部屋から飛び出してくる。

俺たちのことに気づかないほど冷静さを失っていた。

「ヒツキー行かなきゃ！一緒に行くの！……ゆきのん、わからな  
いって言ってた。どうしていいかも分かんないんだと思う。あたし  
だって全然分かんない！でも、でも分かんないで終わらせたらダメな  
んだよ！今しかない。あんなゆきのん、初めて見たから……今、行か  
なきゃ……」

「1人で歩けるからいい。……行くぞ。」

先輩と由比ヶ浜先輩が続いて出てくる。

「先輩、雪ノ下先輩なら上です。上。」

「雪ノ下先輩のこと、よろしくお願いします。」

「……ああ。」

「うん、ありがとう。」

「それじゃあ、また明日ですー！」

俺たちは先輩たちの後輩である。

しかしまだ俺たちは本当の奉仕部を知らない。

扉が開いたままの奉仕部という場所には、今は誰もいない。しかし先輩たちなら、また3人でこの『本物』と呼べる場所に戻ってきてくれるはずだ。そんな先輩たちに過去の依頼でも今度聞いてみることにしよう。そして奉仕部の未来については自分で見てみることにしよう。

澄んでいる夕暮れの空は奉仕部を確かに照らしていた。

しかしまだ夜は訪れない。

「その、いろはさん、俺と友達になってくれない?」

場の雰囲気によつて勢い任せに、口に出しただけであつて、カッコつけることなどできず自信なさげに伝えてしまう。こういう重要なところで締まらないのが、俺らしきなのかもしれない。それでもようやく一歩は踏み出すことができた。

「なんですかもしかして口説いてるんですか、今ちよつと感慨深いシーンなんで今度出直してきてくださいごめんなさい。」

「いや、今は口説いてないから!!」

いや、いつかは口説こうと思つていますけどね。

本当に心臓をバクバクさせてくれる。

「ていうか、伊月君とはすでに友達ですよ。」

やはり彼女の可愛さに振り回されるのが好きなのだろう。

「さ、お仕事終わらせちゃいませうか。」

「うちの生徒会長がまさか自分からとは……」

「はい、失礼なこと言ったので、ノルマ増やします。」  
「任せな。」

「いやその年ですすでにワーカホリックなんですか。今から将来心配しちゃいますよ。」

夕日の下、2つの影は確かに少しずつ近づいていた。

「あ、そうだ。」

隣で見上げてくる小悪魔は綺麗だった。

「今は、友達なんですよね。だから——  
覚悟しておいてくださいいね。」

## 第14話 先輩と後輩たち

作ってくれた朝ごはんを食べ サッカー部に顔を出す。

生徒会に入ってからにはあまり行くことがなかったが、9月から定期的に手伝いに行っているのだから 完全にやめたわけではないのだ。自転車を使って10分ほどで着く範囲に住んでいるから、ある程度早起きができれば支障はない。

いまだに持たされている合鍵を使って部室を開けようとしたとき、「おはよう。」という元気な声でいろはさんが駆け寄ってくる。昨晩LONEで朝練に来るかどうかの話題が出たため、彼女が来ることは知っていた。気温が寒いということもあって俺も彼女も学校指定の体操服を着ている。学年によつて色分けされているジャージであつて 1年は赤である。

「おはよう。」

よほど急いできたみたいで一安心するように、ふーつと息を吐く。

「ごめんなさい、遅れちゃいました。」

「まだ部員来てないし、間に合ってるんじゃない？」

「はい。間に合つてよかったです。」

ニコツと笑みを浮かべれば 昨日のことを思い出してしまふ。持っていた鍵はするりと取られてしまふ。

「さ、始めますよー。」

「お、おう。」

タオルやスポドリの準備をいつも通りに行つていく。気温が低いこともあつて 温かいお茶も用意しておく。温かいスポドリには賛否両論あるからだ。適材適所で分担しているとはいえ、仕事量は増えているはずなのに 独りでやっていた時よりもテキパキと動いている。部員たちが集まり始めた頃にはすでにノルマをこなしていた。

葉山先輩の人望によつて集まりは悪くないが、気温が低いことと朝早い時間であるために集中力が欠けている。人に言われたから、いつ

もやっているから、効果がありそうだから、そんな曖昧な考え方のだ。辛い、やりたくないという負の感情を隠したままチームに合わせ。華やかな青春が表面的に表れていたとしても、それが正しいと断定することはできない。

「いろはさん、ちよつと行ってくる。」

「……はい？」

球技全般が苦手であってサッカーも苦手だ。

具体的な練習方法を俺は知っているわけではない。

それでも、

「葉山先輩、俺も混ぜたっていいですか？」

「ああ、いいよ。」

他のメンバーからもマネージャーの1人として扱われているように、否定する意見はなかった。今日の走り込みは指定時間内グラウンドを走るだけであって、ボールを持ち込んでドリブルだったなら苦戦していただろう。

「よーい、スタートー！」

いろはさんの合図で集団から飛び出すのは俺と葉山先輩。

スタートダッシュするとは思わずに、出遅れたメンバーも続く。彼らと違って毎日とはいかないが、定期的にランニングは行っている。大学時代では年1度の地域のマラソンには参加していたため、スポーツが苦手な俺もこうして競り合うことができるのだ。

葉山先輩も俺も少し距離を開けているだけで一周遅れとなるメンバーはいない。いつもどこか流していたメンバーも寒空の下、確かに走っていた。たった20分の走り込みだけれど、青春は確かに存在していたのだ。

だがサッカーの練習に混じれば、教えられる立場に回った。

「今日はありがとう。あいつらも少しはやる気を出してくれた。」

「いえ、結局邪魔しちやっみたいですし。」

「楽しそうに教えていたし、いいんじゃないかな。」

「そうですね、それならよかったです。」

「……君もいろはも変わったね。」

「俺たち高校生は、三日会わざればなんとかってやつですよ。それじゃあ 失礼します。」

スピードワゴンはクールに去るぜつとこだ。

葉山先輩に制服を着た女子2人が話しかけている。

たぶん1人は付き添いで もう1人が恋する乙女だろう。トップカーストにいる『獄炎の女王』は葉山先輩に押し掛ける女性の数を削減してくれた。理想像を彼に押しつけて中途半端なアプローチをかけるところは、葉山先輩の人気度は理解しているとはいえ 葉山先輩の部活仲間たちからすれば好ましいものではなかったのだ。葉山先輩の居場所は確かにここに1つはあった。

「はいどうぞ、お疲れ様。」

「なんかごめん。仕事任せちゃって。」

「いえいえー、伊月君もご苦労様でした。」

途中参加してきたマネージャーもいてタオルを配り終わったみたいで、すでに部員たちは授業に向けてクールダウンしている。かくいう俺も慣れないことをしたため ベンチに座りこむ。

「走るのが速いとかサッカーが上手ってことじゃないんですけど、なんていうかカッコよかったですよ。……あ、今のって私的にポイント高くないですか!？」

「そういうセリフどこかで聞いたようでまだ聞いていないよな。」

彼女が手渡してくれたタオルで汗を拭く。

顔の熱は収まることはなく 心臓はバクバクと音を立てる。

『実感』もちゃんとあるし、『成果』もちゃんとくれた。

「ていうか1時間目体育なんですけど大丈夫ですか……」

「え……」

「がんばって休んでくださいねー。」

「手を抜けば……」

「ダメですよ副会長♪」



\*\*\*

一色いろはは可愛くない後輩である。

あざとい。

自分の長所を理解していて、幼さやあどけなさをうまく利用する小賢しい部分がある。自分をキャラクターづけし、それを保持しようと努める。その打算的可愛さに屈した男子が多いことだろう。しかし妹の小町と比べてしまえば、可愛くないあざとさに過ぎないのだ。

購買で菓子パンを買っていつもの場所に腰掛けていた。

冬空の下、温かいマツ缶は全身に染み渡る。

こっちは陰口言われなにかヒヤヒヤしているのに、呑気に隣で弁当を食べる後輩がいる。膝の上にお弁当箱置くところも計算された行動なのだろう。

「そういえば、月村は一緒じゃないんだな。」

いつも生徒会でこき使っているし、2人とも友達少ないし。俺、戸部、あの会計とともに『一色いろは被害者の会』に所属しているが、同じクラスだから階位は上だ。

「まるでいつも一緒みたいな……はっ！もしかして相性がいいっていうことですか詳しく聞きたいところですが今はやめてくださいいじめんなさい。」

早口でまくし立てたから何を言っていたのか八幡ワカンナイ

「い、月村君なら教室にいるんじゃないんですかねー。葉山先輩ほどじゃないですが人気ありますし。先輩と違って。」

「いやそこまで強調しなくていいから。ついでに俺と葉山を比較しななくていいから。」

月村はいい奴であることは間違いない。

葉山ほど期待されることはあまりないようだが、頼りにされればちゃんと応える。勉強で分からないところを聞けば教えてくれるよ。うな、都合の良い奴として扱われる。高校デビューを満喫しているり

ア充にはさぞ都合の良い犠牲者だっただろう。

「先輩は『依存』ってどう思います?」

声色が真剣なものに変わる。

ネット依存をはじめ世の中には『依存』で溢れている。ここで言いたいのは人間関係についてだろう。詳しい事情を察することはできないが、以前の月村は頼られることを存在意義とまでしていた。対して、一色は媚を売って人を頼ることに長けている。一色は月村に助けられることに、月村は一色を助けることに、かつて依存していた。

さて、依存は是か非かという問いを考えていこう。

世間一般で言えばネガティブなイメージであることは確かだ。人間関係の依存は特に『悪』とされている。その対象がいないと身体的または精神的に正常の状態を保つことができないし、依存が進めばいつしか自分自身を見失う可能性もある。

かつての月村は、嫌われることをひどく恐怖していた。

しかし今の月村は、間違いを正そうとあがいている。

「……………考えてもがいて、あがいて悩め。そうでなくては『本物』じゃない、か。」

平塚先生の『お説教』は確かに胸に響いたな。

「間違っているかどうか自分で決めればいいんじゃないの?」

「なんかむずかしいですね……。でも、甘えてもいいのかーとか。独り占めしていいのかーとか。ほんと悩んで損しちゃいました。ありがとうございます。」

「お前、葉山のお前はあんなにアタックかけてたのにな。」

「それは正攻法が効かないっていうかー、反撃されちゃうっていうかー。……………って、あつま!!」

「社会が厳しいんでな。コーヒーくらい甘くていいだろ。」

社会は常に犠牲者を生もうとする。俺ならそんなまやかしは全部捨てて ぶち壊して台無しにしてしまいたくなる。だからといって、俺はあいつの生き方を否定することはない。生き方を肯定して、そし

てあいつをちやんとさせてやる奴が1人いるんだ。

「月村は好きだぞ、それ。」

「甘いですけど嫌いではないですよー♪……ってなんですかその超めんどくさそうな顔。めんどくさくない女の子なんていませんよーだ。」

「そうだろうな、めんどくさくない人間がそもそもいないし。」

「その方が人間味があつて素晴らしいことなんじゃないですかね。一色さんお待たせ。先輩 今日もお邪魔します。」

「いいぞ。ほれ。」

膝掛けを持ってきて一色に渡すという紳士の行動を見せている月村にもマツ缶を渡す。やはり人助けは性分に合うようで、『実感』とともに『成果』をちやんと求めるのだ。言うなれば、サービスマスの社畜だな。ワーカーホリックと化して 天然由来のあざとさを見せるまである。

一色もお礼にと いろ〇す みかん味を渡している。

あらかじめ用意していたアイテムを取り出したところ、あざとい。

3人で座るベンチは狭いとはいえ、しかし悪い雰囲気ではない。

あざとさをぶつけ合った結果、初心<sup>うぶ</sup>な表情を見せる後輩たちの青春ラブコメは不快ではなかった。いや余所でやれ。

ともかくお互いが秘めている『素敵な何か』に触れたのだろう。

俺にとってそれなりに身近な彼女たちも色違いのものを持っている。

## 第15話 俺たちのフェアリーテイル

クリスマスイベントまであと数日しかない。

土日に会議は開かれることはないし、金曜の会合で方針を完全に決定しておきたかったが、状況は滞っているままだ。海浜側が1日の会合休みを利用して作ってきたレジュメには啞然とした。

クラシック・ロックバンド・ジャズ・讃美歌・ゴスペル、そして合間にミュージカル、これを全部やるらしい。これだけの種類となると、それだけ多種多様な演奏者や音楽隊を呼ぶ必要がある。その際にかかる予算は大きいし、練習やりハーサルも必要となってくる。もう1週間もないのに、どの団体が協力してくれるのだろうか。クリスマスイブの予定がすでに埋まってしまっている人は多いことだろう。いい食材をとにかく混ぜただけで、いい料理ができるわけではないのだ。

しかし、『あの日』のおかげで、雪ノ下先輩と由比ヶ浜先輩が協力してくれるようになった。比企谷先輩も心機一転して、奉仕部として依頼を受けてくれる。金曜の会合は2人の現状確認に費やしたとはいえ、奉仕部の時間が動き始めたことに意味があるのだ。協力してくれることは嬉しいし、一部員としても協力は惜しまないつもりだ。

そして、本日も土曜日、

東京デイスティニーランドに来ていた。千葉県だよ。

平塚先生が参加した『友人の結婚式』の二次会でペアチケット2回分も当たったらしい。貰い手を探しているというお涙頂戴の話は全員でスルーしておいた。頭を悩ませる俺たちにそもそもクリスマスが何たるかを学んで来いって言われ、導かれたのだ。平塚先生はちゃんと俺たちを見ていてくれて、迷ったときには手を貸してくれる。俺個人としては理想の教師像だった。

ともかく雪ノ下先輩は年間パスポート保持者だったので、全員無料で夢の国に来れたのである。

「それじゃあ、行きましょか。」

ゲートをくぐれば 一瞬で世界が変わる。

俺にとつては、完全に未知の世界だった。

「ツリーの規模が違うわね。」

「ああ、だが……」

「負けてませんね。」

巨大な城を背景として、巨大なクリスマスツリーがまです目に入る。計算されつくした完璧な飾りつけだが、俺たちと小学生が作った手作り感溢れるツリーの方が好きだった。

「ね、ね、写真撮ろ！」

「3人とも早くー！」

一応遊びに来たのではなく、参考にするためだ。研修旅行とか取材と言えるものである。そんな建前を言ってみたものの結局は『自分がこの世界を楽しんでこそ大事なことが見つかる』ので、前へ進む。

写真撮影にすぐには移行せず、列に並んだ。

休日ということもあって9時でも非常に混み合っている。千葉からだと20分で来れてしまうが、電車のピークを避けて少し遅めの集合となった。ちなみに大学生のときは夏休みの時期がずれているので、世間が仕事や学校の日にあえて行くこともできた。

「笑顔を振りまき写真を撮り続けるって、プロだな。」

「なんか疲れそうですけどねー。」

やはり自然体が一番好きだ、本人も楽だろうし。

「ほら、ポーズ決めた方が楽しいですよ！」

「これでいいのか？」

ようやく回ってきた番で撮ってもらった最初の写真には、今のありのままが残されていた。これを加工してSNSに投稿する人も多いだろうが、俺たちは携帯をそつとポケットに入れる。

「ぎ、張り切つていきましょー。」

「おー！」

今日のコースは いろはさんが考えてきてくれた。

来たことがなかった俺は何があるのか分からないし、比企谷先輩もファストパスの話まで出せば不得手だ。雪ノ下先輩はある一定のアトラクションを数回行ってしまうだろうし、由比ヶ浜先輩は楽しみになりすぎて眠らずに来そうだ。選択肢は簡単に絞られた。

彼女の千葉県民特有のスキルによつて、効率よくアトラクションに乗っていく。その過程でファストパスを取っていくことも忘れない。初めて来た時は苦戦して、結局友達に手を貸してもらった。

「ゆきのん、大丈夫？」

「大丈夫、問題ないわ……」

スペースユニバースマウンテンっていうコースターに乗れば、この光景である。雪ノ下先輩が由比ヶ浜先輩に支えられている。絶叫系に対して耐性がある俺と違って、程度の違いはあれど皆ふらふらしている。加えて、人気アトラクションであるので人混みも非常事態レベルである。

ので、

「あ、ありがとうございます。」

「その、嫌なら、やめるけど……」

「そんなことないですよ。」

距離をゼロにして、腕を背中に回して隣から支える。

ふらつくいろはさんが人の流れに巻き込まれそうだったのだ。

これで合っているのか分からないが、ちゃんとしたという想いだけは確かにあった。

大丈夫と思つたところで そつと肩から手を離せば、惜しむように見つめてくる。

寒空の下で、温かさと熱を実感した。

前にいた先輩たちには見えていなかったようで 白い息を2人同

時にそつと吐いた。

「これを待っていたわ。」

雪ノ下先輩の大好きなキャラクターの、パンさんのアトラクションである。笹が大好きなパンダでカンフーの達人だ。先ほどまでの疲れは吹き飛んで 足早となっている。

「ちよつと、1人で乗っていいですか？」

組み合わせを決めようとしたときに 自然と声が出た。比企谷先輩が一早く了承したことで、3人は戸惑いつつも先に乗って行った。

ふと思いつ出したのだ。

ある遊園地で迷子になったことがあるって両親から聞いたことがあった。泣きながら探したのに、ハチミツが大好きな優しいクマの側で笑っていたらしい。

「パンブーフアイトの世界へ行つてらっしゃーい！」

他に人はいるけれども、独りだ。

ライドは暗闇の中へ移動していく。

光が弾け、未知の世界が広がる。

今の自分を、そして前世の自分を否定してきて、これからの自分を肯定することなんてできないのだろう。思い出を上書きしていったくらいで、俺が変わるなんてことはなかった。忘れようとしても思い出そうとしても、胸が痛む。

そもそも過去に囚われるということとは間違っているのだろうか。未来志向の人が多くと言われるけれど、過去志向の人だって現在志向の人だっているのだ。

ともかく、痛みを誰かに傾聴してもらえれば痛みは治まるのだろう。しかし痛みを悪化させることが怖いから、俺は痛みを治すことを選ぶことはしなかった。だから人から優しさを貰っても人を頼るこ

とはなかったし、繋がりを作ることから逃げ続けた。  
『PTSD』を自覚しつつも隠し続けたのだ。

それでも、  
理屈抜きに認めてくれる先輩たちがいる。  
ちゃんとしてほしいって言う女の子がいる。

俺にも居場所ができたのだ。

出口では彼らがちゃんと待っていてくれた。

「さて、パンさんグッズ買いましうか！」

雪ノ下先輩の最大目標がサンタ服のパンさんグッズであるし、  
シヨップに寄ることは確定していた。

それでも自然と、笑顔と声が出ていたのだ。  
ありのままの直感で選んだ、たった1つのぬいぐるみに手を伸ばした。

\*\*\*

今は半月と言えど、確かに満月になりつつある。  
夜になっても夢の国は明るいままで、  
色とりどりのライトで幻想的な綺麗さを醸し出している。

パレードにおける進路確保のためのロープで 比企谷先輩と雪ノ下先輩とははぐれてしまい、さらにアトラクション乗り場でトラブルが生じてしまったようで、先に3人だけでスプらいドマウンテンに乗った。いろはさんは絶叫系の耐性があまり高くないようで、今はベッチで休憩中である。

「ふう……結衣先輩は先に先輩たちと合流しておいてください。」  
「え？ うん、じゃあ後でね！」



電話をかけて集合場所を決めた後に、走っていった。

「聞いていいですか？——何を隠しているの？」

先ほどまでバクバクと音を立てていた心臓は自然と落ち着いた。何かを抱えているというヒントを与えすぎたと自分でも思う。本気の目をして聞いてくれたのだから、ちゃんと応えることにする。

もう、ここで間違えるわけにはいかない。

『転生』ってわかる？ ……中学3年の末に人生をリスタートしたってところか。大学3年まで生きていた世界はこの世界じゃない。このディステイニールランドはディ○ニールランドだったし、パンダのパンさんなんていなかった。だから俺の魂？はこの世界の『異物』ってこと。」

いざ説明しようとする、こんがらがってきた。そういったラノベを読んでいた比企谷先輩ですら信じがたいことだろう。当事者の俺ですら非現実的なことだと思っているし、まるでお伽話のことなのだ。

「気持ち悪いだろ？ 意味不明だし。」

伝えたいと思っているけれど、伝えてしまったら終わるかもしれない。そんなジレンマにこの数ヶ月悩まされ続け、今ようやく楽になれた。一番言いたくて一番言いたくなかった人に言ってしまったって、俺はまちがいだらけなのだと再認識した。

それでも、——

「それでも、俺は『本物』が欲しくなった。」

だから踏み出した。

「そうなんだなーって感じですよ。納得がいったっていうか……でも特に変わることはないですよ。あつ、でも私 年上好きみたいですわね。」

「……そうか。俺も年下好きみたいです。」

「私も、『本物』が欲しくなったんですよ。昨日の先輩の話 スツと入ってきたんです。……あなたはちゃんと見ていてくれて、不器用

ながらも本気で向き合ってくれる。でも本当は女子って可愛いところだけ見せておきたいものなんですけどね。」

一度、言葉を区切り素の笑顔を見せる。

「それはもう振り回されっぱなしで、いろんな私を見せてしまう。わたしが好きになれないところも好きになってくれた。」

計算高い女子、一喜一憂する女子、真剣な女子、素の女子、1人の女の子、すべてが合わさって『一色いろは』である。その想いは本気で向き合っている今も変わることはない。

「だからわたしもつとあなたの気持ちに触れたい。いつも助けてくれて、優しさをくれるのは嬉しいけど、不満や不安も言っしてほしい。そうじゃないと、『本物』の恋愛じゃないと、もう満足できないから。」

人の笑顔が俺の幸福に繋がると思っていた。

誰も傷つきたくなかったから 負の感情を隠してきた。

「……………確かに痛みを言わないことは辛かったけど、でも否定されるのが怖かった。でも これからはちゃんと全部気持ちを伝えていくから、辛い時はちゃんと頼るから。——だからありがとう。運命の人。」

でも、いろは相手には見せてしまうようになったのだ。好きな人に弱い自分を見せることで助けてほしかったのだと今ならハッキリと分かる。俺が傷つくことで傷ついてくれる彼女がいるから、この世界で俺はもう絶対に独りじゃない。

「わたしもつとあなたのこと知れてよかった。」

「ありがとう……………聴いてくれて……………」

抑え込んできた『傷み』と『想い』が全て溢れる。

抱え込んでくれる『温もり』が涙を幸せのものにしてくれる。

距離は縮まり ゼロになった。

繋いだ手の温もり、染まる頬、潤んだ瞳、長い睫毛、優しい香り、ふわふわの亜麻色、柔らかかった唇、そして華奢な身体と温かい心、つまり彼女の全てに見惚れる。

「あなたの前で私は私のままでいられる。ワガママで、めんどくさい私のいろんなところをちゃんと側で見してくれる。——それが私にとっての『本物』。」

「いろんな君を側で見たい。中途半端で、めんどくさい俺を振り回してちゃんとさせてくれる。——それが俺にとっての『本物』。」

「伊月が本物。」

「いろはが本物。」

君が教えてくれる『本物』は透明だった世界を彩ってくれた。素直に笑顔になれたのはあなたのおかげ。

2人揃って立ち上がり、囁き合う。

「私のどこが好きか具体的に。」

「これからの楽しさということ。」

「ここで必死にポイント稼ごうとしないところ、好きですよ。それじゃあ 毎日教えてくださいね♪」

「ああ、毎日教える。教えてほしいって言うところが好きだから。」

『本物』を見せまいと 人混みに紛れていく。

俺もいろはも意外と独占欲が強いみたいだ。

とある転生オリ主はそう簡単には見分けがつかないだろう。

なぜなら——

「やばっ」

先輩たちを見かけて手を離す。

俺もいろはも実は純情みたいだ。

これから彼女のいろんなところをもっと知って、もっと好きになっ  
ていくのだろう。

「お、お待たせしましたー!」

「さあ急いで! お土産買いに行きましょうか。」

ホント、俺たちは締まらない。

俺たちの青春ラブコメはまだまだ続くし、これでいいのだ。

むしろ物語はようやく序章を終えた。

物語を締めるために——

約100年かかる以下の『証明』を解くこととする。

『俺たちの本物<sup>すき</sup>はまちがっていない』

## 第16話 ありふれた日常

日の光が眩しい。

背伸びをすると 机の上のパンさんがふと目に入る。物静かな愛らしいクマというわけではなく、カンフーが得意なパンダである。その鋭利な爪で悪を狩る姿は、子どもたち及び雪ノ下先輩に大人気である。

日曜日と言えば 寝溜めのためにあるのではないか。

早起きしてプ○キュアを見る子どもたちと大人たちは尊敬する。ちなみに後者には比企谷先輩が含まれている。今度、話題の男の娘プリキュアについてどう思うか聞いてみよう。戸塚さんのこともあるし 好きになつてそうである。

7時から二度寝を開始して、今や11時。身体に良くないことは理解していても睡眠欲という三大欲求に勝てないから仕方ないのである。まだまだ眠ることはできるが、そろそろ起きなければ母さんが来てしまうだろう。たとえ俺の部屋に来たところで焦るような物は置いていない。せいぜいラノベや漫画が目立つくらいだ。

「髪伸ばそうかな……」

「え。」

「……おっはよーございまーすー!」

「おはよう 元気いいね服も髪型も可愛いね。」

昨日は先輩たちと合流した後は何事もなく夢の国から帰って、ちゃんと夢の世界へ旅立ったはずだ。

現実逃避から生還して彼女の姿を見る。桃色のモコモコパーカーや白いスカートを身につけた、亜麻色の髪を一つ結びにした俺の彼女が俺の部屋で本を読んでいる。普段髪を下ろしている可愛い女の子がそういうことすれば可愛いに決まっている。

「べ、別に参考書なんて探してないんだからね!」

確かに俺はセカン党所属だが、なぜツンデレキャラにジョブチェンジしたのだろうか。ここでいう参考書とは 彼女が全く手をつけて

いない物理の参考書などではない。そう、俺の攻略本である。その事実に対して 彼氏として嬉しいと思うのは当然である。

「それで、なにしに来たの？」

「お土産を届けに来て、2人でおでかけするから面倒みておいてって言われました！」

敬礼してニコツと笑えば、ドキツとしてしまう。

「いやいや、男と2人きりとか危ないでしょう。」

「あー、確かにお父さんがうるさく……いつもそういうこと言ってますね。でも彼氏と2人きりって素敵なことなんじゃないんですか？」

「……とりあえず俺以外とは気をつけて。先輩とか葉山先輩はいいけど。」

「それって浮気しちやダメってことですね。もちろんしませんよ♪」

両親は俺がヘタレなのを知っているから 任せたのだろう。

ただしいろいろのご両親と早めに会う必要性が上がったのは確かだ。

一度部屋からちゃんと出てもらいパーカーとズボンに着替え、身だしなみを整えてリビングに降りる。俺の普段着が基本パーカーであるし あえて合わせてきたのだろうから、今日は俺なりのおしゃれでもいいのだろう。

「それで、何か作るけど希望ある？ ご飯ものとか麺類とか。」

いつ来てくれたのか分からないが、もう12時前だ。ここはお詫びにお客様である彼女に昼食を作ってもいいだろう。技能は自炊レベルはあるとはいえ、レパートリーは少ないことが事実なのだが。

「いえ、ここは私が作りますんで。」

水色のエプロンをすでに装着している。

さらにあらかじめ食材まで用意してくるとは、かなりのやり手である。いろはがテキパキ準備していく食材の中には塩麴に漬け込んだ鳥ムネ肉まである。米はすでに炊けているし、うちの彼女のポテン

シヤル高すぎなのでは。

「キャベ千くらいはやるかな。」

「手、切らないでくださいよ?」

玉ねぎの下ごしらえもしているようだし、包丁とまな板を使うことはないだろう。まずはボウルに氷水を入れておく。包丁をあらかじめ研いでおいて、キャベツ半玉を千切りしていく。

「へえー、上手ですね。」

「これでも飲食店バイトしていたから。」

いろはがフライパンで鳥肉を焼きながら話しかけてくる。

「それは手強いですね。」

「野菜の仕込みが中心だったし、胃袋を掴むのは簡単ですよーつと。」  
癖になっているのもあって、千切りキャベツはざるに入れて氷水で3分間だけ冷やす。シヤキシヤキ食感をもたらす効果もあるが、ある程度水分を含ませて長持ちする意味合いがある。後者は店長に言われたからで本当かどうかは知らないし、ちゃんと表面の水は切る。

鳥ムネの塩麴焼き、キャベ千、味噌汁、米、みかんという家庭的な料理が食卓に並ぶ。みかんは元県民としては譲れないところである。俺にとっては昼飯兼朝飯なのだが、愛情がいつぱいなので十分腹が膨れた。

つくづく素晴らしい彼女を持ったものである。

このまま家にいてもいいらしいが、お出かけすることにする。

目の前にはいつもの公園があつて、そのさらに向こうに見えるのが彼女の家なのである。つまりご近所さんだったのだ。俺は高校入学前にマンションから引越したので、実は幼馴染だったということはない。

「ところでこれってデートでオーケー?」

「もちろんですよー。こういうのが有効的な攻め方だつて知ってます

ので。」

「そうか。本チャンは期待してて。」

「っ！ ほーんとあざといですね。」

いろはも俺も顔真っ赤だ。

ロマンチックなデートはこっちから誘ってほしいって意味合いはちゃんと伝わった。あざとい策略家であっても、この可愛い小悪魔は純情な乙女なのだ。

バスに乗って駅近くのショッピングモールに着けば、服飾関係やアクセサリーショップを中心に回っていく。彼女にとって自分磨きは特技と化しているようで、流行に疎い俺を引っ張っていつてくれる。千葉県民御用達の場所であるし総武高生もいるだろうから、手を繋いでいるわけではない。

予想通り、知っている顔が見えた。

「あつ、葉山先輩……と、三浦先輩と海老名先輩もこんにちは。」  
「こんにちは、戸部先輩も。」

葉山先輩と戸部先輩繋がりで軽く知っているとはいえ、2人の女子の先輩とは自己紹介を交わす。俺も生徒副会長であるし、軽くは知られていたみたいである。

三浦先輩がいろはを警戒していることから、葉山先輩に好意を持っていることはわかる。だが海老名先輩の「君が噂の後輩君か」。先輩と後輩っていうのもいいよね……グフフ」って顔が緩んでいるのは一体何を想像しているのだろう。

映画まで時間を潰しているとのことで、ショッピングモールと一緒に回り始めた。女子は3人集まってファッションに夢中になっているみたいだし、男子3人は遠くで待機してニセ〇イの話をするにしていた。やはり原作を読んでいたから実写版を見るのであって、自然とどのヒロインが好きかという話に至る。

俺が万里花、戸部先輩がるりの魅力について語るが、葉山先輩は選ばない。



「隼人くん、俺らしか聞いてないしいじゃんかー？」

「勘弁してくれ、戸部。」

「誰も選ばないっていう終わり方だったら どうだったんでしょね。物語はいつか終わってしまうから、最後まで選ばないことはできないですし。」

彼の抱えた事情も過去も知らないし、聞いても断固として教えてくれないことはないだろう。傷つけないからなのか傷つけたからなのかまでは分からないが、何も選ばないことは誰かのためなんだと思う。

自分に言い訳して自分勝手に自己完結して 独りで苦しむのだ。過去に囚われて、今を生きることに必死で、不確かな未来を恐れる。いろはが少し大人びた服を持ってやってくれば、胸の痛みは治まる。

「これとかどうですかー、月村君！」

「抜け駆けすん、なし……?」

「似合うと思うよ、優美子。」

「あ、ありがと……」

対抗するようにやってきた三浦先輩は作戦に引つかかっている。葉山先輩と2人きりにしてあげようとすれば、自然と3つのペアができて衣料品店を回り始める。

彼のことをちゃんと見ていてくれる人は ちゃんといえるのだ。海老名先輩をとことん褒めて軽くあしらわれるけれどめげない戸部先輩も、葉山先輩にまつすぐ向き合う三浦先輩も、誰もがみんな『本物』を探しているのだ。

もちろん俺というはも『本物』を見つけただけでは満足していない。

映画館に向かった葉山先輩たちとは別れ、引き続きショッピングモールを回る。

「うーん……あつ、こつちも可愛い！」

アクセサリーショップで、本日限定販売だという指輪を見比べながら迷っている。

生き生きとした姿を目の前で見れることは感慨深く、そして優越感がある。このまま見続けていたいが、どうやら候補を絞る事ができたみたいで、3つの指輪を手のひらに乗せて見せてくる。自分の好みをちゃんと考えつつ、俺にも意見を求めてくれるのだ。

「これかな。」

「参考程度に理由を聞いてもいいですか？」

「いろにはその色が一番似合うから、かな。」

淡いピンク、いや桜色のガラス玉が輝く指輪は直感で選んだ。直感による俺の意見が求められたのであつて、ちゃんと応えた。

嬉しそうにレジに向かういろはを呼び止めて、半額分を奢るという選択肢を選ぶ。

\*\*\*

夕日の下、買ったばかりの指輪は右手の薬指で確かに輝いている。今までいろんな男子とお出かけた。でもどの男子もしつこくらいに見栄を張ってきた。取り繕って、必死にカッコよく見せようとしていた。だからそういうことをしない葉山先輩に惹かれたのかもしれない。結局、一度もデートをしたことはなかったけど。

まあ、私も男子ひとのこと言えないけどね。

だって私もわたしを可愛く見せようとするから、

デートで疲れが溜まったから、違う人とデートしてみた。

どんどんデートでストレスが溜まっていった。

どんどん自分が嫌いになりそうだった。

でも、――

「ファッションも勉強しなくちゃなー。」

伊月を初めて誘ったときも気晴らしのつもりで、伊月からすれば初デートだったみたい。何も考えてこなくて行き当たりばったりだったし、スタバの注文もぎこちなかったし、奢るとか奢らないとか何にも考えていなかったし。

いつも彼なりにデートしてくれる。

「もー、私が教えてあげますって。」

「ありがとう。でも、デートなのに頼りっぱなしなのはマズいよな……」

私を可愛く見せることを頑張るわたしをちゃんと見てくれる。

いつも教えられてばかりの私が、教えてあげるチャンス。

「まあ、女子的にはポイント低いでしょうね。」

「うっ、精進します。いろはが頑張ってくれるし俺も怠けてられないよな。」

「でもデートって自分が楽しいのが一番だと思っんですよね。だからわたし的には100点満点なんですよ。」

彼と過ごす時間は――

本当に、楽で、

本当に、楽しい。

「それなら、俺的にも100点満点だな。」

「そうですかっ♪」

腕を絡めれば 伊月はビクつとする。

私も彼もぎこちなく支え合って歩く。

「わたし以外とデートしないでくださいね……」

「俺も同じこと考えてた。」

「……ごめんなさい。」

なんて自己中心的でワガママなんだろう。

私はいろんな人とデートしてきたのに、一途に想っていてくれる素

敵な彼を独占したいと思ってしまう。

「本音を言えば 結構キツかった。でも今もこれからもいろはの素顔を見れるし、くよくよしてる暇はないな。」

速くなった心臓の鼓動が重なる。

彼には歯痒い思いをさせたみたいだし、

「……………これからは わたしの初めて いっぱいあげますね。」

甘く本音を囁いてみた。

「ヴェアアアアアアアアア!?!」

「うえっ!?! すごい湯気出てますよ!?!」

いつも年上の余裕を見せているのに 実は初<sup>う</sup>心<sup>ぶ</sup>。

彼氏ができたら自慢するだろうなって思っていたけど、今は秘密にしたいなって思っている。

## 第17話 『偽物』

求めるは、現状打破の一手。

雪ノ下先輩主導で現状確認を行った。

足りないものは、資金と人手、そして準備時間。まず、クリスマスイブまで1週間もないため、圧倒的に当日まで時間がない。また、人手に関してはこれ以上増やすつもりはなく、休日と終業式の放課後で追い込みをかける。

そして資金について、地域的なイベントであつて資金は個人から集めることを今更できず、学校側から支給されるものを頼りにするしかない。資金の割当は、主にパーティーの飲食物と音楽団への人材費となつている。前者はともかく後者が最大の問題なのだ。今のところ多種多様なジャンルの音楽を流そうとしている。しかし複数の団体を呼べば、それだけ額が大きくなっていくのだ。加えて、練習時間も十分に確保できないため、今更協力してくれる団体は多くはないだろう。

比企谷先輩は考えた。

なぜ会議に時間がかかっているのか。それは最終決定権を持つ者がいないということにあるのだ。玉縄さんは司会進行をしているだけで、会議が合議制によつて成り立っているからだ。

反対も対立も否定も、そして勝ち負けもあるちゃんとした場所にするのだ。

ともかく、今のままだと彼らの理想とする音楽会は完全には成立せず、クリスマスパーティーは、しよぼくなる。時間が余ることとで、音楽会を求めている人も楽しめるものを選びたい。雪ノ下先輩にビクビクしながらも、いろは主導で単なる話し合いを行つていく。俺たちは残された時間の中でちゃんとした会議を行つていった。

由比ヶ浜先輩が転換の発想を出す。

多くの時間をかけて、多くのお金をかけて、いいものができるとは限らない。それは逆も然りだ。ディスティニーランドのクリスマス

ツリーに、俺たちの作ったクリスマスツリーは負けていない。ここ数日、子どもたちと俺たちは確かに『成果』と『実感』を得たのだ。手作り感溢れる温もりのある催し物を選ぶ雰囲気となった。

「ちっ」

可愛い笑顔で小さく舌打ちをするというのは器用だな。

音楽会と被らないように、小学生や園児による演劇が選ばれた。ネットから拾ってきた画像をもとに良さを伝え、セリフを言う子と舞台で演じる子を分けるといふ画期的な発想まで加えた。急遽用意したプレゼンだったとはいえ、良さは十分に伝えられたはずだ。

「うん、考え方としてはありだと思うんだけど、2校合同でやることに意義があると思うんだよね。別々のことをやると、シナジー効果も薄れると思うし、ダブルリスクなんじゃないかな。うん、やっぱり音楽会の合間にやってもらおう。」

「そうかもですけどー、私的には結構こっちやりたいなーって思うんですよねー。どっちも見れるとか超お得じゃないですかねー。」

「それに、今のままだと音楽会の予定時間削減するしかないでしょう。」

「うん。だから、できるようにしよう。予算をプラスしてだね……」

「何度も言いますがー 時間は？ 準備とか交渉とか練習とか。」

「時間のことだったら、今から新しい企画を走らせるより、元の1つに絞ってみんなで協力したほうが効率上がるし、コストパフォーマンスもいいと思うんだよね、費用対効果的に。」

「でもでもー、今のところ予算で問題あるのってそっちじゃないですかねー？それに、こっちは手作りですし！」

現在、会議は平行線を辿っている。

いろはがあざとく攻め、俺が後衛として現実を突き付けてやる。耳の痛くなるような問題を手札としているが否定されないわけではないので、代わる代わる使っていく。玉縄さんへの援護ももちろん

あつて理由付けもあるから、完全には攻めきれていない。  
どちらの意見も間違っていないからだ。

「そもそも、二部構成に反対する理由って何？」

「反対ってわけじゃなくてさ……」

「失礼ながら、それぞれの学校で動くというのはどうでしょうか。」

本牧さんや藤沢さんは違った方向から意見を言う。

攻めていく中で見つかった本質的なことを俺たちは探していく。  
もはや意地になって合同に行うことに固執し始めている。その違和感の正体こそが切り札になるはずだ。

「それは、合同でやることでグループにシナジーを生んで、大きなイベントを……」

「シナジーなんてどこにもないし、それに、大きくって言ったって、このままだと大したことできないだろ。なのに、なんでまだ形にこだわるんだ。」

「企画意図とずれているし。それにコンセンサスはとれてたし、グラウンドデザインの共有もできてたわけで……」

「違うな。自分ではできると思って、思い上がったんだよ。だから、まちがっても認められなかったんだ。自分の失敗を誤魔化したかったからだろ。そのために、策を弄した、言葉を弄した、言質をとって安心しようとした。まちがえたとき、誰かのせいに来たら楽だからな。」

まるで自身に言っているかのように先輩が言い切った。

玉縄さんは何も言うことができない。

グループディスカッションを行う際に、前提として全員が自分の意見を持つことが求められる。責任を分散させることは責任者としていかに心地いいことか。与えられるものに委ねることは楽だけれど、それは痛み分けにすぎない。

まちがうことを躊躇ったら、青春は停滞する。

「そういうことじゃなくてさー、君がコミュニケーション不足なだけ

だと思っただよね。」

「否定も反論も、不満も言わないことがコミュニケーション不足なんじゃないのか。自分に言い訳して自己完結して全部肯定してやる。いや、全部肯定するって 単に考えることを放棄しただけかもな。ブレインストーミングって取捨選択をいつかはしないとイケなかったんですよ。難しいことを 誰かに委ねたら楽、ですよ。」

しこりを残したまま、誰かを傷つけたまま、不安要素を持ったまま、次のステージに行くのは ひどく怖いことだと思っていた。もう何も失わないようにって全部求めてしまっけれど、そんなことはできない。

痛みを抱えたままでもいい。

そうでないと、本当に大切なものをちゃんと見ることができなくなる。

「ねえみんな、クールダウンの期間を置くとかして、もう一度落ち着いて話し合うよ。」

甘く思える言葉で、まだ馴れ合いを続けようとする。同意する声も多い。誰も傷つかない世界にしようと思っ滞して、結局は誰かを傷つける。

痛みから逃避すること、痛みを分かち合おうという数の暴力に対して、俺や先輩は歯噛みしてしまう。

「ごっこ遊びがしたければ余所でやってもらえるかしら。」

雪ノ下先輩の凜とした声は、場を静めた。

「さっきからずいぶんと中身の無いことばかり言っているけれど、覚えての言葉を使って議論の真似をするお仕事ごっこがそんなに楽しい？」

いつもの罵倒より はるかに鋭く冷たいものだった。

「曖昧な言葉で話をした気になって、わかった気になって、なに1つ行動を起こさない。そんなの前に進むわけがないわ……。何も生み出さない、何も得られない、何も与えない、——ただの『偽物』。」



いつもの凜とした表情に戻って言い切る。

「これ以上、私たちの時間を奪わないでもらえるかしら。」

静寂の中で、由比ヶ浜先輩は口を開くことができる。

「無理に一緒にやるより、2回楽しんでもらえらるって思ったほうが良くない？ ほら、それぞれの学校の個性とか出るじゃん！」

「ね、いろはちゃん？」

「あ、はい。い、いいと思います…。」

「ど、どうかなー？ねー？」

「え、あ、うん……。それあるんじゃない？」

肯定する者を増やせば、

長かった会議は終わった。

本格的に準備が始まれば、誰もがせわしなく動いている。いや、玉縄さんだけは何か思うことがあったのか、息を前髪に吹きかける謎の行動でクールダウンの期間を設けている。

そして、いろはに俺たちは立たされる。

「なんで3人ともああいうこと言っちゃいますかねー。雰囲気最悪ですよ。結衣先輩いなかったらヤバかったですよ。」

「私はまちがったことは言ったつもりはないけれど。」

「正論かもしれないですけど、もっと空気を読むって言うか、いろいろあるじゃないですかー。」

「その男に空気を読むことを期待するなら無駄よ。部室でも文字列しか呼んでいないのだから。」

「残念だったな、俺クラスの読書家ともなると行間までちゃんと読んでいる。ていうか、今怒られてるのお前じゃないの？」

「一色さんは今、正論だと認めたじゃない。だったら怒られる謂れがないわ。」

「あー、それぞれそういうところ怒られてんだよ。話聞け、話。」

雪ノ下先輩と先輩の会話って聞いてて飽きないよな。

「ツツキーもなんかスゴかったね。」

「愉悦を覚えそうでした。たまには理屈っぽいことを並べて追い込むのもいいものですね。」

「性格わるっ!?!」

「会議だからお仕事だからって許されるとこありますし。」

コンコン

「あのー、私の話聞いてますかねー?」

放置されたいろはは拗ねてしまったようで、ホワイトボードを叩きつつ意識を向けさせる。

えっ、なにこの可愛いウサギさん。

俺の彼女である。

「ま、まあまあ丸く収まったんだしいいじゃんか。」

「はあ、まあ、良かったんですけどね。……いや、ちよつとスッキリしましたし。」

かなりスッキリしたのが5人全員の本音だろう。

「向こうのフォローは 私というはちゃんやるよ。」

「えー、私もですかー?」

「あなたは代表者なのだから当たり前でしょう。」

「は、はい! やらせていただきます!」

いろはは雪ノ下先輩に敵わない。

「さー、月村君も行きますしやう!! 先輩たちは さわちやんたちのお手伝いよろしくお願いします。」

「はいよー。」

こそつと耳打ちし合う。

「いろはが生き生きできててよかった。」

「伊月のおかげですかね。ていうか、伊月だけは言いすぎくらいがちょうどいいんですよ。」

会議中に時折り手を繋いでいたことは俺たちだけしか知らない。

## 第18話 彼女と過ごすクリスマスは

クリスマスイブ及びクリスマスをどうお過ごしでしょうか。

恋人や家族と過ごす時間、大乱闘スマツ○ユブラザーズに明け暮れる日々の1つ、お客の少ない定食屋でのバイト、宿題や試験勉強の追い込み、みんな思い思いの青春を謳歌していると思う。

俺たちは午前中からケーキやクッキーをひたすら焼いていた。お菓子作りのスキルレベルが高いいろはや雪ノ下先輩は、社畜レベルの高い俺と比企谷先輩をこき使ってくれる。桃缶をケーキではなくクッキーに入れようとした由比ヶ浜先輩に、今日のところは料理をさせないことに注意を払う。料理上手な小町さんも途中参加し、戸塚先輩や材木座先輩もサポートにまわってくれた。

クリスマス合同イベント自体は午後から始まる。

海浜総合高校によるバンド及びクラシックの出張コンサートの2つとはいえ、クリスマスソングによる盛り上がりは確かにあった。理想とされたカタチよりポリュームダウンされたとはいえ、一週間もない状況で2団体を呼ぶにはかなりの労力を要しただろう。バンドとクラシックのギャップをちゃんと楽しんでくれる人も多かった。

2部構成として、後半は総武側が仕切る。

集められた選択肢の中で、いろはは『賢者の贈り物』を選んだ。ナレーション主体で進む物語であるため、役者とセリフを分ける必要もない。俺も読んだことはなかったけれども『好き』になった。

舞台や衣装が手作り感に溢れた学芸会に過ぎないが、温もりは誰もが実感した。先輩を気にかけていた女の子も主演として場の雰囲気配りを魅了した。ラストのシーンでは園児が天使の格好をしてケーキを配り、1つ1つの蝋燭に炎を灯していく。そのサプライズに保護者及び川崎先輩は大興奮である。

全体として見れば綻びもあるけれど、一瞬を魅せることを大切にし

ただ。

やっぱり小学生と園児は最高だぜ!!

こうして俺たちも緊張の糸は解け、お茶会に移行した。

給仕として会場を動き回るけれども肩の荷は降りていた。

小学生たちに引つ張りだこされつつも、海浜側の席でお互いの活動を讃え合う。最後の会議から玉縄さんを中心としてテキパキと動いていた。別の道を進んだけれども、お互いにリスペクトできるパートナーシップを築けてシナジー効果は生まれていた。「それあるね。」つて玉縄さんが言い続けていたんだけど、実は草食系男子なんだな。好きな女子の前だからって張り切っていたんだろう。

ガチャ

ゆっくりと扉を開く音に意識を現実に戻す。

時計を見れば すでに22時となっている。

「調子はどう?」

見慣れた亜麻色の、背中まで届く髪を持つ美人の女性が小さな声で話しかけてくる。

「まだ熱はありますがけど、スヤスヤ眠ってますね。」

適度な湿度が保たれた、暖房の効いた部屋。

綺麗に整頓されているが物が多い。勉強机には勉強した形跡や裁縫をした形跡がそのまま残されている。小さな本棚には少女漫画、ファッション雑誌、レシピ本、ラノベ。その本棚の上にはウサギとヒツジのぬいぐるみが寄り添っている。

あの指輪は大切にしまっているのだろうか。

「安心したわ。良い子を見つけたみたいで。」

「ど、どうも。」

「いろはったら、昔からいろんな男の子に好かれるのを喜んでね。このまま大人になってしまふのはちよつと心配だったの。学校のこと、

何も話してくれなくなつたから。」

入学当初のいろはは、とにかく多くの男子から好かれるように行動していた。多くの女子から嫌われ、いつしか『偽物』の人間関係ばかりができていた。高嶺の花として扱われていたとはいえ、男子の目線や女子の嫉妬を受けるようになっていた。

「でもね、いつからかあなたのことを話すようになったの。頼りになる友達ができただーって、その男の子と一緒に生徒会やるんだーって。心からの笑顔を見せてくれるようになったの。だからありがとう、これからもいろはをよろしくね。」

そう言われても、救われてばかりなので実感が無い。加えて、彼女が本来歩む物語を振り回して壊したのだ。彼女は気にしていないけれど、俺が『異物』であるという事実は変わることはない。まして、生きる意味をくれただなんて思い上がったことはもう言わない。

間違つたことだらけの俺が正しくあろうとするのだから、誹謗中傷は本来言われるべきものなのだ。

転生の事実を伝えて、両親から反対されることは覚悟している。

彼女から一度離れて、時間をかけて態度と行動で誠意を示すという覚悟もある。

大切な女性を愛することをどうしても求めてしまうから、独善的でおぞましい感情をもう隠さない。

大切に想うことは傷つける覚悟をすることだつて知つたから、傷つけることからもう逃げない。

「またちゃんとご挨拶に来ます。一線までは越えてませんし、大人になるまで越えるつもりもありません。それだけは信じてください。」

「はい。あなたの誠意ちゃんと伝わりました。……あっ！もしかして結婚したいと思つてるのね嬉しいけど私をお義母さんと呼んでからにしてくださいねごめんなさい。」

早口と、感情の籠った笑顔。

彼女の照れ隠しは親譲りのようだ。

「ていうか、あなたなら、うちの娘もつと誑かしてもいいのよ。それに、今日って、うるさい……真面目なお父さんいないのよ。だ・か・ら……」

「決心揺らぎそうなのでやめてくださいごめんなさい。」

「あらあら、草食系男子なヒツジ君に任せて邪魔者は退散しますねー。」

ニヤニヤしながら嵐は去っていく。

「いつきや？」

手を弱々しく握ってくる。

存在を確かめるように。

「さつきまでおかあさん来てたぞ。」

「そうですね、お母さんが……あつ、お義母さん呼びつてことは……もしかして結婚したいと思ってるんですかね嬉しいんですけど……お父さんにも会ってからにしてくださいごめんなさい……はあーはあー」

「あんまり喋るなつて。」

早口ではなかったけれど 息切れしている。

ぬるめのスポーツドリンクを手渡す。

「いつも迷惑かけちゃってますね。」

「迷惑と思っていないし役得だし、いろんなもの貰ってるから。さつきのプレゼントとか。」

「わたしもです。二気になつたら読んでみますね。」

いろははたぶん疲労からきた風邪だ。

ここ数日、激務をこなしていたからだ。クリスマスパーティーの片付けくらいから、覇気がなくなっていた。平塚先生に頼んで車で送ってもらったが、付き添いをしていた俺を放してくれないからずつ

と看病している。

「はいはい、ベッドから出ようとしなさい。」

「ぶー、初めてのクリスマスだもん……。生徒会長命令で」

「職権濫用はダメです生徒会長。まあ、この1ヶ月の疲れが溜まってたんだらうな。」

「そう言っってピンピンしてる癖に。」

「経験の差だらうな。」

生徒会が本格的に始まって初めてのイベントは波乱なものだった。お互いにまだまだ纏まっていない状態で、かつ地域を巻き込んだからだ。総武側と海浜側とで言葉がすれ違い、子どもたちの対応に明け暮れ、手探り状態で進むしかなかった。比企谷先輩たちが第三者として整えてくれなければ危うい雰囲気は漂っていた。

華奢な身体には重すぎる責任を背負っていた。

「もう1年が終わるんですね。」

春には平成も終わる。

そしてもうすぐ俺が転生してから1年が経つ。

「ていうか、4月くらいの伊月って先輩くらい腐った目をしてましたね。」

「いろいろあったし、それに隣の席が口説き会場と化すし。」

「ほ、ほら、私って可愛いじゃないですかコホコホ」

「彼女が可愛いと彼氏として誇らしいから安心しな。」

そう言いつつ、咳き込む彼女の背中をさすってやる。

「その、ずっとここにいたら、うつっちゃいますよ?」

「そのときは責任取って看病してもらおう。」

「なんなんですかもう……。熱、上がっちゃいますよ。あざといです卑怯です大好きです。」

本当はずっと離れてほしくないし、俺もずっと離れたくない。

それでもいつかは自立しなければならぬ。



恥ずかしそうに上目遣いをしてくる。

「せなか ふいてもらっていいですか?」

お義母様に任せようとしたけれども、そのウルウルとした瞳に屈した。

白いタオルに ぬるい水を軽く含ませる。

桜色のパジャマを捲り、白くて綺麗な肌を拭いていく。

肩に力が入っているし彼女も緊張しているようだ。

「これもう伊月以外にはお嫁に行けません。針千本用意しておきますから、最期まで責任取ってくださいいな。」

「嫁ぎができたなら、な。」

「もう、カッコつけてもいいところなのに………まって、ます、ね  
理性を保つことに必死になっていたら終わっていて、整った寝息が  
聞こえている。」

「ゆっくりと大人になろうな。」

ちゃんと自立して、それでも寄り添いたいと思えるはずだ。

それまでは待っていてほしい。

大人になることを焦っては大切なことを見逃してしまう。

一度きりの青春はまだまだ続くのだから。

\*\*\*

恋人に何を贈りましたか。

アクセサリー、花、時計、服、楽器、お食事、などなど。

サイトや雑誌と睨めっこしながら決めたんでしょうね。

『賢者の贈り物』

それは、最高の夫婦のお話。

パートナーが一番欲しいものをプレゼントした『本物』の物語。

すれ違うこともあるけど、相手のことをちゃんと見ているから本当に欲しいものがわかる。

『Love Is: New Ways To Spot That Certain Feeling(愛は特定の感情を見つけ出す新しい方法)』っていうお伽話の、伊月なりの日本語訳をした手書きの冊子。

不安と覚悟の両方をちゃんと見せてくれた。  
だから、この本は絶対に返却しませんよ。

『本物』をくれるし、愛もくれる。

わたしも彼も、

来年もその先もクリスマスと一緒に過ごすことを願うだなんてホントあざといですよね。

冬休み、いっぱい楽しみましょうね。

\*\*\*

「Happy Christmas.」

そんな、粋な寝言を聞いて部屋から出た。  
彼女をお義母様に任せて、帰途につく。

すでに0時を過ぎ、クリスマス。

今年最後の満月と言われる月は太陽のように輝いている。

輝く星空の下で、手編みの月色のマフラーを早速首に巻く。

「ほんと幸せ者だよな。」

そう呟いた。

第19話 『一年の計は元旦にあり』って言われても  
やはり俺の青春は行き当たりばったりである。

年越しした瞬間、SNSで『あけおめ』を言い合うのは平成の文化である。リア充であるほど忙しい行事だ。忙しいということはリア充だ。

礼儀正しい文章のやり取りをして、キラツ☆とした文章にあっさりとした文章を返しておいた。比較的話すクラスメイトにもさらつと挨拶しておく。朝8時になって返信する先輩は今年も先輩らしい。

また、特に仲の良い者たちとはそのまま朝まで携帯で会話するケースも多い。

初詣で直接会うことも求める。

「みなさんあけましておめでどうございます!」

「「あけましてやっはろー!」」

「……あけましておめでどう。」

「おめでとさん。ところで君たち何その挨拶。雪ノ下が新年早々呆れてるんだが。」

やはり先輩のツツコミは冴え渡っている。

電車を使って辿り着いたのは浅間神社である。市内で一番大きいし、多くの人で賑わっている。総武高校に近いこともあって、総武高生も多いことだろう。

元々は先輩の妹である小町さんの誘いであって、俺やいろはは由比ヶ浜先輩経由で同行することになった。

「そう言えば、一色さんと小町さんって初対面なんじゃない?」

「そうですね。はじめまして、美少女生徒会長であって総武高のアイドル、1年の一色いろはです♪」

「新年早々 自分で美少女言うのかよ、この自称アイドル……」

「お兄ちゃんうるさい。はじめまして、比企谷小町です。いやー、お兄ちゃんのお知り合いにこんな綺麗な生徒会長さんがいたとは、小町

盲点でしたー。」

「なにこの娘可愛い……。私を姉だと思つてなんでも言つて。だからお姉ちゃんつて呼んで!」

「はい、お姉ちゃん♪」

「はう……。先輩、妹さんを私にください認められなくても貰つていきます。」

そう言つて手を繋いでルンルンと歩いていく様子は姉妹のように見える。そこにしつかり者である長女とちよつと抜けている次女が加われれば、美少女4姉妹の完成である。

ポケットに手を入れて彼女たちの後ろを追いかけていく俺たちが、ストーリーカーに見えないか心配である。

多くの出店があつて賑わつているだけで、境内まで来れば混雑具合は緩和される。ちゃんと列になつてサクサクとお参りするのは日本人らしさが表れている。

俺たちもその文化に漏れず並ぶ。

「みんなは何をお願いするの?」

「初詣つてそういうのじゃねえだろ。七夕じゃないんだから。」

「そうね。別にお願ひしてそれを叶えてもらうような即物的なものではないわね。誓うつていうニュアンスが近いかしら。」

「うわー、お兄ちゃんたちつまんなー。」

「私は、成績があがりますようにとかー、生徒会の仕事が楽になりますようにとかですかね。」

「十分樂してるだろ。月村こき使つてるだろ。」

「素敵な上司がいると働きがいがあるものなんですよ。」

「ほへえー、お姉ちゃんつてすごいなー。ていうかお兄さんなんか変わりましたね。」

「あの頃はいろいろあつたから。あと、比企谷先輩が泣きそうだからお兄さん呼びはやめようね。」

比企谷先輩に崇たられそうなくらい睨たまれている。

「ていうか、ホントの願ひは 人に言うとはわなくなつちやうつて言

いますよね。」

「え、そうなの!?　じゃ、じゃあゼツタイ言わない……」

「そうっすね、死なないためにも譲れません。」

「いや、必死すぎでしょ……」

お賽銭を入れた4姉妹が仲良く鈴を鳴らして、二礼二拍手。

そして、願う（誓う）。

俺たちも続いて、切実に願う。

（交通　安全、それだけです。）

《その願い、叶えてしんぜよう》

脳内にお爺さんの声が響く。

なにこのパワフルプロ野球的展開。

おみくじで一喜一憂した後は、屋台を回る。

いろはや小町さんはわたあめを仲良く食べている。

俺や雪ノ下先輩は射的の屋台の景品であるパンさんのぬいぐるみを見つめている。

「頭を撃ち抜くか、地道に押し出すしかないですかね。」

「そんなこと……私にはできないわ。」

人質を取られたパンさんが敵の攻撃を耐え続けるシーンは、子どもたちや雪ノ下先輩の涙をもたらした。傷だらけになりながらもヒロインを守ろうとする雄姿は俺の胸にも焼き付いている。

「ていうか、なんかちがくないですか?」

「違和感があるわね。目つきがいつもと違うわ。まさか私の知らないパンさんがいたなんて。」

「パチモンなのでは。」

「パチモンですって……?　そんなこと、許されるはずがないわ。」

「パンさんの名を騙って悪事を働く新たな刺客かもしれませぬ。」

「負けないでパンさん……。」

パチモンが出るくらい人気なパンさんは流石の一言である。

「ちよつとちよつとあんたらパンさん好きすぎでしょ。話飛躍してるから。」

「あら、助けを呼ばないといけないわ。」

「いや、俺は怪人でもオシマイダーでもないから。」

「入社したけれど、戦う女の子たちに発情するのでしょうか、かませ谷君。」

「俺はそもそも働きたくないし、初期メンバーも芸能事務所でがんばってるからね?」

「ていうか、意外に知ってるんだな。」

「たまたまよ。ルールーさんを見ているだけだわ。勘違いしないでくれる、ロリコン君。」

「えみる好きなのはお見通しかよ……ってなんだよその残念そうな顔。」

「それで、由比ヶ浜さんたちは?」

「三浦たちに会ってる。」

先輩が顎で指し示した方向を見る。

三浦先輩や海老名先輩、加えて戸部先輩とその友達が合流している。いろはや由比ヶ浜先輩、そして小町さんとガールズトークをしている。対して、彼らは紙コップの甘酒を片手に騒いでいた。大学で居酒屋にのめり込みそうな人たちである。

「葉山先輩はいないんですね。」

「葉山君の家は昔からそういう家よ。」

「……ほー。」

雪ノ下先輩は事情を知っているようだ。お正月を家族と過ごす場合も考えられるが、行事的なことをやってそうである。奉仕部の予定を聞いたときには雪ノ下先輩も用事があると言っていたし、強制力は

そこまでないものなのだろうか。

まあ、本人的にも優先順位を考えて先輩たちのところへ来ているの  
だろう。

雪ノ下先輩を一瞥したものの、三浦先輩はガールズトークに戻る。

腕時計代わりのスマホを見れば、ちょうど11時。

昼ご飯に行くかどうかという話題は次第に変わる。三浦先輩と雪  
ノ下先輩はあまり親しい関係ではないらしい。雪ノ下先輩や先輩は  
受験生である小町さんを伴って帰ろうとする。いろはや俺も、家族と  
過ごす時間を選ぶ。

しばしの別れを告げ、二手に分かれる。

通って来た道はいまだに賑わっている。乗る電車は違うけれど、駅  
までの道と一緒に歩いていく。神社に向かう人混みの中に何人か見  
知った顔もあるが、オフの日であるし親を連れているし、お互いに会  
話を交わすことはない。

駅の改札前まで来れば、そう簡単には会わないだろう。

「小町ったらお守りを買って忘れてしまいました！」

「そうですね、絵馬も書かないといけませんねー。」

「それじゃ先輩、俺たち行って来ますんで！」

まるで打ち合わせたような連携技である。

「じゃあ、お守りなら俺も……」

「お兄ちゃん、何言ってるの。バカ！ボケナス！八幡！」

「先輩、チャンスなんですよ!?!」

「ちよつと待て八幡は悪口じゃない。一色のそれって俺が刺されると  
いうチャンスなのか？」

言い寄られてタジタジになった先輩を置いて、2人は手を繋いで駆  
けだす。あざとく振り向いて、あざとく手を振っている。

「それじゃあ、よろしくですー！」

「小町が、毒されていく……」

「俺が付き添うんで、そこでクスクス笑っている雪ノ下先輩はお願いします。」

「いや、俺が小町を……」

「ほら、俺って雪ノ下先輩のお家知らないですし 案内できませんってー。」

「お前も毒されてるのかよ。」

方向音痴な雪ノ下先輩を任せて、2人を走って追いかける。

「いやー、ご協力感謝です。感謝感激ですー!」

「だんし……先輩の扱いなんてどうってことないよー!」

「やっぱいろいろはさんって憧れるなあー。」

「ありがとう。私も小町ちゃん好きだよ。」

紛れもない本心での会話だ。

会ったばかりの人に、いろはがここまで自分を出すのは珍しい。

「でも、お二人はいいんですかー?」

「まだ内緒にしてるの。私ももつと自慢するものだと思ったんだけどねー。伊月ってあざといんですよ。例えばー、……」

今まで家族にしか言わなかった惚気話が始まる。

ちゃんと話を聴く人懐っこい性格が本音を引き出しているのだから。

「ほへえー。私も月村さんみたいな彼氏できるかな。」

「小町ちゃんなら見つけられるよ♪ だって先輩を知ってるんだもんね。」

いろははそう言って、ヨシヨシと小町さんの頭を撫でる。

千葉のこの兄妹はお互いに幸せを願うけれども、時に自分を隠す。過ごした時間は長くて、例えば幼馴染の立場よりもずっとお互いを理解している。

「小町、ゼツタイ合格しますね。」



高校へ憧れているから。

兄が好きだから。

「うん、待ってるね。」

合格祈願のお守りを2人で買ってあげる。

俺というはは交通安全のお守りを交換し合う。

猪の絵馬は3つ重なり合っていた。

「ところで伊月も先輩も巫女さんちらちら見すぎです。」

「なぜバレたし。」

「来年晴れ着見せてあげますよ。巫女さんのバイトもいいですかね。」

「いろはには敵わないな。」

「そうですか♪ ではでは、お母さんたちと福袋買いにいけますよ。」

「荷物持ちは俺たちに任せな。」

今年もまた1年が始まる。

しかし俺にとっては新年は本来失われたものだ。

だから、

『神様。いろはやこの世界と出会えた奇跡をありがとうございます。』

## 第20話 求めるのは『加速』なのか『停滞』なのか

昼休みの教室は非常にぎわわわとしていた。

2週間の間会うことがなかっただけで積もる話はあるし、何気ない雑談も変わらざにある。いつもより会話の種が多いことから、盛り上がりも大きいのだろう。

冬休みをどう過ごしたかについて問われたとしても、庶民的な年始年末だったとしか言えない。大掃除、紅白、大晦日、正月といったイベントを静かに楽しんだ。家族や恋人と過ごす時間に加えて、宿題を消化しただけだ。冬休み中に変化したことと言えば、受験生である小町さんと勉強会をするようになったことくらいだろう。

生徒会活動も休止していて、奉仕部の鍵も開けられることはなかった。

3日が誕生日である雪ノ下先輩の誕生日会は本日7日に延期されたのだ。

「マラソンって1月末だよな？」

「そうだな。本来は2月なんだけど。」

知り合い以上友達未満、クラスメイトである3人組の話し相手となることが俺にはある。サッカー部に所属していて接点もそれなりに多い。親に作ってもらったお弁当を各自食べながら、月末に開催するマラソン大会について聞いてきてきた。

「去年は葉山先輩が今の3年 圧倒したらしいな。」

「なにか面白いことしないのか？」

「生徒会長が提案したパン食いマラソンとか仮装マラソンっていうのは、阻止しておいた。」

このグループを見ている女子たちの様子を俺は伺う。

運動面や成績面、容姿について、この3人組は十分モテる要素があるのだが、スポーツ以外には 勉強のことやF G O やシャ O バ といったゲームくらいしか興味をあまり示さない。学校生活を受動的に楽

しむタイプであることは確かだ。

「それは流石にな……」

「今年も普通のマラソン大会になりそうなんだな」

「まあな。」

相槌を打っておき、いろはの様子を続けて伺う。

「えー、キープなんかじゃないですよ。生徒会繋がりで。」

「月村君いつも出かけてんじゃん？」

「えっと、私や本牧先輩がいるときもありますけど……」

「でもそれって、ありよりのありじゃない？」

「マジ出って感じ。」

「でも本命は葉山先輩なんしょ？」

「あー、今は違いますよ。」

「マ？..」

冬休み明けから、こういつた浮ついた話が多くなつた気がする。特に葉山先輩を狙う女子が牽制し合う流れができていて、その流行に感化されて動く者も多いようだ。

「一色さんと、藤沢さんは大変だな。あと月村も。」

「……何が？」

もう少しこの3人くらい人気や魅力があつたなら、『キープ』なんて言われなかつたのだろうか。

\*\*\*

その流行は治まることはなく、放課後になればさらに盛り上がりを見せている。

男子で最も人気のあるイケメンと高嶺の花である美少女の恋愛に尾ひれをつけて広めているのだ。

今、最も噂されているのは、『葉山先輩と雪ノ下先輩が付き合っている』というものである。熱盛である。

それは有名税なのかもしれないが、  
本人たちからすればいい迷惑なのだろう。

「お誕生日おめでとう（ございます）!!」

「おめでとさん。」

「あ、ありがとう……。その、お茶があったほうがいいかしら。」

照れ隠しに、雪ノ下先輩は席を立てて紅茶を淹れてくれる。

「いろはちゃんが作ってくれたチーズケーキおいしい!」

「お前、マジで料理得意なんだな。」

「なんですか口説いてるんですか。甘いものだけに甘い言葉を囁けば  
いけるんじゃないかーとか考えが甘いので先輩は遠慮しておきます  
ごめんなさい。」

「いや口説いてないから……。」

「シヨートケーキは月村君が作ったのでしよう?」

「一色さんに教えてもらいながらですけど。」

「えっへん。」

「謙遜することはないわ。炭ではないのだから。」

「え、それってもしかして私のこと言ってる……?」

雪ノ下先輩への誕生日プレゼントとして、いろはと俺はケーキを  
作ってきた。俺たち自身が食べたいから、お互いに食べさせたいから  
といった目的もないことはない。比企谷先輩はブルーライトカッ  
ト仕様の眼鏡を、由比ヶ浜先輩はルームソックスを、それぞれ当日に  
渡したらしい。

ちやんと見ているから2人は最高のプレゼントを選べる。

新年初となる活動だ。

食べてばかりではなく、奉仕部が所持しているノートパソコンを雪  
ノ下先輩が取り出して仕事に入る。『千葉県横断お悩み相談メール』  
及びSNSアカウントへの投稿の確認だ。総武高生を対象とする  
ネット上の目安箱といったところだろう。後者のSNSについては

ひっそりとやっているとはいえ、総武高生の集団的な悩みの傾向を見ることに役立つ。

『文系と理系、どうやって決めてるの?』

こういった内容がいくつかあることに注目することにしたようだ。

先輩からプレゼントされた眼鏡をかけた雪ノ下先輩がパソコンを操作しながら、その内容を口に出した。その雪ノ下先輩の姿に対して先輩はキョドっていて、由比ヶ浜先輩はどこか羨ましそうである。

「あー、進路ってやつですか。」

「3年になってから文理に分かれるんですよ。やっぱり2年の皆さんは迷ってます?」

ケーキをモグモグと食べながら、最高の紅茶の香りを楽しみながら、俺やいろはは尋ねる。文理選択の時期が遅いとも思ってしまったが、それはかつての高校が2年からだったからかもしれない。

「まあ、クラスではそういう話題で持ちきりだったな。俺は文系で決まりだが。」

「ヒツキーってね、文系だけはスゴいんだよ!」

「文系だけって強調しないでくれない?」

「すごい。先輩って成績いいんですねー……わー、先輩って頭よさげ風なだけありますね♪」

興味なさげに反応していたことにハツとした。

よって、いろはは気を取り直してあざとくなる。

「いや、頭よさげ風ってなんだよ……はあ」

「それなりにはいい成績よね。といっても、国語でもトップは取れないのだけだ。」

得意げに微笑む雪ノ下先輩は、2年で文理とも葉山先輩とトップを争っている実力者である。ちなみに由比ヶ浜先輩は雪ノ下先輩のサポートがなければ進級が危うい。よって、飛び火しないように俺たち

の成績や進路について聞いてくる。

「ふ、2人はどうなの？」

可愛くちよこんと顔を傾ける。

続けて、

フォークを可愛く唇に当てて、目を逸らす。

「えっ、あー、月村君はやっぱり理系ですよね。」

「そんな生徒会長さんはテスト前に泣きついてきます。」

「ちよっと！言わないでくださいよー！ 月村君だって文系苦手なおかげでトップじゃないくせに。」

「一色はともかく、意外だな。」

「ともかくですとおー!?!」

「センター試験用の勉強じゃ解けないことも多くて。特に英語。」

「そうね。大学入学共通テストへの転換期ということもあって、定期テストでも変わった問題が多くなってきたわ。」

「ああ、確かにな。」

「慣れるまで時間がかかりますよね。」

「な、なんとかなるんじゃないんですかねー。」

「えっと、なにか変わったの……?」

プレテストを俺もやってみたが、出題方法が一味違うものとなっていた。その影響を受けて、進学校である総武高の定期テストも少しずつ変化している。理系科目すら俺もまだ慣れそうにもないし、どちらかというところと文系であるいろはも全科目の傾向の変化に苦戦している。由比ヶ浜先輩はあまり変化に気づいていないようなので、雪ノ下先輩主導なスパルタな受験勉強が待っているだろう。

「話を戻すわね。文理選択や進路の悩みということだけれど……、比企谷君はどう思う？」

雪ノ下先輩から視線を向けられた先輩は、少し考えを巡らせる。

「進路って悩む必要ないだろ。メリットやデメリット、得意不得意、あと好みとか考えて、『やりたくないこと』を排除して考えればおのずと

答えは出る。まあ、やりたいことあるならそれを目指せばいい。」

「……そう。」

「どうした?」

「あ、いえ、三浦さんでも悩むというのが少し意外だったの。」

「へえー、三浦先輩も質問してきたんですねー。」

「ええ。」

「そりや、優美子だって悩むことくらいあるよー。進路だもん。ほら、みんな、ばらばらになっちゃうじゃん? そういうの考えると、迷ったりしない…?」

「それは、まあ、確かにそうですね……」

「……クラス分けはともかく、大学選びに関わってきますからね。」

「だがいつかは終わりはくるぞ。まあ、文理分けてってそういうもんだけ。」

始まりがあれば、いつかどこかで終わりが来る。今この場所で会話している先輩たちと、そしていろはと卒業後会わなくなる可能性はゼロではない。彼女たちと過ごす時間を大切な光にしたとしても、有限であるという事実は常に影となって俺を蝕んでいる。

転生による傷はずっと刻み込まれたままだ。

「三浦先輩って葉山先輩の進路が知りたいんじゃないんですか。」

静寂と呼べる時間を進めたのは、優しい表情をしたいろはだった。

この場で俺だけが彼女の『不安』に気づけた。

「あー、なるほどー。教室でも気にしてたっばいし、そうかも。」

「直接聞いてもいいんじゃないかしら。」

「クラスでね、隼人君は自分で考えるべきだーって言って、教えてくれなかったの。」

親しい人に対しても、聞けないことやどうしても話せないことはある。未来、現在、過去、どこに地雷が埋まっているかはわからないし、もしわかっていれば話すことは憚られる。無理に聞いて、話してし

まあって、『自分の望まない結果』がもたらされたなら。そんな不安が言葉を詰まらせる。

だから、自分を傷つけてしまう。

そして、大切な人を傷つけてしまう。

何度も傷つけていく。

「この相談、どうしましょうか。」

「学校全体のことなら、生徒会にお任せです！」

「新設された進学研究室と連携して、2年生向けの進路相談会をちようど企画してまして。」

「あー、あの丸パクしたマニフェストの。」

「ちゃんと役立っているようなら私は構わないわ。」

先輩は仕返しとばかりに皮肉を言ったものの、発案者様は誇らしげである。

「そういうことで、奉仕部にはあまり参加できなくなります。」

「左に同じくです。」

「ええ。わかったわ。」

「いや、一色って部員じゃないだろ。なんでいつの間にか居座っているの。」

「ま、細かいことは気にしないでくださいよー。」

「じゃあさ、隼人君には私がまた明日聞いてみるよ。教えてくれるかわかんないけど……。」

声は尻すぼみになっていく。

葉山先輩は進路について話さないというスタンスを貫きそうである。

「……仕方ない。俺が聞くか。」

「え？ヒツキーが？」

「大丈夫なの？ 会話、できる？」



「先輩、まさか狙ってるんですか？」

「海老名先輩のご注文はハヤハチですか？」

「お前ら……。 はあー、親しい人間には教えないならその逆を試してみるしかないだろ。」

「なるほど。そういう方針でいい、かしら……。？」

「ん、ああ。 とりあえずは、な。」

雪ノ下先輩が比企谷先輩に確認を取れば、奉仕部のこれからの方針が決定される。

「じゃあ、今年もみんなでがんばろーっ！」

「おーっ！」

「おー……」

新年初となる奉仕部の活動はこうして終わった。

また1日が過ぎていった――

## 第21話 進路

特別棟の真横のポツンとあるベンチ。

そこからはテニスコートが一望でき、寒空の昼休み中における練習風景を見ることが出来る。多くの生徒が暖かい場所でお弁当を食べているので外にいる生徒はほとんどいない。加えて、この場所は日陰になることが多くてひんやりとしている。

そんな先輩の場所に俺たちはたまに遊びに来る。

「一色はどうした?」

パンを静かに食べていた先輩が、ふと口に出す。

その返事の代わりに、1通の封筒をポケットから出して手渡した。「ずいぶんと古典的ですよね。」

内容を簡潔に述べるなら、『一色いろはから手を引け』というところだろうか。文章を読み進めていった先輩の目が険しくなるのを見て、やはり優しい先輩なのだと再認識する。雪ノ下先輩が置かれている『状況』にも満足していない。

マッ缶の甘さと温もりが心地いい。

「大事を取っただけですよ。それに、いろはの方には『葉山先輩から手を引け』って書いてあったみたいですし。」

「……そういうことか。」

それだけ言って、先輩はマッ缶を飲み進める。いろはは多くの女子から嫉妬を受けている。

この『流行』において、一歩リードしているように見える彼女を牽制しているのだろう。彼女は俺を頼りにすることが多いから、孤立させるために俺に対しても釘をさしたに過ぎない。

かつての俺ならこんな悪戯でも惑わされてしまっていただろう。

「それで、何か動きはありました?」

「葉山には見事に断られた。あと、三浦が直接依頼しに来たな。」  
「へえー、三浦先輩が。」

葉山先輩に対して直接問いただして失敗したとはいえ、先輩のやる気は消えていなかった。

「なに嬉しそうにしてんだ。」

「先輩が先輩でよかったなって。これってポイント高いですかね。」  
「意味わからん。」

面と向かって話すことはなく、変わらない距離感。  
テニススコートの練習風景を見ながら静寂を楽しむ。

「……なあ、葉山の進路についてどう思う?」

「んー? まずサッカー選手にはならないんじゃないですかね。大学に行っても続けそうですけど、同好会に入りそうですね。」

体育専門の学部も存在し、プロのサッカー選手を目指して励む者もいる。対して、葉山先輩はサッカーというスポーツではなく、サッカー部という青春を楽しんでいるように見えるのだ。キャプテンの責任と部員の信頼をちゃんと受け取っている。絡みつくような幻想的な《期待》と違って、その重さは心地いいのだと思う。

「文系か理系までは授業態度を知らないものでわかりません。まあ、どっちも意欲的に取り組んでそうですね。」

たとえ理系大学志望だとしても、日本史や地理が好きだという者は確かにいた。

「理系の大学に来る人って、数学や科学が得意だとか好きな人がほとんどを占めるのは確かですね。まあ、就職か大学院進学かに関わらず、ずっと数学に関わるようなものなんですよ。微分や積分とか代数学とか、がつつりやりますし。」

「……ほーん。数学ね。」

俺の情報が、先輩の手札に加わったようで何よりだ。

数学嫌いな先輩にとっては分かりづらい視点だっただろう。

「八幡！ それに、月村君だよ。ここいいかな？」

「いいですよ、いつもここ先輩しかいませんし。」

「この後輩、毒されて凶太くなつたな……」

そう言いながらも、ちやつかりと俺の方に軽く寄ってきてスペースを空ける。あざとい。

「？ うん、ありがとう。」

先輩の小声に対して、ちよこんと首を傾げた男の娘に先輩の顔は緩む。

先輩のクラスメイトである戸塚先輩が合流してきた。総武高指定のジャージを着ていて、先ほどまでテニスの練習をしていたメンバーの1人のようだ。小さなお弁当箱を膝に丁寧に広げて食事を始める。

「……その、ちゃんと、部長やってたな。」

「見ててくれたんだ。まだまだ部長っていうほどまとめられてないけどね。」

照れつつ、苦笑いしつつ、謙遜しつつ、天使だ。

だが俺はあざとい小悪魔に惑わされたほうがいい。

「何を話していたの？」

「文理選択についてですよ。」

「そうなんだ。八幡はもう決まってるの？」

「俺は文系だ。」

即答だった。

「そっか……じゃあ、ぼくも文系にしようかな。」

「おお、そうか！」

「大学の学部とかも決めちゃってるんですか？」

戸塚先輩のことが好きすぎて嬉しくて感情的になっている先輩の代わりに尋ねてみる。

「えっと……、所沢のスポーツ科学か人間科学にしようかなって思ってるよ。」

「あー、あそこか。」

「うん。せっかくテニスやってきたし、関係することがいいかなって。2人はどうなの?」

「とりあえず千葉の文系のだな。」

「俺は〇〇大学の理工学系ですね。」

「月村君ってもう決めてるんだ。」

「……まあ、そうですね。テストありの推薦も狙ってます。違う未来が待っているとはいえ、そこへ行きたい。」

「葉山は、……どうなんだろうな、推薦。」

「うーん、部長会の会長もやっているし、面接も得意そうだよな。」

文武両道であって、文理の成績が良い。

人当たりもいいし、スポーツもできる。

仕事もできそうだし、体力もある。

「葉山、すげえな。」

「うん。なんでもできるし、優しいよね。」

だから、《期待》されるのだ。

そして、自分を傷つけている。

「でも、あの噂すごいよね。」

「有名税とはいえ、大変でしょうね。」

「葉山君が好きなのって三浦さんのことかと思ってた。イニシャルがYだし。」

「え、まじかよ……そこまでは明かしたことあるんですね。」

思わず、素が出てしまった。

イニシャルがYである人は俺でも多く思い浮かぶ。

三浦先輩、由比ヶ浜先輩や雪ノ下先輩、あと陽乃さん。

……それと材木座先輩。

いろいろのイニシャルではないことに安心を覚えたことは確かだ。

チャイムが鳴って、戸塚先輩は一度部員たちに声をかけに行った。

「では先輩、お先に失礼します。お邪魔しました。」

「またな。」

「はい。今日も部活行けませんけど、何かあつたら呼んでください  
ね。」

「……ああ。お前もがんばれよ。」

生徒会のこととか。

いろいろのこととか、俺自身のこととか。

なんだかんだ面倒見のいい先輩って教師向きだと思う。

スキルポイントは溜まっていないとはいえ、専業主夫も案外似合っ  
ている。

筋肉痛を少し感じる足を俺も前に出した。

## 第22話 ガールズトーク

放課後の校庭は とーりーりーっても寒い。

ウインドジャケットかコートに、ネックウオーマーに、手袋やタイツ。

どの女子も防寒しつつ、オシャレを欠かさない。

ていうか、学校指定のジャージは通気性が良すぎ。

冬の体育は、とてもイヤな時間だ。

今度の委員会を使って……

じゃなくて、会議で提案しようかなーと思いつつ、目的の人に近づく。

「あれー？ 三浦先輩 こんなところでどうしたんですか？」

オレンジのモッズコートが似合う系な三浦先輩に声をかける。

騒ぎの中心などに女王はどっしりと構えていたし、理由も知って聞いているだけだね。暖房の効いた生徒会室からも、寒空の校庭の様子は見えていた。葉山先輩や狙い目な部員の『応援(仮)』に來ている女子が本当にうじゃうじゃしてる。

「……あんたこそ、何してんの？」

三浦先輩が見せている呆れた顔は、知っているのに聞くな、って感じですかね。

「私って、サッカー部のマネージャーなんですよ。」

今日は働くつもりないけどね。

「それ、答えになってないっつもの。」

「えー、そうですかー？ よいしょっと」

誤魔化しつつ、隣に座る。

ますます呆れた顔になってくれてペースはこっちのものだ。

「おや、一色さんも来たんだ。」

ベージュのボアコートはミステリアスさを引き立てている。

ちっ、策士タイプの人か。

トイレかなにかで席を外していただけで、三浦先輩の付き添いをしているのだろう。

「はい、お邪魔してます。海老名先輩。」

世間話で、

ありのままに話す三浦先輩を挟んで、

互いに牽制する。

海老名先輩は、葉山先輩と同じくグループがバラバラになることを恐れている。先輩たちがの修学旅行でもそういうことあったみたいだし。

2人も、そして伊月も過去に囚われている。

確かな繋がりを作ることを求めているのに、変わらない関係を求めてしまうから、関係を変えることを選べない。

「隼人、なんか無理してる……」

三浦先輩って、ずっと目で追ってますもんね。

「こんなにギャラリーが多いとね……」

「そうなんですよー、サッカー部としてもいい迷惑なんですよね。」

3年が明日明後日のセンター試験に向けてがんばってるのに、浮かれすぎ。

葉山先輩の人気ぶりは周知のことで、キャプテンとしての人望もあるし、部長たちの不満はギャラリーに向かっている。葉山先輩のせいにはないってところがいい人たちだよ。だから葉山先輩以外にもアタックかけに来ているようなんだけど。

特に、温かい校舎で待機しているやつらとか許せない。

「それって一色さんが言えることなのかな。」



海老名先輩の苦笑いには、微笑みを返しておく。

確かに葉山先輩のために入部したり、葉山先輩のためにマネージャーの仕事がんばったりしてたけど、それはもう昔のこと。

「ほらほら、戸部先輩とか超張り切っちゃってますよ！　いつもの3倍くらい実力発揮してますよ。」

「とべっちはいいや。」

「ま、そうなんですけどね。」

ぶつちやけ私たちに応援されてるとか勘違いしちやつてる人なんてどうでもいい。

だけど、海老名先輩はたまに視界に入れている。

大事なときにしかちゃんと空気読まないけど、黙ってサッカーやつてたら案外カッコいいし。

「それよりもあの1年生の3人、なかなかだね。」

「クラスではいつも一緒にいますね。」

「三角関係か……腐腐」

いきなりキヤラ変わりすぎなんじゃないかな。

ボツチ状態でいきなりニヤリとする先輩とか、罵倒を愉しむ雪ノ下先輩とかに通ずるものがある。

もっというろい隠してるだろうし、

はたして戸部先輩は彼女の素に出会えるのだろうか。

「海老名、鼻血拭けし。　そう言えば、月村は？」

「まるでいつも彼と一緒にいたいな言い方ですねー。」

「へえー、いつも一緒にいんの？　あれ、それって……」

ありのままに言葉を受け取られるとは思わなかった。

まあ、この2人なら言いふらさないだろうし、囁し立てないだろう。

「はい♪　付き合ってますよ。」

「マジ？」

「それはまた……」

あまり話すことはないけど、海老名先輩にもバレてなかったのか。恋愛とかあんまり考えたくないのかもしれないけど。

「伊月なら、マラソン大会の試走です。」

「ああ、あの来週の。」

1月末に予定されているマラソン大会のコース確認に、走りに行っている。

先輩と一緒にいることを知ったら海老名先輩が興奮しそうなので黙っておく。

「あんた、隼人のこと、その、……好き、だったんじゃない？」

顔を赤くして尋ねてくるあたり、あまり恋愛慣れしてなさそう。

「そのためにいろいろやりましたし、前は好きでしたよ。」

寒さや暗さから校舎に次第に避難しているギャラリ―と同じで、ずっと一方通行だったけど。

「……葉山先輩って、いつもはもつと生き生きしてるんですよね。肩の力が抜けてるっていうか、純粹に青春を楽しんでるっていうか。」

「隼人、ずっと悩んでたんだ、今だけじゃなく。」

グラウンドの葉山先輩を目で追いかけるのをやめて、俯く。

「あーし、隼人とは入学してからずっと一緒だって、ずっと近くにいたって思ってたんだけど……、隼人にちゃんと向き合ってたなかった、わかってるって勘違いしちゃってた。」

私も三浦先輩も想いは一方通行。

葉山先輩を傷つけてきて、これからも傷つける。

いつもの威厳たっぷりなのに、今はしおらしい。

これなら葉山先輩でもドキツときそう。

「三浦先輩って、まっすぐですよね。」

「……どういう意味だし。」

「ありのままをちゃんと見せてる、ってことですかね。誇っていいこ

とですよ。」

いろんな私を好きになってくれるけど、  
わたしはちゃんと『本物』を見せるのが簡単じゃない。

「わたし、『本物』が見つかったんですよ。」

「『本物』って……何言ってるの？」

「わたしにとっては、ちゃんと自分を出せる関係ですかね。でも、自分なりに解釈するべきだと思います。お二人が本当に欲しいものを考えてみてください。他の誰でもない自分だけの『本物』を……。」

「本当に欲しいもの……。」

「まっ、誰かさんの受け売りなんですけどねー。」

先輩がいなかったら、ずっと手探りで、間違い続けていたんだろう。

「ていうか、葉山先輩も中途半端でめんどくさいですよ。ガツンと言ってやったらいいんですよ、ちゃんとしろーって。」

「でも、葉山君はそれでも選ばないんじゃない？」

葉山先輩を中心としたグループは壊れることを恐れて、変わることを誰もを選ばない。このまま、『なあなあ』を続けて傷つけ合うのだろう。

でも、三浦先輩なら、傷ついても 自分のしたいことすべきことができると思う。

「そこは根比べですかねー。少しずつゆっくり近くなっていくのが葉山先輩の攻略法ですよ♪ 三浦先輩らしく引っ張っていつてあげるべきかと。」

「あーし、らしく……。」

それは海老名先輩の攻略法でもあるんだけどね。

ソースはいつのまにか攻略されていた私。

「ほらほら、練習終わったみたいですし、行きますよ♪」

元ライバルとしては応援したいものなんですよ

「ちよっ、自分で行くしー！」

三浦先輩の手を引いて、葉山先輩に誰よりも先に近づいていく。

ああ、ついでに言うなら、

戸部先輩がすれ違っていきました。

## 第23話 自由の刑

一月往ぬるだとか二月逃げるだとか言うし、新学期が始まってからあつという間に日々は過ぎていった。2年生対象の進路相談会の開催に向けて、せわしなく準備していたこともある。

ちなみに2年生は進路希望調査票を1月中旬に提出しなければならぬ。つまり、三浦先輩の依頼のタイムリミットまですでに10日ほどだ。葉山先輩はすでに提出していて、文理のどちらを選んだかを明言していない。理由としては彼の『選択』が広く影響を及ぼすことにある。今日の進路相談会で現れることはないだろう。

「ねえ、一緒に文系にしない?」

「うん、いいよ!」

すれ違ったカップルの、そんな会話が耳に入ってきた。

同じ進路に進みたい、少しでも青春を共有したい。

そんな想いがあるのだろう。

自分や相手に嘘をついてでも、相手の傷つかない、変わらない関係を選ぶ。それが『本物』と呼べるものならいいのだが。

「今日もサッカー部の応援行く?」

「でも今日って、進路相談会だし葉山先輩いないんじゃない?」

「まじかー、それなら行かなくていいじゃん?」

「えー、でも相田君とか岡田君とかいるんじゃない?」

「理系は大学で単位取るのがきついつしよ」

「そーそー。文系なら大学も余裕だし、超遊べるぜ? 先の事ちゃんと考えないと。」

「だよなー。俺も大学入ったら彼女欲しいし。」

「いや、お前じゃ無理だろ。いいところへの合格も彼女もやっぱ葉山みたいのじゃねえと。」

「葉山かー。あの噂本当なら、マジうらやましいよな。」

『馴れ合い』が蔓延<sup>はびこる</sup>る。

葉山先輩と雪ノ下先輩の根も葉もない噂によって、どこか浮ついた雰囲気が続いている。年相応に青春ラブコメを謳歌しているとも言える。だがまちがっていないと断定することだけはしたくなかった。

「お待ちせしました。」

「うん、ありがとう。こっちはだいぶ進んでるよ。」

会議室の扉を開いて、本牧先輩に話しかける。

2年生用の資料を200枚ほど運んできたのだが、果たしてこんな必要だったかはわからない。1月後半、時期的に言えば文理選択についての相談が多いはずだ。しかし理由はともあれすでに決めている者も多い。ついでに軽く様子見してきたが、半数も来ないかもしれない。大学選びについての進路相談もまた来年度考慮する必要がある。

自主参加である以上、仕方のないことだ。

しかし個人的には、時期的にも、進学校であるし、多く来てほしい。

「秦野、相模、お疲れ様。ありがとう。」

手持ち無沙汰となっているクラスメイトの2人に話しかける。

「いいってことよ。」

「でもそろそろ時間だから失礼するぞ?」

「ああ。また時間空いたときに行くから。」

平塚先生経由で来てくれた先輩たちの他に、彼らが会場設営を手伝ってくれた。衝立や机を会議室に設置するのには男手が必要であったのだ。

彼らは遊戯部に所属していて、たまに大富豪や大乱闘ス○ツシユブ

ラザーズをしに行くことがある。なろう小説や二次創作について語り合うことも多い。生徒の自主性を重んじる学校だからこそ、存在している部活な気がする。教室の私的利用が激しすぎることはそれとなく注意している。

「えっと、その、一色さんって意外とマジメなんだな。人使い荒いけど。」

「指示出し上手いよな。噂はアテにならないだろ？」

嫉妬によって作られた根も葉もない噂。

それが彼女の行動がもたらした結果であるとはいえ、状況を改善したいと思うのは彼氏として当然のことだ。印象や信頼を劇的に向上させることは容易いことではないし、少しずつちゃんと見せていくしかない。

きつかけは何でもよくて、ありふれたものでいい。

「まあ、確かにそうかも。いや、でも人使いは荒いぞ。」

「……そうか？」

「上級者だ……。」

「すげえよ、あんた。」

ちゃんと考えたのだが。

まず無理難題を押しつけられるわけでもない。俺たちのやれる範囲で頼んでくれるし、筋も通っている。楽をしたいという考えも彼女にはあるが、華奢な身体に責任を背負ったまま気負うよりはるかにマシである。

結論を言えば、ドーンと構えてちゃんと見ていてくれるから、ベストを尽くそうと思えるのだ。

「あー、それじゃ、俺たち行くから。」

「あと がんばれよー。」

「ありがとう。」

さて、

会場を見渡しても、いろはや藤沢さんはいない。

OBの現大学生たちのところへ行っているのだろう。

先輩たちにも挨拶した後に、本牧先輩と最終確認を行っていく。クリスマスイベントのときよりはるかにスムーズに進んでいっている。第三者として生徒会の『変化』を知っている先輩の頬が緩んでいた。

「お、比企谷くんは、後輩くんじゃーん。ひゃっはろー！ 来ちゃったよ♪」

「こんにちはー！」

「……ども。」

「こんにちはです。」

いろはたちと一緒に会議室に入ってきたのは、進路科の先生や10人の大学生と城廻先輩だ。雪ノ下陽乃さんは、俺や先輩を見るやいなや、楽しげで蠱惑的な笑顔を向けてきた。他のOBたちの視線が俺たちへ向けられる。

いろはもムツとしている。

「雪乃ちゃんも来てたんだ。それに、ガハマちゃんも。」

「お久しぶりですー！」

「……姉さん。」

あまり姉妹仲は良くないことが伺える。

一方通行な好意を向けられているように見えるが、思惑的な視線が交錯している。

「それじゃあ、そろそろ時間なんでー、みなさんブースでの待機よろしくですー！」

チューターの皆さんをそれぞれブースに誘導すれば、開催時間となって、待ちかねていた2年生が入ってきた。

「っべー、誰に相談すればいいんだろ。」

「文系と理系の人、両方に聞くべきだろうな。」

「かしこまー！」

プリントに目を通しつつ、多くの者が誰に相談するかを迷っている



ようだったが、葉山先輩のおかげで少しずつ動き始めた。戸部先輩たちの付き添いとして葉山先輩は来ており、三浦先輩が雪ノ下さんを牽制するような目を向けている。

恋は盲目と言うけれど、文理選択や進路を誰かに委ねることを彼女にはしてほしくない。

「じゃ、俺たちも戻るわ。」

「はい、ありがとうございます！」

「また明日です。」

いろはに合わせて先輩たちにお辞儀する。

どうやら文理選択についての話題が多くなっているため、部室に行くようだ。

先輩たち自身はすでに決まっているし、葉山先輩も明かすことはないと判断したからだろうか。他にも、雪ノ下さんから距離を置こうとしたのかもしれない。

いや、雪ノ下先輩と葉山先輩をチラチラと見ている『雰囲気』が原因なのだろう。

「うまくいきそうですね。」

少し離れて、いろはと小さな声で話す。

すでに各ブースで盛り上がっているため、水を差すこともない。

やはり元生徒会長であってよく知られている城廻先輩のもとへ、多くの女子が集まっている。彼女は指定校推薦ですでに受かっている。センター試験が数日前に終わったことで参加してくれた。指定校推薦とは大学から高校側に推薦の枠が与えられて受験することだ。

対して、雪ノ下さんは多くの男子及び女子をすでに従えている。

「人数も結構来てるな。葉山先輩や城廻先輩のおかげなところあるけど。」

葉山先輩は行くべきだと直接言ってくれたのだろうし、城廻先輩に相談したいという人も多いだろう。もちろん、各大学生のブースにも

人だかりができていて、順番など気にせず自由に話している。

「まあ、確かに。でも初めてですし。」

「大学選びもまだ本気ではない、か。また5月か6月とかに開催すべきだな。」

雰囲気としては文理選択についての話題が多い。

他には大学生活の質問もしているようだ。

「ですかねー。やっぱり高校受験と大学受験って全然違いますね。」

「センター試験と二次試験の2回あるし。そういや、俺たちって共通テストなんだよなあ。」

「ほ、ほら、最初ですし、優しめなんじゃないんですかー？」

「そうなるよ、平均点とか偏差値が上がるだけだよな。」

ちなみにセンター試験における、リスニングの『野菜(?)』や物理の『太郎と花子(仮)』はホットな話題である。真面目な話をするなら、物理は図を提示されて、深く思考する必要性が高くなっていったし、大学入学共通テストに向けて変化をしている最中なのだろう。プレテストを受けていたとしてもいまだに慣れない。せめて1年分でも過去問という分析材料が欲しい。

少しだけ静寂があった。

聞くかどうか迷いがあったのだろう。

「月村君は、進路のこと考えてる？」

すでにあつた答えを伝える。

「〇〇大学の理工学系。教師か研究職かってとこ。」

「それは、やっぱり……?」

ある意味、『傷口』を開きに行くようなものだ。

前世で3年も通っていた場所とは、異なる場所なのは確かだ。

「ご想像通り。……一色さんは？」

「将来は まだ。でも大学には通っておきたいかなって考えるようになります。」

「そうか。」

その『変化』の原因は俺にあるのだろう。

「でも同じところってというのは無理みたいですね。その、物理はちよつと……。」

「数学も必須だからな。大学の物理って数学寄りだし。」

目線を逸らして、葛藤している。

「へ、へえー……。」

それほどまでに俺の選択が彼女を悩ませているのだろう。しかし彼女が文理選択をするまでちょうど1年であって、猶予はある。

「まあ、いろんな人の考えを知って、ゆっくり選んでいけばいいんじゃないか。そのためにこういう場があるんだし、進路科の先生もいつでも相談に乗ってくれるだろうし。」

自由に進路を選べるというのは一見、すごく楽なように思えて、これが意外としんどい。文理選択は分岐点、大学選びは多方向、職業に至っては未知数。人生の指針がないなら、自分が進むべき道を、自分で決定していかねければならない。

親や家に一方的に決められることも苦しいし、

自分で選択していかねければならないことも苦しい。

だから、相談するべきなのだ。

「そうですね。やっぱり、大学には行っておきたいです。」

微笑みながら同じことを教えてくれる。

「そうか。」

俺も笑みを零して同じ返事をする。

俺も大学生活で随分と成長した。

彼女がその『景色』を見てみたいというのなら応援するし、力を貸す。

## 第24話 未来への不安

18時前。

すっかり日は暮れていて、月は暖かく輝いている。しかし先日のスーパームーンほどの明るさではなく、次第に欠けて行くのだろう。

暖房の効いた生徒会室の窓からチラリと外を見る。夜の寒空の下、どの部活もすでに切り上げているようだ。

あつという間に終わったと感じられるほど進路相談会は盛り上がりを見せた。ホクホク顔で帰る人もいれば、悩んだままだったり悩み始めたりした人もいた。答えを得ていることと悩みを抱えていることに優劣などない。高校生らしく悩めるなら青春は間違っていることはない。

そう簡単に人の価値観や考え方は変わらないのだが、しかし何気ない経験や言葉が時に人を大きく成長させる。

ともかく、奉仕部としても生徒会としても、有意義なイベントを行えたのではないか。

「ほんと、すごくいい先輩たちに来てもらえて助かりました！」

会場の片付けも葉山先輩たちやOBの方々が手伝ってくれたのでスムーズに終わった。そんな彼らもすでに解散している。今生徒会室に残っているのは俺といろはと、城廻先輩や雪ノ下さんだ。

「そう？別に大したことしてないよー？」

「いえ、はるさん先輩なんか超カッコいいです！憧れちゃいます！」

わたしも、はるさん先輩みたいになりたいなーって……」

「ありがとー！」

気に入られて抱きしめられているように見えるが、小悪魔は魔王に掌握されているだけだ。加えて、彼女との戦力差にいろはは、口元を軽くヒクヒクさせている。母性の象徴とか美貌とか、大人らしさと

か。

微笑ましく見ている城廻先輩は2人の『裏』に気づいていないようだ。

「それでー、なにか面白いことない？ 雪乃ちゃんに関することとか。」

大きめの机に溜め込んだお菓子を広げてお茶会をしている。

雪ノ下さんが、久しぶりに会った城廻先輩と話したいだけなのだろうが。

「普段と変わらずですかね。」

「それ、何かあるって言ってるようなものだよ。」

かつて先輩が言ったように、あえて言ってみただけだ。

どうせ先ほどの『雰囲気』によって、感づいている。

「教えて？」

その一言と、そして目で問いただしてくる。

先輩がガクブルしそうなドロドロな笑顔である。

「強いて言うなら、雪ノ下先輩と葉山先輩が付き合っているんじゃないかっていう、噂のことですかね。」

事実を述べた。

あくまで噂にすぎないが、噂の大本であることは確かだ。

「そう。」

手のひらに顎を寄せたまま、冷めた相槌をした。

才色兼備である彼女には多くの挑戦者が集まってきたのだろう。

それは葉山先輩や雪ノ下先輩も例外ではない。上辺だけを見て近づいてくることに、もはや慣れすぎてしまっている。

いろはは戸惑って、俺や雪ノ下さんを交互に見る。

「なんだか素敵だよーね。」

この場において、城廻先輩は純粹な笑顔と感想を見せる。

雪ノ下さんが本心から気に入っている数少ない人なのだろう。

自分がないものを持っていて、裏を見せても遠ざかることがないか

らだと思う。

「あくまで噂みたいですけどね。」

「へえ、そうなんだー。」

センター試験に向けて忙しかっただろうし、城廻先輩はあまり噂について深く知らないようだ。

「じゃあさ、比企谷くんはあれからどう？」

話題を変えて再び尋ねてくる。

「進んではいますけど、止まっていますね。」

「へえー、よく見てるね。感心感心。」

その一見矛盾とも思える答え方が、合うのだ。

近しくなることを躊躇い、もう遠ざかることもできないということ。

「それは後で本人たちに聞いてみるとして、後輩くんはもう進路決めてるの？」

興味のあることにはどんどん取り組むタイプなのだろう。

質問を重ねてきた。

いろはにまるで興味を示していないことに、ムツとしそうになるのを堪える。

「理系です。〇〇大学かなって。」

「へえー。そこ 私が通つてるところだよ。」

「え、まじかよ。……まあ、2年後なんで、雪ノ下さん卒業してるかもですけど。」

その事実と、彼女が単純に関心を示したことに、

思わず素の声が出てしまう。

「そうかもね。なんだか後輩くんってよく似ているね、学部の人に。」  
低い声で呟くように告げる。

真実に行き着くことはないけれども、俺の『違和感』にますます興味を示される。

本心を時々見せているのに、まるで掌の上で弄ばれているように、行き着く先が見えない。

そして、彼女は席を立つ。

俺も同じく夜空の暗闇を見る。

生半可な覚悟ではこの人は変わらないのだろう。

彼女の『素敵な何か』は俺には見ることはできない。

「自分自身で決めているなら、いいことだよ。」

面と向かって、言ってくれなかった言葉。

だから、考えてしまった。

俺は『過去』に即したいだけなのではないか、と。

なぜなら知らない世界というのはひどく怖いことだから。

「えっと、あのー、好きな人と同じ大学に行くとかどう思いますかー？」

雰囲気を変えようと思ったのか。

はたまた単純に悩みを聞いてほしかったのか。

「へえ、一色さんってそういう人がいるんだー。」

「いいと思うよー、本人たち次第じゃん。」

いろはの質問に対して返ってきたのは、当たり障りのない答えだった。

「ですよねー！」

だから、仮面を必死に保ったまま、心の中で歯噛みしている。

かける言葉が見つからない。

いや、俺は躊躇しているのだ。

いろはの自立のためにはならないだとか。

俺は中途半端な覚悟しかできていないとか。

「おっと、比企谷くん、みーっけ！」

生徒会室の窓からは中庭が見える。奉仕部の今日の活動が終わってから帰ろうとしている先輩を見つけたのだろう。

外にいる先輩に向かって、彼女の存在を示すように声をかけている。

「それじゃ、めぐり行こうか。」

「はい。じゃあ、またね。生徒会がんばってね！」

「また何かあれば頼りにさせてもらいますね♪」

「先輩くんも会長さんもまったねー！」

「お気をつけて。」

彼女は窓を開けたまま去っていく。

そこから吹く夜風が、暖房の効いた生徒会室を冷ましていた。

「先輩たちって、3人とも来年は受験一筋って感じになっちゃいますよね。」

寂しげにそうつぶやく。

「由比ヶ浜先輩にとって、スパルタな1年になるだろうな。理系科目については先輩もだけど。」

「でしょうね。今のうちに英語がんばらないとですねー。」

「あと1年もすれば、意識しなきゃいけないのか……。」

「数学とか化学、また教えてくださいね。」

「はいよ。」

いつもより遠慮がちに会話を続ける。

近づくことができないし、いつもより楽しくない。

「奉仕部、いつまで続けるんだろうなー。」

夢いつぶやきだった。

いつか彼らとの関係にも、終わりがくるのだろう。



凍てついた風は、熱を少し冷ましていた。

## 第25話 その独白は、ほんの少しだけ異なる。

結局、『シンジツ』を都合よく求めていただけなのかもしれない。空虚な青春を送ることがとても怖かった。

愛想を尽かされることが、今は怖い。

本当に自分は相応しいのかと悩む。

好きって自覚してから、どんどん知らなかったところを好きになる。

だから、となりを歩く自信がなくなっていく。

愛想を尽かされる原因をネットで調べる。

そうして、自覚してまちがう。

ぬいぐるみを抱えたまま、

フカフカのベッドにドサツと沈み込む。

息抜きに、スマホで読書を始めた。

自由に書き進められた、なろう小説や二次創作。

オススメし合うこともあるし、作品について会話することもよくある。

転生した高校生の青春ラブコメ。

やっぱり幸せだけ描いた物語が好きだ。

今夜もまた、1つの作品を読み終わる。

今までいろんな物語を読んできた。

あまり文学作品は好きじゃない。

『人間失格』なんて、タイトルだけで読むのを避けた。

『走れメロス』は、大団円で終わってよかったって思っただけだ。

時にはシリアスになってもいい。

でもやっぱり、純愛ものやハッピーエンドがいい。

つらい境遇の登場人物が幸せになってくれることは一番嬉しい。

この前行った『FaOe』の映画はずっと手を繋いで見ていた。

王道的なお話が好き。

ご都合主義的なストーリーが好きだ。

都合よく奇跡が起きてもいいと思う。

褒めてもらえて嬉しかった。

いいところを見てもらえるように頑張ってきた。

うわべだけで近づいてこられることが辛いことに気づいた。

理想を求めて、現実を知った。

だから、ますます理想を知ろうとした。

幸せだけ描いた物語を読み漁った。

運命の人に寄り添ってほしい、そう思うようになった。

『本物』が欲しくなった。

ようやく会えた運命の人。

ハッピーエンドをくれるって期待してしまう。

期待して待ってしまっていて、立ち止まっている。

もっと自分が変わらないといけないのに。

部屋の電気を消す。

月や星は優しく照らしてくれていた。

枕に顔をうずめる。

胸が『イタむ』。

未来がわからないことが怖い。

本当に、となりにいいのかわからない。

——ずっと臆病者

いろいろなことをしてきたけど、そういう内面的な努力はしてこなかった気がする。

出会えたことは奇跡。

だからなんとかなるから。

ちゃんと進もう。

大丈夫、そう自分に言い聞かせる。

明日の朝に会えることを嬉しく思えばいい。

ほら、リズムのいい、心臓の鼓動が心地いい。

傷つけられることも傷つけることもしてきた。

傷つく覚悟はできた。

## 第26話 彼らのステージへ

1月29日昼。

天候は快晴。

8℃だけれど、凍てつく寒さではない。

スタート地点の公園には1、2年生全員が集まっている。

スポーツ系の進路の3年生もちらほらいるが、数は少ない。

着ているのは学校指定か部活のジャージである。通気性イイナー

前大会優勝者である葉山先輩の周りには多くの女子が密集している。笑みを浮かべてその『期待』を受けていた。少し距離の離れたところに三浦先輩や海老名先輩、雪ノ下先輩や由比ヶ浜先輩がいる。

「先生方が各ポイントに着いたそうです。」

藤沢さんから報告を受ける。

「了解。」

生徒会主催であるし、俺たちは走るだけではない。

地域の人に開催することをお知らせしたし、コース確認も何度もし、司会進行もする。保護者の方を中心に、ボランティアに来てもらえるように声をかけた。

「いろは、準備できたみたい。」

「はい。では、行ってきますね！」

マイクを持ったいろはがスタート地点付近に行く。

俺も先頭集団にするりと潜り込む。

あまり本気で取り組むメンバーは多くはない。

「ではではー、そろそろ始めちゃいたいと思いますー！先に男子の皆さんがスタートしてー、30分後に女子がスタートですよ♪」

黄色い声援が聞こえてくる。

後方の男子も少し先頭集団へ寄ってきた。

「自転車とか車とかに気をつけて、転ばないように気をつけてください

いね！　じゃあ、平塚先生お願いしまーす。」

葉山先輩やサッカー部3人組は一番前。

先輩や、材木座先輩や戸塚先輩たちも先頭集団にいる。

「いつきー、がんばってねー!!」

女子たちの集団の最前列から応援してくれる。

生徒会長の特権だな。

ぎよつとした人たちの視線が、俺やいろはに集まる。

俺は気持ち悪いくらいニヤニヤしてそうだ。

うちの母親が気持ち悪いくらいにニヤニヤしている。

「は、隼人。がんばってね!」

ひかえめで、恥ずかしそうな、純粋な応援に対して、葉山先輩は手を上げて返す。

「が、がんばれー!」

「がんばって。」

由比ヶ浜先輩も負けじと声を出し、雪ノ下先輩も小さく声を出している。雪ノ下先輩の視線の先は葉山先輩ではない。

先輩は葉山先輩のとなりに並ぶ。

交わす言葉はない。

公園にある時計を見れば、14時前。

少しずつ歓声は小さくなっていく。

「よし、準備はいいな?」

平塚先生はピストルを掲げる。

一番モチベアップさせられる人だと思うし、ていうか本人がやりたがっていたし。

「位置について。よーい

銃声が鳴る。

俺たちは一斉に走り出す。

白い息を吐きながら、リズムよく走る。  
トップ集団にいるのは、先輩、葉山先輩たち。

それに材木座先輩たち。

「はー、はー、…もう、無理…。」

公園からようやく離れたくらいだ。

スタートダッシュですでにバテていて、少しずつペースを落として  
いる。

材木座先輩の大きめの身体が後続集団の妨げとなった。わざと  
じゃない。

戸塚先輩たちテニス部、秦野、相模が後続集団の先頭に出る。横に  
広がったペースのいい走りが後続集団のペースを決めた。

俺やサッカー部3人組が2位集団として走っていれば、マラソン大  
会中盤の流れは完成する。

「これで、いいんだな。」

サッカー部3人組のうち、相田が話しかけてきた。彼らはペース配  
分が上手いから、真似させてもらっている。

「場は整えたし…、先輩次第。」

ずいぶんと無茶なことだったが、第一関門はクリアしたのだ。こう  
して、1位を争っている葉山先輩はボツチになっている。

「おい、ペース、上げたぞ。」

「比企谷先輩…だっけ、よく、追いつけるな。」

言葉を投げ合いつつ、2人は走り続けている。

「おお…、追い抜いた」

すでに満身創痍な先輩が葉山先輩を一度追い越した。

ここくらいが折り返し地点だ。

いくら練習したとはいえ、ペース配分を考えずに走っているだけ

だとはいえ、先輩には制限時間がある。

それまでに葉山先輩からいろいろ聞きだせるかどうか。

「ふう…」

海沿いの歩道はアスファルトで、硬い。

一歩一歩重ねるごとに痛みを感じる。

ここ数日、同じコースを何度も走った。だがまともなフォームではないから、この痛みには慣れない。それでも、最初よりマシになっている。

俺たち文化部が運動部に喰らいつけている最大の理由だ。彼らのペースに合わせていることもあるし、このコースを何度も走ってきたから、段差に気を取られにくい。

「止まった……？」

折り返し地点の橋。

そこで葉山先輩が立ち止まり、先輩も立ち止まった。

向かい合う。

肩を上下させて言葉を発している。

『だから君の言う通りにはしない』

追い越したときに、それだけちゃんと聴こえた。

儂い笑みじゃなくて、挑発的な笑顔だった。

「そういや、この後…、どうするんだ？」

気づけば、俺たちは1位集団だ。

2位集団が追い抜いたのだから、当たり前だ。

「え……、1位…争い？」

「へえー、それ…、いいね！」

植田がスピードを上げて、距離が少しできる。

やっぱり『一緒に走ろう』なんて嘘なのだ。だって大会なのだから、勝ったやつが一番目立つし、一番誉めてくれる。



俺たちも負けじとスピードを上げて再び、俺たちは集団となった。

「はあ… はあ……」

広場がようやく見えってきた。

息が苦しい。脚が重い。身体が重い。足が痛い。息が苦しい。

なんか重複した気がするがどうでもいい。

流れている汗は冷えて身体を凍てつかせる。

葉山先輩も集団に加わってきたけれど、交わす言葉は必要ない。

独りの世界、自分自身との戦いと言うべきだろうか。

腕を目いっぱい振って、力いっぱい地面を蹴って脚を前へ前へと動かそう。元々、フォームなんてクソくらえだ。カッコ悪くてもハツピーエンドさえ掴めればいいのだ。

中学の長距離走、高校でダムを走らされたこと、大学で何気なく出た民間マラソン。いろんな風景が浮かんでくるし、視界も思考もボロボロだし、フラフラしてきたし、胸が傷むし。

不思議と、無心にはならない。

『自分にだけは負けたくない』

このセリフ、カッコいいよな。

「…くそっ！」

その声にふと気づけば、葉山先輩も追い越していた。

もちろん一度立ち止まったというハンデもあるけれど、この人にだけは勝ちを譲りたくない。彼女が応援すればイライラしたし、デートに誘ったのに断ったのも腹立たしい。結局は自己中心的で、中途半端で、同族嫌悪と言うべきだろうか。とにかくムカつく。

凡人だとか異物だとか、そんな言い訳はもうやめよう。ご都合主義だとか奇跡だとか、もう何でもいいから勝ちたい。

だから、俺はまだ走れる。  
もつと先へ。  
傷つく覚悟はできた。

ゴールラインにもうすぐ手が届く。  
ゴールラインまであと100mほど。

「がんばってー！ー！」

なんでもう女子は3割ほどゴールしているんですかね。そういえば、5kmじゃなくて、4kmって言っていた気がする。雪ノ下先輩をはじめ、あまり体力のいない人もいるから交渉したんだっけか。

応援したかったからだ。

いろは、珍しく髪が乱れてるし。

「いけー！ーっ！！」

「がんばれー！ーっ！」

眼をつぶって、身体に全ての力をこめる。

負けるもんか、

「……っ！」

不意に視界が傾く。

鈍い音が2つ。

そして、女子の悲鳴が響く。

陽が陰った。

「いって……」

1人、誰かが俺たちを追い抜いたのを感じて這いつくばるように立ち上がる。

10kmのうちたった20mをボロボロになりながら、それはもうカツコ悪くゴールした。

ジャージを破くほど膝を擦りむいている。  
腰を地面につけてへたり込めば、手のひらの怪我にも気づく。  
せいぜい、風呂がキツそうだなくらいか。  
傷は、あまり気にならなかった。

マラソンの後って、清々しいんだな。

慌てて駆け寄ってきてくれる彼女の姿に、笑顔を見せた。

## 第27話 また一緒に

水分補給や、汗を軽く拭いた後だ。

公園にあるベンチに座らされている。

「もう、なにやってんですか。ばかですか。2人してばかばつかですか。」

ぐうの音も出ない。

張りきりすぎたのは確かだ。

「イテ、いっててー！」

ところで、いろははナース服が似合うと思う。

養護の先生のアドバイスを受けながら、消毒液を含ませたコトンをツンツンと当てる。いや絶対、ツンツンは正しくないよね。もつと研修ちゃんと受けてください。

「隼人はどう?。」

「あ、ああ。上手だよ。」

「本当に?。」

先輩曰くオカン気質な三浦先輩に、葉山先輩もタジタジである。最近しおらしかつたし、久しぶりに積極的になっていることもあるだろう。

「昔、よく転んでいたんだよなあ。」

何度もジャージを破いてきて、その度に当て布で縫い直してもらった。

その古傷は、今はもう刻まれていない。

「出会ったときもそうでしたね。」

「もう、1年か。」

雪の降る、受験の日だったな。

気づかないフリしていたけど、怪我の心配もしてくれたいし。

包帯を傷口に当ててくれる。

痛い。もう少し慎重にしてほしい。

「月村には負けたよ。来年こそリベンジするよ、比企谷にも。」

「受験勉強で忙しくて衰えるだろう、葉山先輩には負けるつもりはないですけどね。」

一度だけ見えた挑発的な笑顔に対して、皮肉を返す。

「いや、なに言ってるんですかね。」

「2人とも負けたっしょ。」

熱血の青春ドラママっぽいこととしてただけじゃん。

「いろは、結果発表はあるのかい？」

「はい。表彰式も用意してますよ♪ そろそろですかねー。」

「そうか、ちゃんと終息させる。」

葉山先輩は怪我や疲労をもろともせず広場へ向かう。

俺も、すっごいフラフラしながら広場にたどり着く。

広場では、豚汁やお汁粉を片手に各々盛り上がっている。

誰もがスツキリとした顔をしている。

「ではではー、結果発表ですー！」

マイクを片手に司会進行していくのは、いろはだ。

「受け取った紙で、ご自分の順位は分かっていると思います。だからこの場では上位3名を紹介したいと思いまーす。まずは、3位 葉山先輩です、壇上にどーぞー！」

葉山先輩は本牧先輩から受け取ったマイクを片手に、壇上へと上がる。

「途中立ち止まってしまったこともあったんですけど、良きライバルと皆さんのおかげで最後まで駆け抜けられました。連覇することができなかったこの悔しさは来年晴らしたいと思います。部活の最後の大会に向けて気を引き締め直すことができるきっかけになりました。……優美子、応援も治療もありがとう。」

近所迷惑なくらい、歓声と拍手が上がる。

雪ノ下先輩との噂もこれで終わりを告げるだろう。

「はい、ありがとうございますー。次は、副会長の伊月ですよー！ よろしくです♪。」

壇上へと上がる。

100を超える視線がこちらを向いている。こんなに注目されるのは生徒会選挙以来で、いろはは何度もこの世界を味わっているのだろう。

「趣味を問われればマラソンなんですかね。始めてまだ間もないですし、フォームもペース管理も無茶苦茶。だから、応援と気力でどうか勝つことができました。でもって、葉山先輩のようにまた来年この壇上へと上がるつもりです。クラスメイトのライバルたちにも負けるつもりはないです。……いろは、ご褒美の手料理待ってる。」

「はい♪ 特別に、腕をふるわせていただきますね！」

壇上から降りれば、スツと肩の荷が降りる。

なんかもう意地で、告白紛いなこととしてしまった。葉山先輩の時も俺の時も『お似合い』というフレーズが出ていることに安心している。ちなみに三浦先輩は顔を赤くしたまま、海老名先輩の鼻血を拭いている。

「というわけで、優勝者の発表ですなー。はい、戸部先輩どうぞ。」

いろは、さっきまでのテンションはどうした。

「えつとー、隼人くんたちに追いつこうと頑張った、おかげさまかなー。サッカー部でやってきた成果だろうしー、大会に向けてがんばるべー！」

「はい、皆さんありがとうございますー♪」

『いろはすー、そこで止めるのわー！』って俺や葉山先輩だけに言う戸部先輩だけれど、『これは伏兵だね、腐腐』とニヤつく海老名先輩には『告白』は届かないだろうし、本人も目立つことは遠慮したいっ

て言っていたし。でも、少しはちゃんと見てくれると思う。」

それにしても、視線を感じる。

王道の青春ラブコメって結構キツイものがある。

「やっぱり、俺にとって葉山先輩はライバルです。」

いろはが彼を好きでいた頃も、そして今も。

目標としたい先輩の1人なのだ。

「そうか…。俺もやっぱり比企谷にも君にも負けたくないな。」

ハッピーエンドに近づけた。

\*\*\*

喧騒も、日が暮れるにつれて止んでいった。寒いし。

後片付けについてだが、サッカー部やテニス部のメンバーを中心に手伝ってくれた。俺も葉山先輩もあまり動くことはさせてもらえなかった。俺のかつて見ていた生徒会活動でもっと閉鎖的だったのだが、これはこれでいいのだろう。

ようやく、生徒会室に戻ってこれたな。

本牧先輩も藤沢さんも仲良く先に帰ってしまった。

「コタツ、入らないのか?」

「となりがいいんですよ。」

傷を負ったままコタツに入るのはキツイ。

暖房の効いた部屋で、ソファに2人で腰掛ける。

「ていうか、葉山先輩の進路ってわかったんですかねー?」

「先輩が聞いたからな。でも、三浦先輩もちやんと自分で考えるだろうな。」

「でしようねー。」

静寂を楽しむ。

学校にはもう先生方くらいしかいないのだろう。包帯を優しく撫でながら、労わってくれる。

「もう私、そんなにカワイイですか？」

後ろ手と上目づかいに、的確な傾きで構成される仕草。

さらに、見惚れる。

「今日もぼっちりかわいい。」

「む、そういうほめ言葉 私以外に言ってますよね？」

「言つてない、と思う。」

「ホントですかー？ 伊月って、みんなに優しいですもん。」

「性分だからなあ。でも、ナンパしたことは一度もない、そんな度胸はない。」

「わかってますよ♪」

いろはが素を出せていることが嬉しい。

自分の幸せをあまり考えられないはずの俺が、今幸せだと感じている。

「私、文系に決めました。」

「俺は理系のまま。」

彼女自身の答えが聞けてよかった。

「大学も出て、今のところ将来は専業主婦かなーって。でもでも先輩とは同じにしないでくださいね。子どもの養育費のためにパートとかで働くつもりですよ♪」

「それ専業じゃないよな。もう、未来設計まで決めてるのか。」

「はい。あっ、ほんの少し、楽しみたいという考えもちよつとはありますが 浪費家にはならないつもりなのでよろしくお願いします。」

「大学院にも進むかもだし、待たせてわるいな。」

「ちゃんと待っててあげますって。」

「ありがとう。」

「まあ、先生にしろ、研究者？…にしろ、結構たいへんって聞くじやな



いですかー?」

「心配かけるだろうなあ。帰りも遅くなるし。」

ちやんと考えてくれるし、ちやんと考えて決めようとしている。

「です。あつ、でも育休はちやんととってもらいますからね♪」

「はいよ。」

今の時点で、明らかに彼女の尻に敷かれている気がするが、それが俺たちらしきなのだろう。

男子と女子がこれだけ仲良さげだし、

世間の高校生が喜びそうな『青春ラブコメ』だと思おう。

「なんか、焼き芋食べたくなってきました。」

「やはり唐突ですね……でも確かにアリだな。行くか。」

夜風が時には俺たちを凍てつかせる。

だがそれが、アタタかさを引き立てる。

帰ったら夕飯が待っているだろうし、半分こしようか

帰ったら今日のこと、根掘り葉掘り聞かれるのだろう。

## 番外編 このラノベ作家に祝福を！

千葉もあまり雪が降らないらしい。

先日1度だけ積もった日があったが、昼にはもう気にしない程度であった。その程度でも降ったと思うのは出身地のせいなのだろう。登校前に、手のひらサイズの雪だるまを作って公園にベンチに飾ったのは、仕方のないことなのだ。

今日も天気は良く、寒さは堪えるほどではない。

「なんかヒマなんですけどー」

「いや今仕事中でしょ、一応。」

冬になつてもタイツを履くことはなく、スカートから伸びたすらりとした足をぶらぶらさせている。この空間で今何が起きているかといえば、依頼について聞いている最中である。部長は優雅に紅茶を片手に読書中であるし、副部長（）は同じくスマホをいじるばかりだし。

先輩と依頼人が向かい合ったまま静寂が流れている。

「というか、相談人が一向に口を開かないせいだ。」

「むう」

遊戯部部长であつて2年、自称『先輩のソウルメイト』の材木座先輩だ。いつもトレンチコートを制服の上に羽織っていて、グローブを着用している。女子が多い部室は暖房がよく効いていて汗をかいている。

暑いなら脱げ。

平塚先生の指導をよく免れてきたな。

「……材木座、結局お前何しに来たの?」

「おお、八幡か! 奇遇だな!」

「いや、そういう小芝居いらさないから。」

「というか、話しかけてくれるのずっと待ってたんですか。」

先輩の辛辣な発言には耐性があつたらしい。  
しかし、『ウケる』が続きそうな発言によつて撃沈させられた。

独特な咳払いのあと、持ち直す。

「我が編集者になろうか悩んでいる話はしたな？」

「もちろん初耳だ。」

先輩は冷静に返す。

そういう強引な話の持つていき方は、女子があざとくやらないと。

つまり前提条件から無理ですね。

「いつきいつき、仕事なにか残ってましたっけ？」

めっちゃ興味なさそう。

基本的に俺たち任せにしている生徒会の仕事の話すら持ちだして、  
依頼人の話から自分は回避しようとしている。

「2月って特にイベントがないし、次は卒業式関係じゃないか。進路  
相談会も来年度だろうし。」

「へー。」

「そう、進路についてだ!!」

勢いよく材木座先輩が立ち上がる。

ロクなこと言わないことは容易に想像できる。

「ラノベ作家も漫画家も世間の風は厳しいのだ……だから我は気づいたのだあ！今の時代編集者こそ至高。安定生活、クリエイティブ、アニメ制作にも関わるかもしれん。さらにさらにー、声優さんとも結婚できるやもしれん！フハハハハハ」

。  
。  
。  
。  
。

「……………どうでもいいんですけどー、そんなに簡単にいくんですか

ねー?」

ようやく口を開いたいろはも、まるで世間話のように俺へ聞いてくる。

「俺もあまり詳しくないからなー。でも有名な出版社となると大手企業が多いし、就活もそう簡単じゃないと思う。面接とかでそれなりの準備も必要そう。」

声優との繋がりは、努力と運次第だと思う。

「そうね、それにかなり求人も少ないでしょう。」

「へー。」

「なんか大変そうだね。」

飴を舂めながら答えたり、それなりの返事をしたりと、反応は散々だな。

「だが八幡よ。」

なんで先輩。

俺たちの話を聞いても、ドヤ顔はいまだに変わらない。

「就職対策も考えてある。」

「ほう……。」

「先ほど、月村氏が言ったであろう。それなりの準備が必要と。つまり!学生のうちに編集経験があれば、中小出版社には即入社できるだろう。そして、軌道へ乗った頃に転職によって大手へ挑戦すればよいのだ!」

このポジティブさ、ある意味武器になると思う。

どの企業も即戦力で持続する若者を欲しがっている時代だ。

「というわけで、同人誌を作ってみるのはどうだろうかと思っつてな。」

「編集経験を増やす、それが依頼内容ですか?」

「ここまで長かった。」

さつきからスマホをいじっているいろはも、一応聞き耳を立てている。

ていうか、その言葉をよく女性陣の前で言えますね。

「うむ。我には一緒に作る『真の仲間』がない。そして、我は求めてきたのだ、『真の仲間』を。」

「……で？」

「八幡、一緒に作ろうぜー!!」

「断る。というか俺は『真の仲間』とやらじゃない。」

そもそも『一緒に作る』っていう、0から100までのサポートは奉仕部の活動ではない。先輩個人に『真の仲間』として頼んでもらいたいし、ていうか本人もそのつもりでやってきたのだろう。

「いつきいつき、同人誌、って？」

「同人雑誌、のことな。俺たちのような一般人が書籍化、本として販売したりすること。最近は個人で出す場合が多いな。二次創作みたいなもの。」

「ふーん、なるほどー……。」

よかった、そのスマホで検索しなくて。

うちの彼女、あまり一般的に知られる同人誌とか知らないんだよな。

つまり、そういう知識にまだまだ疎い。

「あたし、知ってる！コミケってやつでしょ？ 漫画を自分で描いたりするんだよね。姫菜が言ってた！」

「漫画より、個人的には文芸方面のイメージの方が強いわね。」

「そうですね。他にも数学や科学の論文とかもあります。コミケっていうのはコミックマーケット、年数回開かれる漫画の販売会みたいなものです。」

「なんか超儲かるやつですよー」

そこにだけ興味を持ってしまったか。

確かに年末になるとテレビで報道されていることだ。

「いや、大抵はそうもいかないらしい。」

先輩が釘をさしてくれる。

「え、あんなに人がいるのに、手間なのに……儲からない……のに、やる？」

いや、自問自答しないでくれ。

「趣味の世界、なのかしら？」

「そうですね。アニメキャラの作品が多いです。ちなみにバンさんは皆無に近いです。」

「そう……」

雪ノ下先輩はしゅんとした表情を見せる。

これで、うちの女性陣はコミケに行くことはないだろう。

行くなど言えば 逆に行きたがるメンバーだ。

「話を戻しますかね。」

材木座先輩は、女子たちが会話の中心にいると話せないみたいだし。

「で、どんな本を作るんだ？」

「うむ。やはり小説だ！……我、絵描けないから……」

「結局、ラノベか。というか『なろう小説』でいいんじゃないの？」

「最近、アニメ化もしていますからね。デビューの可能性もあります。」

『ハーメルン』は二次創作中心だし、『なろう』の方が適しているだろう。

「うーむ。だが我はあまりアレが好かんのだ。」

「なんでだよ。今人気だろ、異世界転生チーレム無双。」

「ダメです、先輩！ やっぱり純愛ものですよっ！」

いろはが勢いよく立ち上がって抗議する。

大丈夫、俺にはチートもモテモテの素質もないから。

「お、おう。そ、そうだな。」

「ええい！ 人気だとかそういうことではないのだ！ 我はそういうの

まったく気にしないしい、全然気になつてないしい！順位づけとか、評価づけとか、辛辣なコメントとかあ、我そういうシステムが嫌いなだけだし！私の作品をディスプレイ前で判断されたくないっていうかあ。それに、純愛ものとかクソくらえだ！」

「はっ。」

「ひっ！」

「ちよ、いろは、睨まないであげて。ほら、読者の方々にも好き嫌いがあるっていうか。俺は純愛もの大好きだから。」

「……まあ、いつきがそういうんだつたら……」

渋々、座る。

この話題、いろはの前で絶対に言わせちゃダメなことがわかった。

「どうか材木座、投稿…したんだな。」

「大した進歩ね。あんなものを世に出してしまうなんて。」

「勇気あるねー。」

そんなにヤバいのかよ、材木座先輩の作品。

先輩たちは一度読まされたらしい。

「いや、投稿はしておらん。酷評されている作品を見てそう思っただけだ。」

チャレンジすらしていないのな。

まあ、俺も読む専なのだが、材木座先輩はそういった作品にもちやんと目を通していろいろらしいし、案外編集者には向いているのかもしれない。しかしラノベ作家ともなると、そういう酷評と向き合っていないかなければならないのだろう。

「とりあえず材木座、他の方法を考えよう。編集者になる道は一つじゃない。」

「ふむ……。それもそうか！」

「雪ノ下、パソコン使うぞ。」

「うちはパソコンルームじゃないのだけれど。」

そう言いながらも、雪ノ下先輩がノートパソコンを用意した。  
3人で1つの画面を見ているし、先輩の顔は少し赤くなっている。  
だが上から覗き込む材木座先輩のせいで台無しだ。  
スマホで調べている俺たちは、同時にため息をつく。

「筆記試験あるところもあるんだな。」

「そうなんですかー？」

「らしい。」

互いに調べながらなので、会話は途切れ途切れである。

一般教養、教職教養、専門教養の3つがある公立の教採よりは準備は必要なさそうだ。そもそも免許取得に対して、単位が必要だったり教育実習だったりがある。

とか思っていたら、大手ともなると倍率がヤバい。

300倍とか。

「25で、年収一千万かー。」

「え、マジ。うっそだろ。」

新卒教員の何倍なんでしょうかね。

25歳って大学出たばかりだろうに。

「1発で、受かってくださいいねー？」

「ま、まかせろ。」

数年後のことなのに、すごいプレッシャーを感じた。

「ていうか、なんかヤバそうですね。」

「大手を希望する人も多そうだしな。」

いくつかサイトを調べてみたとはいえ、それなりの覚悟を持って、  
大学進学や就活を行わなければならないようだ。とりあえず、材木  
座先輩は面接が最大の難関ということだけわかった。



「……やはり、時代はラノベだな！ 転スラだな！ アニメ化だな！ はちまーん、我に付いてこい！」

現実を知ったようで、材木座先輩はドアに向かっていく。

たぶん声優さんと結婚するという夢は持ったままなのだろう。

その1つの目標に向かって道を模索しながらも、決してその目標は捨てない。

「……へいへい。」

原点ともいえる夢を捨てず、目標に進み続ける心意気は見習うべきなのだろう。

「材木座先輩、俺も手伝いますよ。」

## 第28話 まだまだ雪の降る季節

バレンタインデー。

それは女子にとって重要イベントの1つなのは自明だ。

3連休を準備に使うだろう。

だが今となつてはあまりそう思っていないかもしれない。

友チヨコ文化の方が主流だ。先輩や上司だからと渡す場合も多い。逆チヨコだつてある。これも確証はないのだが、義理チヨコでも男子に渡したとして、それには一定の好意があるからだと思われる傾向にある。だから、勘違いを避けるために貰いに來る男子にのみ渡す。

家族から渡されるものはちゃんと受け取るとして。

そう、この現代社会では、待つているだけではもはや成果を得られない時代なのだ。

「こんにちはー!」

「こんにちはです。」

今日も奉仕部の扉を開く。

いろはも生徒会の仕事がない日は基本的にここへ來る。

サツカー部へ行くのはあまり気が進まないようだ。

寒いから。

まあ、自分に正直な方が、いろはらしい。

「やつはろー、2人とも。」

「…こんにちは。紅茶、淹れるわね。」

席を立つ雪ノ下先輩は、よく注視なければ分からないくらい、シユンとした。庶民にも味がわかるくらい美味しい紅茶を淹れてくれるのはいつものことで、感謝を述べることも形式的なものとなつてしまっている。

だから、自費になるとはいえ菓子類を持つてくる。

自分たちが食べたいという理由はもちろんある。

「ていうか、そろそろバレンタインじゃないですかー?」

この唐突さにはすでに慣れている。

最後までチョコたつぷりを、机に肘をつきながら食べながら発言した。

「そ、そうだねー。」

「…そうね。」

反応としては、

すごい目を逸らしているのと、冷静さを保とうとしている。

「それでー、私暇ですし、なにかイベントをしようかと。」

「暇だからなんだ!?!」

「学年末の仕事、そろそろ取り掛からないとなー。」

会計とか卒業式関係とか。

「…:暇じゃないですかー?」

「現実とーひひ!?!」

ここで、扉が開く音がした。

雪ノ下先輩の視線が、本からそちらへ移る。

「先輩、おっそーい!」

「やつはろー!」

「こんにちは。」

「こんにちはです。」

「…うす。」

眩くような挨拶。

1つだけ残されていた空席に座ってマツ缶の蓋を開ける。

それを買うに行っていたせいで、少し遅れたのだろう。

「…:なんだ?」

「いいえ、気にしないで。」

「うわあ、先輩。うわあ…:…」

「…:は?」

「まあ、いいです。それでそれで、イベントのことなんですけどー」

「まったく話がのみこめないんだが。」

先輩はそう言いながら、

FGOのイベントを進める俺へ助け舟を求める。

雪ノ下先輩のことに關しては、自分でなんとかしてほしい。

「生徒会でまたイベントやろうってことじゃないですかね。」

「ああ、そうなのね。がんばってくれ……」

「ありがとうございます。」

労わってくれることに感謝を述べたら、

まるで、『そうじゃないんだよなあ』みたいな目をされた。

マツ缶を飲みつつ、ラノベを開く。

新刊の『魔法○高校の劣等生』。

アニメと二次創作だけしか知らないが、あの科学的な『魔法』が好きだ。

「先輩って甘いものって超好きですよね。」

「ヒツキーは甘いもの好きだよ！」

「そうね。」

「……いや、そうなんですけどね。」

「で、何が好きなのかなって。もうメチャ甘ですか？お砂糖食べます？」

「さすがの俺も砂糖は食べん。というか、月村の好みを聞けよ。」

「え、一緒に作るんだから問題ないんですけど。」

「まあ、その予定ですね。」

いろはが勝ち誇ったような笑みを浮かべることに對して、俺は動揺を見せてしまう。2人きりのときはそうでもないんだが、先輩たちの前では珍しいことだ。羨ましそうな顔をしていたり、リア充滅べという視線を向けられたり。

「で？」

「で、って、これだな。」

先輩がマツ缶を掲げる。

まさか雪ノ下先輩へ追加ダメージを与えるつもりなのだろうか。

「へー、そうなんですな。」

「お前が聞いたんだろうが……」

「うーん、それなら私も作れるかも」

「ばっかお前、ふざけんな。ただのコーヒーに練乳と砂糖を入れればいいとか勘違いすんなよ。いい加減にしろよマジで。」

「マジで怒られた!？」

マツ缶はわりと好きだが、俺はそこまで熱弁することはない。

「随分と苦い人生を送っているのね。」

「紛れもない事実だろう。」

どこか寒さを感じる、そんな雪ノ下先輩の皮肉に対して、あっけらかんと答える。

慣れって怖いね。

「そういえば先輩って、チョコ貰ったことないですよ？」

「ふっ、残念だったな。俺には小町がいる。」

「小町ちゃんに、今年はなしの方向でお願いしましょうかね。」

「ごめんなさい調子に乗りました許してください。」

「うわっ、シスコン。」

いろはは素の声で反応する。

ちなみに小町さんは受験生であっても、ブラコンだから、渡すつもりだろうけど。

「比企谷君に渡す相手は小町さん以外いないわよね。友達がいないのだから。」

「そういうお前も友達いないだろうが。いや、だが今年は戸塚がくれるかもしれない。」

「そう、よかったわね……」

部室の温度が下がりがかけた時、扉をノックする音が聞こえた。

## 第29話 乙女たちの戦いに向けて

来訪者は、三浦先輩と海老名先輩。

由比ヶ浜先輩とはよく行動していて、比企谷先輩のクラスメイトでもある。

「なんていうの？ 手作りチョコ、とか作ってみたいんだけど……。来年受験だし。最後の機会かも、しれないし……。」

このギャップ、葉山先輩も動揺すると思う。

頬を朱に染めつつ、依頼について述べた。

「でも、葉山君って今年も受け取らないんじゃない？」

「どういうことですか？」

由比ヶ浜先輩の発言に俺やいろはも首を傾げる。

「えつとね、トラブルを避けるっているか。」

「あー、なるほど。」

「明言してるんですね。」

深く考えずに、生意気だとみなす男子は心が狭いのではないだろうかとも思ったが、それも感情論にすぎないのだろう。

「名言じゃないと思うけど？」

そんなことを言う由比ヶ浜先輩は今はスルーしておこう。

たぶん中学時代にでも問題になったのだろう。

チョコの持参を学校側に禁止されたとしても、密かに持ってきたとかで。

その責任を彼が背負ったままなのだ。

「隼人、そういうの気にするっていうか……」

「作り方だけじゃなくて、場も整えてほしいってことですね。」

俺が確認を取るために聞いてみる。

いつもよりしおらしい三浦先輩が、ちよつとだけ頷いてくれる。

「そうだ、比企谷君なら受け取ってくれるじゃん！」

「いや、あたかも当たり前のように言わないでくれません……」

「男子同士ならセーフ、いや最高だと思うよ。」

その温度差に困っていた時、再び扉がノックされる。

青つぽく見えなくもない、黒髪のポニーテールが印象深い川崎先輩だ。俺は一度先輩と一緒にサイゼで会ったくらいだし、あまり面識はない。部室を見渡しているし、たぶん奉仕部に來るのも初めてなのではないだろうか。

高身長、鋭い目つきな彼女にいろはがちよつと怯えている。

三浦先輩と険悪な雰囲気も見せているし。

しかし雪ノ下先輩の淹れた紅茶に対して、目を見開く姿はよく似ていた。

「妹が保育園でバレンタインの話聞いてきたみたいだけど、子どもでもできるのはあるかっていう、相談……。」

「へー、でもサキサキって料理得意じゃなかったっけ。」

三浦先輩と同じくオカン属性ありそうだし、そんなに警戒する必要はないようだ。

「その、あたしの作るの、地味っていうか。」

「どんなのだ？」

「さ、里芋の煮つころがし……。」

「難しいのによくできますね。」

皮剥きも大変だったり、中が煮えなかったり。

冷凍のものを使えばそれなりには楽だろうが、味付けも難しい。

「そ、そうっ……。」

「はい。」

いろはがむっとしてている。

あなたも料理上手だけど、あまり和食には手を出しませんからね。

「あんだ、料理できるんだ。やるじゃん。」

「うん、まあ……。」

「それで、小さい子どもにも作れるチョコですよね。」

とりあえず、依頼内容を確認する。

「そうなるね。」

「あたしも！あたしも知りたい！」

身を乗り出して、挙手しつつ提案する。

「それは、どうかしら。」

「ゆきのん、正直すぎ！」

「で、どうするんだ？」

「えっと、どうすればいいかしら？」

顔を見合わせて、尋ね合っている2人は置いておいて。

さて、この2つの依頼、似ているようで少し異なる。

三浦先輩は葉山先輩向け、川崎先輩は妹さん向け、それぞれの作り方を教える必要がある。そこに葉山先輩が表立って受け取ることできる場を整えるという難題が生じる。個人的に家に呼び出すのは、意外と純情な乙女にとつてまだハードルが高いだろうし。

「……試食、ならどうだ？」

先輩に視線が集まる。

「さつき一色が言っていただろうが。月村と一緒に作るって。忌々しいことだ。」

「あつ、なるほどです。」

華麗にスルーして、いろはは先輩の言いたいことがわかったようだ。

「それだったら、生徒会にお任せあれ。雪ノ下先輩が直接、手取り……とにかく教えてもらえるでしょうしー！」

「それは構わないけれど……」

全員が具体的な内容を求めている。

「そうですね。お料理教室を浮かべてもらえるといいでしょう。マラソン大会のように生徒会主催の行事として行います。」

「なるほど。でも、みんな来ちゃうかもよ？」

海老名先輩の言う通り、あまり大きな場を作るのは、混乱を招きかねない。



「はい。ですので、試験的なものにするのはどうでしょう。それが、他校とのパートナーシップ：いえ交流を図るためというか、とにかくそんな理由で告知はしません。」

「海浜でも巻き込みじゃないですかねー。」

「えつと…?」

「身内だけのイベントをするっていうことです。」

「そういうことです!」

胸を張って同意してくれる。

いろはではなく、まさか俺がそんなことを言うとは思わなかったよ  
うで、先輩たちは苦笑いである。

意味 不 明な理由、独善的、もはや横領、そんなイベントが許されるのかどうか、しかしそれが意外と許される。他校との交流のためとすれば、かのクリスマスパーティーのように許可が出るのだ。総武高は生徒の自主性を重んじる傾向があるし。かつて、最後まで存在理由を実感できなかったボランティア団体がソースだ。

ていうか、仕事頑張っているのだから、少しくらい遊んだっていいじゃないか。

「まあ、お前らがそう言うんなら。」

依頼が簡単に解決することに、少し呆気なさを感じているという  
か。

じゃあ、そんな先輩にも書類仕事を手伝ってもらおう。

女子と一部の男子が主役の行事だし、そういうものだ。

先輩も1ヶ月後に意識を向けるべきだろう。

「顔が広くても、呼ぶのは最低限にしてくださいね。で、こんなところでいいですか?」

「教えてもらえるんだったら、いいよ。」

「それなら、隼人に渡せそうだし。」

「では、そういうことで進めるわね。」

「ああ、そうだな。」

「日にちは、3連休のどこか、月曜にでもしますかね。葉山先輩の予定次第ですけど。」

「うん、聞いておくよ。」

これで、方針は決まった。

やることは山積みだけれど、あの時とは違ってこっちが初めから主役だ。

### 第30話 隠し味

今回も駅近くのコミュニティセンターで開催されることになった。広めの調理室もあって、両校から近い場所に位置するので都合がよかったのだ。海浜総合高校も急なことだったとはいえ、パートナーシップ云々を出せば引き込めた。

海浜側も生徒会メンバーを中心として、人が集められた。

その女子の中にはちゃんと折本さんもいる。

合計人数としては25人だが、2割ほどを占める男性陣は基本的に手持ち無沙汰状態だ。調理器具や材料運びといった肉体労働もすでに済んでいるが、帰りにはまた活躍してもらおう。

だから玉縄さんと戸部先輩はもう少し落ち着いてほしい。

先輩や葉山先輩は冷静すぎる。

教室の後ろで待機してないで手伝ってあげてほしい。

「私たちも始めますかね。」

「うん、よろしくね。いろはちゃん。」

男子も参加させてくれるグループはいくつかある。

例えば、俺たち生徒会がそうだし、城廻先輩たち元生徒会がそうだ。

「まあ、やることといっても、チョコ溶かして固まらせるだけなんですけどね。」

「えっ、そうなんですネ。」

いろはは簡単だと言っているが、お菓子作りのレベル高いだけだ。ケーキやドーナツもいとも簡単に作る。チョコレート菓子も凝ったものを作るとなるとそれなりの技が必要になる。

「さわちゃんって、あんまり料理やらないんですね。」

「うう、お恥ずかしながら…」

まずは市販のビターチョコレートを細かく刻んでいく。

藤沢さんや本牧さんは少し危なげない。

「いろはの言った通りにやっついていれば大丈夫ですよ。」

「うん、そうさせてもらおうよ。」

俺も大学で一人暮らしをするまで、家庭科以外で包丁を持ったことはなかった。何度も指を怪我しながら飲食店バイトで鍛えられたのだ。

刻み方にはコツがある。

チョコを均一に溶かすために、大きさを揃えておく。

今から作るチョコレートにはあまり影響はないが、知っていて損はない。

刻んだチョコレート、お砂糖や生クリームを鍋に入れる。

生チョコはテンパリングだの相転移だの物性科学だの、そういう手間がないのだ。

「えっと、えっと……」

「た、たしか、味調節するんだよね。」

「そ、そうでしたね。」

見ていて初々しい。

俺やいろははサクサクなので、2人の様子を楽しみながら作っている。

「いつき、あーん」

スプーンで掬った液状のチョコを口に入れる。

ちゃんとフーフーして冷ましてくれている。

「ココアパウダーだな。」

「了解です♪ ……ていうか、なにぼーつとしているんですかー？ 2人もちゃんとやってくださいよ。」

いろはお手製のレシピにもそう書いてある。

あまりいろいろな調味料を混ぜて良いものができるとは限らないので、アレンジされているのはごくくらいだ。

「いろは。」

「ん……うーん。ふむふむ。」

俗に言う、間接キスである。

味についてもちゃんと考え、ほんの少しだけラム酒を入れた。

「これで完成ですかね。」

「だな。」

星やハートといった型に慎重に流し込んでいく。

これを冷凍庫で1時間ほど冷やせば完成だ。

「そっちはどうですかー?」

「え、うん!?!だいじよぶ!?!」

「で、できた、よ?」

ちゃんとレシピ通りにやったようで、無事に顔真っ赤である。

「それはよかったです♪」

さて。ここまでは平和に大成功に終わった。

周りを確認していこう。

まず由比ヶ浜先輩には雪ノ下先輩が付いてくれているので一安心だ。しかしあの桃缶は一体どこから持ってきたのだろう。

雪ノ下先輩は同時に三浦先輩や川崎先輩とその妹さんにも教えている。彼女でも教えながら作るのはさすがにキツイようで、葉山先輩が三浦先輩のサポートに入っている。

海老名先輩は不敵な笑みを浮かべながら作っていて、ドキドキを抑えられていないながらも戸部先輩は言われたことを手伝っている。

「え、なに、お前らもう終わったの?」

「ここの味見役じゃなくて、雪ノ下先輩や由比ヶ浜先輩のところへ行ってください。」

「いや、暗黒物質だったし……」

「冷凍食品だろうが、白飯だけだろうが、ちゃんと食べるのが男でしょう。」

「そんな父親が可哀想なんだが。どこかで聞いた話かと思えば、俺の親父か。」

「まあ、冗談はさておき、暇なんですね。俺は平塚先生に挨拶したいんですけど。」

「ああ。俺も行く。」

入試関係で忙しいのに、様子を見に来てくれたようだ。  
今は雪ノ下さんと話をしている。

そんな雪ノ下さんは旧生徒会メンバーを中心にいくつかのグループで指導していた。

「なんだ、もう終わったんだ。」

「生チョコだったので。」

「おー、やるじゃん。」

「教えてもらいながらですけどね。」

「謙遜することないよ。家庭的男子つてモテるじゃん。」

そういうこと、雪ノ下先輩にも言われたな。

「順調のようだな。」

「はい、特に問題も起きていません。」

「ねー、比企谷君や後輩君もお酒飲みたくならない？」

「いきなり何を言ってるんですか。」

「それって、チョコと一緒に酒飲むってことですか？」

「そ。」

「君は未成年に何を言っているんだ。」

「まあ、飲める年齢になったら試してみますよ。」

「そっか。 そうだ、静ちゃん今度飲みに行こうよ。」

「君に、本当に積もる話があるのなら……。」

雪ノ下さんの瞳が、ほんの一瞬だけ無機質になった気がした。

初めて見ることでできた笑顔以外の表情だった気がする。

「ふふっ、じゃあ、予定合わせないとね。めぐりと比企谷くんや後輩君を誘ってさ。」

「いや、俺たち未成年なんですけど。」

「えー、じゃあ、大学の友達でも呼ぼう……かな……」

声が途切れ途切れになっていく。

もうすぐ大学は春休みだろうし、呼ぶことは容易なはずだが。

「陽乃、どうした？」

「ちよっと予定を思い出しただけだよ。」

「そうか。」

またいつもの笑みに戻った。

その仮面とも呼べる笑顔が良いことなのか悪いことなのか。

「チヨコといえば、比企谷くんや後輩君って、誰かからもらったことあるの？」

その言葉に何人かが反応する。

作業を止めることはないが、聞き耳を立てている。

「いや、ないですよ。」

「俺もなかったですね。」

そうだった。

彼女は最期までちゃんと見てくれなかった。

「つまらないな。隼人は昔からたくさんもらってたのにね。」

単なる世間話だ。

「雪乃ちゃんもだっけ？」

場に影響を与える事実を的確に述べた。

それが良い変化をもたらせば、よかったのだが。

比企谷先輩の手は握りしめられている。

助けを求めている雪ノ下先輩とは、一瞬だけ目を合わせたただけだ。

「小学校に上がる前、陽乃さんと一緒にくれましたね。」

葉山先輩が事実を述べてくれたおかげで、事なきを得る。

三浦先輩もホツとしている。

「そうだったねー。で、雪乃ちゃんは誰かにあげる予定はあるの？」

「……姉さんには、関係ないでしょう。」

「そっか。まあ、渡す相手なんて限られてるけど。」

「馬鹿馬鹿しい。勝手に……」

ボウルの転がる音が部屋に鳴り響く。

肘が当たって机から落ちたが、運よく中身はなかったようだ。

「い、い、い、い、い……」

2度目のボウルの音が軽く鳴る。

先輩と同時に取ろうとしたためである。

そのボウルは由比ヶ浜先輩が鮮やかに持ち上げる。  
そんな彼女は寂しげだった。

そして、

変わらない笑顔の上に付け足すように、微笑む。

そんな雪ノ下さんを見て俺は自然と冷や汗をかいていた。

同時にこの疑問がちやんと浮かんだ。

この女性が苦しんでいる原因は一体何だ？



### 第31話 たった2人の後輩として

バレンタイン当日、それは総武高の受験日である。

そのため、1日前である今日、いまだ放課後になっても喧騒はやま  
ず、学校中が甘い香りで充満している。

俺たちはさつきと部室へ避難した。

暖房が効いていて、紅茶の香りはするけれども、息苦しかった。

「この間は、ごめんなさい……。その、母が。」

遠慮がちに、雪ノ下先輩がそう告げる。

俺たちが見ていない間に、何かあったのだろうか。

『気にするな』という軽い仕草に対して、由比ヶ浜先輩が大振りに反応  
する。

「そうそう！あたしも帰りが遅いって、よくママに言われるもん！」

「母ちゃんってというのはそういうもんだ。あれこれ言いたがるもん  
だ。」

「私的には、お父さんがちよつとうるさい時ありますかねー。」

心配してくれているだけで、かなり優しい人のはずだ。

もちろんまだ見えない顔もあるかもだけれど、家族仲はかなりい  
いと思う。

「そう、比企谷君のお母様は特に大変そうね。手癖が……」

いつもの言葉遊びをするのかと思いきや、先輩と雪ノ下先輩は目を  
逸らし合う。

「…ヒッキーのママってどんな人なの？」

「普通だな。小町とよく似ている。」

「そういえば、小町ちゃんも明日受験だよね。」

「ええ、そうね。でも小町さんなら大丈夫だと思うわ。」

先輩を安心させるように、そう告げる。

「ん、ああ、そうだな。月村が勉強見てくれたらしいし。一色もついで  
に。」

「ついでですとおー!？」

「どうもです。」

年明けから定期的に勉強会をしていた。

この時期ともなると、時に同級生とは気まぎれなくなったり、息抜きばかりしてしまったりするから、かなり感謝されていた。塾にも行っていないかったみたいだ。

先輩と同じで理系科目に不安があったが、かなり伸びたと思う。

雪ノ下先輩に面接対策してもらったって言っていたな。

「やはり心配なのかしら？」

「ああ。小町とか可愛すぎるだろう？絶対人気が出るだろう？男子の警戒もしなきゃいけないし、何よりロクでなしな兄の存在を知られないようにしないとイケない。」

「うわ、シスコン。」

「ていうか、合格前提!？」

だからといって、なんだかんだ兄が好きな小町さんのことだから、奉仕部に入りたいって言いそうである。

どんな終わり方になるかわからないが、残さないとな。

「あつ、先輩。」

「なんだ？」

「雪道に気をつけてって、先輩からも言っておいてください。」

「ああ、確かに降るかもな。去年は積もったんだっけ。」

「そうですね。あと、受験票忘れた時の対処法を教えてください。いい。」

それなら、俺もこれを言おう。

「ん？ ああ、わかった。」

「いやー、あれから1年かって思うと、なんでしょうかね。大人になったっていうかー。」

「あつという間だったな。」

この世界に転生から、日々が過ぎていくのは早い。忙しく、充実した毎日を送っている証拠にもなるだろうか。俺たちだけの秘密に、静かに微笑み合う。

先輩は、視線を本の字へ戻そうとする。

「で、先輩。なんかお腹空いたんですけど。」

「また急だな。」

いろはがとうとう痺れを切らした。

場を整えるために動き始めたのである。

今日のためにあえて準備してきたのに。

ここ最近、お茶菓子を持ってきていたのに。

今日はないのかと不思議がるところだろうに。

そこに気づかないところが先輩クオリティである。

俺もいろはも、今日は鞆には菓子が入ったままだ。

「で？」

「いや、別に。」

空気がピシヤリと凍った。

女性陣は清々しいまでの笑顔を貼り付けている。

「……今日、間食でもしました？」

まさかとは思う。

今日は昼休みのベストプレイスで監視もした。

何人か候補が頭の中に受かぶ。

城廻先輩は今日登校していたつけとか、平塚先生にそういう動きが

あつたかどうかとか。

「悲しいことに、食べていないな。」

そう先輩が告げたことで誰もが安堵する。

雪ノ下先輩の手が鞆に伸びたことに、由比ヶ浜先輩は寂しそうに微

笑む。

「……なら、その、よかったら、ちょうど作ったから。」

いつもより少しカクカクした所作で、バタークッキーを紙皿に分け

ていつて差し出す。

お互いに目を逸らし合っていることには気づいていない。

「……うまいな。」

大切そうに、先輩はクッキーを一つ一つ味わっていく。

もちろん俺たちも食べてさせてもらっているが、やはりいろは並み

の美味しさである。

チョコ要素がないことで、まだ本命ではないことを察した。

2段構えとは、恋愛初心者なのにかんりのやり手だ。

「そ、そう？ いつも通りなのだけけど。」

緊張を解くように紅茶を注いでまわる。

先輩からちよつと離れたあたり、初心である。

\*\*\*

結局、依頼が来ることはなく、活動を終了させた。

粉雪がほんの少し降っているが、傘を使うまでではない。しかし1年前と同じで身を引き裂くような寒さだ。

このマフラーがなければヤバかった。

「うー、さぶっー」

「マフラー、ちゃんと巻いた方がいいわ。」

由比ヶ浜先輩のマフラーをテキパキと直してあげている。

「その……あなたもよ。」

「ん、ああ。そうだな。」

2人を微笑ましく見ていた先輩が自分で締め直す。

いろはは舌打ちしそうなところを堪えた。

「そのっ……」

雪ノ下先輩が、続く言葉を紡ぐことはない。

憤りを解消してあげるために、いろはをこちらへ引き寄せようとする。

それを、

コツ、コツ、という音が聞こえて、中断した。

「雪乃ちゃん、迎えに来たよ。」

「姉さん……」

雪ノ下さんだ。

詳しくないから名前も知らない、赤色の車が校門近くに止まっっている。

「迎えに来られる用なんてないと思うけれど……」

「お母さんに言われたの。しばらく一緒に住むようになって。」

確か雪ノ下先輩は実家から離れて暮らしていたはずだ。

「もう春休みだからね。あ、荷物は明日届くから。午前中ならいいんだけど、午後から用事があるんだ。もしかしたらお願いしていい？」

「ちよ、ちよつと待つて。なんでそんなこと急に……」

その家族の会話に俺たちは割って入ることはできない。

まだ目の前で起きていることはマシだろうか。

雪ノ下家に対して、覚悟を持って近づけるかどうか、そこにかかっているのかもしれない。

「あるでしょー？心当たり。」

「……それは、私が自分でやることよ。」

「ふふつ、雪乃ちゃんに自分なんてあるの？」

「なっ」

「今まで私がどうするか、私がどうしてきたかを見て決めてきたのね。自分の考えなんて話せるの？」

「それは……」

「雪乃ちゃんはいつも自由にさせられてきたもんね。」

雪ノ下さんと違って、か。

年が離れているとはいえ、なぜそう極端なのだ。

「今だって、どう振る舞っていいのかわかってないんでしょ？」

「そんなこと……」

姉の笑顔から目を逸らし、迷子のように誰かを探す。

先輩が深く白い息を吐きだし、踏み出した。

「姉妹喧嘩なら余所でやりませんか？」

「ケンカなんてしたことないよ。昔から、一度もね。」

悲しそうな瞳を見せる。

安易に関わるなという意味、先輩は心の中で歯噛みする。

「あの、ちゃんと考えてます。……ゆきのんも、あたしも。」

「そ。じゃあ、帰ったら聞かせてもらおうね。」

踵を返して車で去っていく。

白い息を漏らしたまま、それをずっと見つめていた。

「え、えつと……そだ。うち、くる？」

「え、ええ。由比ヶ浜さんがいいのなら……」

「ああ。そうした方がいい。頼めるか？」

「うん、ママも許してくれると思う！」

今にも帰りそうな先輩たちを引き止める。

後輩として、先輩たちにちゃんと前に進んでほしい。

「せんぱーい、ちよつといいですかー？」

「明日、奉仕部みんなで遊びに行きませんか？」

それが終わりを告げるものであっても、これ以上『独り独り』が苦しんでほしくない。

### 第32話 その花言葉は

桜色のムートンコートと白のフレアスカート、そして珍しく黒いタイツを履いていて、いつもより気合いが入っていることが伺える。いわゆるデートコーデである。胸のピンクのリボンが時折りフワツとしている。

いろはとともに、最寄り駅から電車へ乗り込んでいく。

受験日である今日、それは世間一般では平日である。

しかしバレンタインデー当日ということもあるし、大学生は春休みであるし、デイスティニーランドが近いし、そういった理由で電車内は混んでいる。

13時前だからマシだというレベルである。

暖房の効いた電車において、2人で静寂を楽しむ。

ガヤガヤとカップルたちが騒いだまま、デイスティニーランドへ降りて行った。その中にはもしかしたら総武高生もいたかもしれないが、知り合いの顔は見ることはできなかった。ていうか、デイスティニーのガチ勢なら、午前中にはすでに行っているだろう。

あまり人がいなくなった電車、ほんの少し近づいた。

\*\*\*

改札を抜ければ巨大な観覧車が遠くに見えた。

ここ 葛西臨海公園は、海に面していて自然豊かな場所で、東京とは思えないほど穏やかだ。

工事の音があちこちから鳴り響いているけれども、気にならない程度である。

そして、雪はもう降っていないくて、すでに暖かい。

春が近づいている証拠だろう。

俺は、いろはから受け取った折りたたみ傘と合わせて鞆にしまう。

「まだ30分もありますね。」

「ああ。軽く見て回るか。」

足取りの軽い彼女に手を引っ張られて、一本道を歩いていく。  
「賛成です！」

子供連れの家族や、園児の集団とよくすれ違う。平日ということもあって幅が広い道はかなり余裕がある。他にも、大学生が2人きりで歩いていて、静かなデートをちゃんと楽しんでいる。

俺たちの歩調は次第に合わさっていく。

「ネモフィラって、なんですか？」

チューリップとネモフィラが花壇に植えられていて、春に咲くらしい。立て札に書かれていた。

「たしか、縁起のいい花だった気がする。色は青だったか。」  
「なるほど。春が楽しみですね。」

ここのチューリップには、一体どの色がつくのだろうか。  
それぞれの色に宛てがわれた花言葉は思い出せないけれど、どうか望むものであってほしい。

「…そうだな。」

さらに前へ進んでいく。

ガラス張りの展望デッキからは海が一望できた。

ここにくるまで、その背景を隠すようにそびえ立っていたのだ。

「いつっ、いつぎー」

いろはが見つけた、下の花壇へ降りていく。

2月中旬なのにすでに菜の花が少し咲いていて、その黄色の花の香りがする。

そして、のどかな風の中にやさしい潮の香りを感じた。

「いっしょっ。」



「こんな海、初めて見たなって。」

太陽の光を反射して、海面は輝いている。

波は穏やかで、海は綺麗な青色をしている。

海は果てしなく続いていて、遠くに島が見えることはない。

潮の香りも、もつと鼻にツンとくるものだったはずだ。

若い夫婦に話しかけて、2人の写真を撮る。

そして、海をバックに俺たちの写真も撮ってもらった。

「いつか、一緒に行きましようね。」

「ありがとう。」

たぶん、あの変わらない風景が広がっているのだろう。

あの風景は、この記憶は、虚像などではない。

小鳥が、潮溜りをつついている。

「よしっ、そろそろいくか。」

「はい♪」

来た道を引き返す。

今回の目的地である水族園こそが、この公園の名物だ。

券売機で購入したチケットを見せて、ゲートを通る。

「あつ、せんぱーい！」

入り口に先輩を見つけたので急ぎ足で向かう。

人工的なミストをバックに、スマホを見ている先輩もこちらに気づいたようだ。

「…まだ早くない？」

「先輩こそですよ。こんなに早く来るなんて明日は大雪じゃないですか、いやですよ、私。1回忘れ物取りに家帰ったらどうですか？」

「……15分ちよつとでそんなに怒られちゃうの？俺、悪くないよね？」

「女子にとって15分は価値が高いってことですよー。」

「男子の15分で大事なものはテスト前くらいですね。」

「それテスト直前だろ。足掻いてるだけだろ。」

よく気づいてくれてツツコミ入れてくれる。

ちなみに、ギリギリの暗記は単位を救うことすらあるので大事だ。

「ていうか、リラックスできましたー?」

「緊張しすぎじゃないですかね。」

妹さんの受験、そして昨日のこと。

他にも、本当に自分でいいのか、とか。

「……ありがとうな。」

「なんですか なにかっこつけてるんですか。口説く人ちゃんと考えてください、私には彼氏がいますので。」

「こいつ……、はあ」

先輩の目が腐る。

ようやくいつも通りの先輩に戻ったようだ。

「みんなー、やつはろー!」

白いコートを着た由比ヶ浜先輩と、黒い上着を羽織った雪ノ下先輩を引つ張ってやってきた。

「こんにちはでーす!」

「こんにちはです。」

「……よう。」

「……こんにちは。」

浮かかない顔をする雪ノ下先輩を見て、先輩もまた浮かかない顔をする。

「ではでは、いきましょー!」

「う、うん!」

いろはが機転を利かせ、ゆっくりと先輩や雪ノ下先輩も付いてくる。

水族園に続く長いエスカレーター。  
少しずつ暗く幻想的な世界へと向かっていくことは高揚感を感じ  
る。

この高揚感も楽しむべきものなのだろう。

それは先輩たちも例外ではないようで、少しずつ表情が変わってき  
ている。

「わぁー」

感嘆の声が上がる。

もちろん俺たちも声にならない声を出していた。

「サメっ！」

「…サメね。」

迫力満点の大水槽には、数々の海水魚が泳いでいる。

いろははすでに激写タイムである。

「かっけえな。」

先輩も、独特な特徴を持つサメに年相応に興奮していた。

ハンマーヘッドシャークと呼ばれるように、その頭部はトンカチの  
ようになっている。エイ、そしてそれよりも小さな魚も多くいるが、  
餌やりが十分されているようで1つの水槽で共存している。

「ふふっ。」

「……な、なんだ？」

「いいえ。少し意外だっただけよ。撮ってあげるわ。」

「マジか、頼む。」

雪ノ下先輩に携帯を意気揚々と手渡した。

そして、興奮を隠しきれない顔を見せたまま水槽の前に立つ。

「ハンマーヘッドシャークな。ハンマーヘッドシャークが来た時に  
シャッターを押してくれ。できればハンマーの部分横になってよ  
く見えるときだ。」

「細かいわね。」

早口で注文をつける先輩に対して、嬉しそうに呆れる。

何度か撮影をして、チェックしてもらっている。

「いつき！ 次、行きましょ！」

「わかった。足元、気をつけろよ。」

「はい！」

水族園内は暗い。

注意したけれども、はやる気持ちは抑えきれしていない。

『世界の海』という文字を見かけた。

どうやら、各海洋で生息する魚たちをそれぞれ展示しているようだ。

赤、青、黄、

先ほどまでと違ってカラフルな魚が目立っていた。

「おっ、ニモか。」

「ああ、あの。」

カクレクマノミには興奮を隠しきれない。

イソギンチャクに隠れながらも、そのオレンジ色の輝きはちゃんと見える。

はしやぐことはなく、ナンヨウハギは優雅に泳いでいる。

「映画、今度見ませんか？」

「了解。後で予定立てるか。」

たしか、ドリーが主人公の映画もあつたはずだ。

珍しい熱帯魚を見ながら、さらに進んでいく。

また少しづつ暗くなり、深海の生き物が見られ始めた。

泳いでいるタチウオは見事だ。

背ビレは縦波のように揺らめいて、刀のように真っ直ぐだ。

「うえ、なんですか、これ。」

グソクムシは白い甲殻を持っている。

そして、その複数の脚でチョコチョコ動いている  
ここでは魚だけではなく、カニやエビも多く展示されているよう  
だ。

「こっちはもつと大きいですよ…」

ダイオウグソクムシは手のひらよりずっと大きく、もはやあのダン  
ゴムシの仲間とは思えない。

通路を進んでいけば、大水槽がまた目の前に広がった。

マグロやカツオといった銀色に輝く魚が縦横無尽に泳いでる。ま  
るで海の中にいるようで、自然の雄大さを感じる。テレビ越しで見た  
ただけけれども、市場で売られているマグロより生き生きとしている  
けれども、忙しなさは感じた。

「ていうか、先輩たち置いてきちゃいましたね。」

「まあ、ここは通るだろ。」

先輩たちと合流して、外に出る。

ここでようやく半分といったところか。

### 第33話 春を夢見て、蕾は確かに芽吹いた。

一度、屋外に出た。

すでに天気はよく、気温も上がってきている。

ヒトデやタコ、ナマコと言った生き物に触れるコーナーが用意されていた。休日は多くの子どもで賑わうことだろう。冷たい水に手を入れて、グニユグニユとした不思議な感触をちよつとだけ楽しむ。

「あつちはなんでしよう?」

「日替わりのコーナーみたいですね。」

「行ってみよ!」

暇そうにしていた飼育員さんの許可を貰ってゲートをくぐる。

そのときに、2本指でそつと触ることを説明されたし、あまり触りすぎるのはよくないことらしい。今日はネコザメとホシエイのように、雪ノ下先輩が一番に興味を示している。

「ネコザメ…これが…? 手触りは舌に似ているかも。」

「いつき、これ触っても大丈夫なんですかね。どくとか。」

おそろおそろ触ろうとしているいろはは飼育員さんに確認してほしい。

「ニヤー……いえ、シャー、かしら……」

「えいっ!……あつ、なんだ」

エイも予想していたよりずつと大人しいようだ。

いろはは2本指をゆつくりと動かしている。

「じゃあ、あたしも……ひゃあ!」

触ったところが問題だったのかほんの少し動くと、由比ヶ浜先輩が手を咄嗟に逃がす。同様にいろはもビクツとして、手を水から出す。

「水、かからなくてよかったですね。」

俺たちも腕捲りをして、壊れ物を扱うように優しく触れる。先輩は猫を飼っているようなので、撫で方が上手だ。もちろんそれが魚に合っているかは知らない。

さて、猫の舌とサメ肌が似ているかどうか、俺にはわからなかった。「そろそろ、行きます?」

「…おお、そうだな。」

真剣に確認していた先輩には悪いが、飼育員さんに言われた通り手を石鹼で洗ってブースから出ていく。

「ペンギン！ ペンギンですよー！」

「わあー、かわいいー！」

先ほどまでと違って、ここには多くの人が集まっている。

どうやら飼育員さんたちによる餌やりが行われているようだ。

「やだなにこれ超可愛いんですけど。小町に写真送んねえと。」

「いや、帰ってからにしてくださいね。」

試験中だろうに。

氷に見立てた岩山でよちよち歩きし、海水のプールで泳ぎながら小魚を嘴に咥えている。

「すごいすごい！泳いでるよ！まるで鳥みたいだね！」

「そもそもペンギンは鳥なのだけれど。」

「言われてみれば…：…いえ、鳥ですよねー！」

「し、知ってたもん。」

たぶん2人はペンギンが魚と思っていたのではなく、鳥とペンギンの包含関係が分かっていなかったただけだ。

2匹だけで寄り添い合っている、フンボルトペンギンの夫婦を一瞥する。

「あつ、もしかして、あっちって赤ちゃんじゃないですか！」

「ほんとだ！かわいいー！」

一般的なサイズよりずっと小さいペンギンの集団がよちよち歩きしている。まあ、飼育員さんの話によると、フェアリーペンギンという種類で、すでに大人らしい。次にオキアミの餌やりが始まったことでさらに盛り上がっている集団から、俺も離れる。

「あら、一色さんは？」

「別に、いつも一緒ってわけではないですよ。」

「…：…そうなのね。」

屋内に入つて次の場所は『海藻の林』。

薄暗く、水槽の中では赤い海藻が鬱蒼としている。

熱帯魚やマグロ、そしてペンギンと比べて、ここの魚に華やかさはない。海藻に隠れるようにひっそりと自分の生活をしている。刺激を求めることはない静かな魚たちに、多くの人が地味さを感じるだろう。

したがって、この静寂に留まっているのは俺と雪ノ下先輩だけである。

「月村君には、どう見える?」

この水槽の中で一際目立つ魚は悠々自適に泳いでいる。

そんな魚を目で追う、雪ノ下先輩の儂い瞳を、俺は見た。

「そういうものなんだな、って。」

「どうということ?」

「俺には、誰かの生き方を変える力なんてないですから。もし、きつかけになってくれたのなら、嬉しいですけどね。」

誰かの力になれるとか、子どもを成長させられるとか。

そういうことをして、そういうことがしたくて、結局はその『過程』と『成果』に関わって自己満足したくて、ここまで進んできてしまった。

「でも、奉仕部もそういうものなんでしょう?」

「そうね。あくまで手助けをするだけ。願いが、叶うかどうかは……」

言葉を続けることはなく、水槽のガラスに静かに手を当てる。

「由比ヶ浜先輩のことは、好きですか?」

「ええ。」

「それなら、だいじょうぶそうですね。」

「ありがとう。」

どうやら肩の重荷が1つ取れたようだ。

もう1つについては雪ノ下先輩次第だろう。



「そういえば、あなたとこうして話したことはなかったわね。」  
「まあ、そうですね。」

「初めて会った頃は、不愉快だったかしら。久しく感じていなかったことだったわ。」

懐かしそうに微笑む。

こういうときの雪ノ下先輩は、本当に楽しそうだ。

「今はマシになってます?」

「そうね、変わったみたいね。」

たぶん独りのままでは、変わることはなくそのまま卒業していた。

「もうっ、先に行ってたんですか?」

「ゆきのん! ここってなんなの?」

「カリフォルニアの海を再現しているみたいよ。」

「へえー、なんか森みたい!」

一際目立つ魚には、今は数匹の魚が寄り添うように泳いでいる。

ゆつたりとした1つの空間をこの5人で楽しむ。

「……次、行くか?」

「うん!」

「ええ。」

最後のブースは、東京の海の生き物のようだ。

建物内はずっと明るくなっていた。

「えへへー」

「ちかい……」

先輩の口元がほころんでいた。

さっきまで見てきたブースより、ありふれた感じがする。

多くの人が満足げに少し早足で出口へ向かっていくが、俺たちは1つ1つ大事に見ていく。

「ゴール!」

レストランやショップがあるフロアに出る。

出口と入り口は隣り合っていて、またハンマーヘッドシャークのところまで戻るようだ。

「先輩、お腹空いてませんか？」

「まあまあだ。」

時間は16時を過ぎている。

昼食を食べるのが早かったこともある。

「食べていきましようか。」

「さんせーい！」

さて、普段のいろはなら、値段が高めに設定されている観光地レストランで食事をするのは避けるだろう。それでも、この水族園で夕食を済ませようとする理由は察することはできるし、俺たちも同じことを考えている。

マグロカツカレーかマグロカツスパゲッティを、各自注文した。

\*\*\*

駅の改札口を抜けてすぐ見ることできた観覧車だ。

平日夕方ということもあって、俺たちくらいしかない。

110m以上の大きさを持つ観覧車を見上げるだけで、足がすくむ。

先輩たち3人と、俺たちに分かれて乗り込んだ。

少しずつ上がっていく高度に、俺もいろはもそわそわする。

「ジェットコースターとか、大丈夫じゃなかったんですか？」

「いや、あれは別物だから。」

このゴンドラが落ちないかどうか不安になる、そういうことが言いたい。

長時間拘束され続けるこちらが、ヒヤリハットである。

風でゴンドラが揺れ、ヤバい音が聞こえてくるのは気のせいだろうか。

公園の各地で工事をしていたし、老朽化もありえる。それある。

「今、どれくらい?」

下の景色を見たら、さらなる醜態を見せてしまうだろう。またそんな不安に駆られる。

頬に柔らかい感触が当たった

「ん……ふふっ、隙だらけですね。」

白くて綺麗な頬が、夕日に染まっていた。

「そろそろ、一番上ですよ。」

彼女を視界にちゃんと入れて、その風景として千葉の街並みを見る。

「いつも、助けてもらってばかりだな」

「わたしも、ずっと、いつも……」

染まる頬、潤んだ瞳、優しい香り、ふわつとした亜麻色の髪、

一度見えなくなる。

柔らかい唇、熱だけを感じる

「……もう、終わっちゃいますね」

「続きはまた今度だな」

「はい」

ゴンドラを降りて、先輩たちと合流する。

言葉はなく、由比ヶ浜先輩が先導してたどり着いたのはクリスタルビューである。

水族園に来た時よりも、夕日によってさらに海は綺麗になっていた。

「少し、あっちに行ってみましょうか?」

「ううん、いろはちゃんやツツキーにも聞いてほしい。いいよね?」

確認を取り、雪ノ下先輩も頷いてくれる。

一歩下がって3人の行く末を見守る。

「これから、どうしよつか？ あたしたち。」

「……どういうことだ？」

2人がポーチから出した物を、先輩の手をそれぞれ取って、その上に置く。

「これ……」

無色透明のゼロハンの袋が2つ。

不揃いな形のクッキーと、綺麗な形のマカロンが手渡された。

優劣などはない。

努力や真剣さ、そして想いを籠めている。

『好き』と、言葉で伝えない。

誰よりもずっと先輩のことを知ろうとしているから、わかるのだろう。

「いろんなこと、あったね。」

「ええ。今まで生きてきた中で、一番早く過ぎていった1年だったわ。」

「……結構、早かったな。」

俺の青春もいつからか圧倒的に加速した。

停滞していたいけれども、この日々は、手から零れ落ちるように思い出となっていく。

「ゆきのん、あたしね。ここにいるみんなが好きなんだ。だから、どうすればいいか全然わからないの。」

「私もよ、由比ヶ浜さん。これだけじゃない。姉さんの後ばかり追ってきたから、将来のことだわ。」

「俺も……」

先輩は、俺たちの方を一度見る。

そして、真剣な表情で2人にまっすぐ向き直る。

「俺も、ちゃんと考える。だから、ちゃんと考えてほしい。」

どうしても『本物』を求めてしまうから。

「わかった！」

「待っていて。」

黄色い菜の花は、今ちゃんと咲いている。

しかし春に咲くチューリップの色は、俺たちはまだ知らない。

「ゆきのん、がんばろうね」

「そうね、がんばりましょう」

今わかることは、

先輩がどの選択をしたとしても、2人の絆は決して途切れることはないということだ。

そこだけは、もうまちがわない。

第34話 咲いて廻って、雪の下で結われて、芽吹いて花開くまで。

ほとんどの3年生は前期及び後期試験に向けて勉強中であって、このピリピリ感はまだ続くだろう。しかし中学生たちの高校受験も無事に終わって、学校自体が少し穏やかになった。つまり、手の空いた教師たちが生徒会に対して年度末の仕事を委託していく。

俺や本牧さんはどうと、ここ最近はずっと数字ばかり見ていた気がする。もちろん俺たちが学校のお金を管理しているわけではない。部活連や事務とのパイプ役、また生徒会で使った費用について今年度の決算を行っていたに過ぎないが、かなりの激務だった。

こういうとき、例えば雪ノ下先輩がいれば百人力なのだろうが、重要な仕事は責任を持って生徒会が行うようにはしている。

ともかく、これでようやく卒業式関連の仕事に俺たちも参戦できる。

「いつき、プロムですよー!」

書記である藤沢さんを引き連れて、日の暮れた生徒会室に飛び込んでくる。

「待ってくれ、さすがの俺でもなにがなにやら。」

その細い腕に抱えられていたプロジェクターを、よいしょと机の上に置いた。

「謝恩会があるじゃないですかー?」

「卒業式の後の、イベントのことだな。」

分かりやすく言うなら、3年生を送る会である。例年通りなら、卒業式後に簡単なパーティーを行うのである。俺は実際に参加したことはないが、1, 2年生も自由参加が可能な立食形式のもの聞いてる。

「そもそも、プロムって何なのかな？」

本牧さん同様、その聞きなれない言葉に俺も首を傾げるしかない。

「ダンスパーティー、みたいなものでしょうか。」

「それで、そのプロムを謝恩会でやるのか？」

大学でも経験したことないし、開催のお知らせすら見たこともない。せいぜいハリポッターとか映画で見たくらいで、わりと好きなシーンではあるけれど、実際に行くようになるとは思わなかった。俺のイメージとしてはタキシードやドレスを着て、さらにダンスも取り入れたパーティーだ。

例年の謝恩会が、ずっと派手なものになるだろう。

「……まあ、むずかしいのはわかっていますよ。」

初めての試みに、賛同してくれる人は多くはないはずだ。教師陣もPTAも、そして生徒たちも。

「でも、今動かないと、たぶん無理なんです。来年やるって言っても、否定されて……。だから、失敗したとしても、来年の布石をちゃんと……。」

「私も、やりたいと思っています。」

藤沢さんが、はつきりと言葉を紡ぐ。

いろはたちが本当に求めているのは、1年後のプロムをなにがなんでも開催することなのだろう。そういうことは、俺にもちゃんとわかる。

「だから、お願いします。」

たまに見せる、本気の瞳は1つ前の春から変わらない。

こういう無茶ぶりがあるから、早めに仕事をこなしておく必要があるのだ。

わかっている。

「会計の仕事はさつき終わったよ。」

「間に合わせるぞ。」

来年度プロムを必ず開催させるには、今年度の成功こそが一番の武器となる。

そして、先輩が、俺たちが後悔しないために。

平塚先生の『異動』を俺が知っていることは、あくまで父親のおかげだ。

先輩は、まだ知らない。

\*\*\*

1週間も経たず、案が固まっていた。

ブレインストーミングなんてしていかないからだろう。それある。

雪ノ下先輩の参戦、それがかなり大きい。ダンスパーティーに参加した経験や持ち前の知識を活かして、プロムの構成や会場設営について決めていく。ボツチ精神であまり乗り気ではない先輩も、交友関係の広い由比ヶ浜先輩も、それぞれの立場から意見を次々と出してくれた。

俺や本牧さんかというと、また予算について、ここ数日は頭を悩ませていた。来年度はいろいろ節約することになりそうだ。

ともかく、進捗状況としては凄まじいものだ。

すでに学校側やPTAにも仮承認が通っており、SNS及び貼り紙を通して生徒への告知も行っている。受験生からすれば急なことなのだが、無事に開催するためなので許してほしい。



「本当に、これを着るのか。」

先輩がありふれたタキシードを手に持って、つぶやいた。

「今日は紹介動画ですし、個人が特定されないよう撮影とか編集もしますし。」

今日の目的は、L I O Eの公式アカウントに貼り付ける紹介動画の撮影である。

「だからといって、気が進まないんだよなあ。」

「こういうの慣れてるのって、雪ノ下先輩くらいでしょうね。」

俺もタキシードに袖を通す。

こういうフォーマルな服は久しぶりである。

「そう、だな……」

「ところで、先輩ってダンスできそうですか？」

「体育でもここまですらんだろ。創作ダンスを押し付けられたただだ。月村は？」

「こういうダンスは3時間くらい、お遊び程度です。大学で履修していたんですよ。」

「マジかよ、大学でもあるのかよ。」

「そもそも体育自体選択式でしたよ。俺って球技が苦手ですので、消去法です。」

「消去法、ね。」

「まあ、意外と冷めてたんですよ、俺も。」

変わったのは、『傷み』を自覚してからだった。

間違いばかりの俺が、正しくあろうとして、間違えた。

証明や計算ばかりで、取捨選択を恐れて、間違えた。

間違うことをわざと選んできた。

それももうすでに過去のことだが、忘れてはいない。

「なあ、弁当のことなんだけど。」

「どうかしました？」

量は半分ずつにするよう俺たちで取り決めしたし、由比ヶ浜先輩についても何度か俺たちが練習に付き合ったし、雪ノ下先輩も相変わら

ずの実力であるし。

一体、何を相談してくることがあるのだろうか。

「あれって、お前らの仕業」

「入ってもいい？」

先輩の話が途切れる。

雪ノ下先輩の声が扉の外から聞こえてきた。

「ん、ああ。服は着た。」

扉が開けば、男装の麗人が目の前に現れる。ありふれた燕尾服は彼女のスタイルの良さを引き立てており、髪は1つに纏められていて雰囲気はいつもと違う。まさにプロムキングに相応しい出で立ちである。

「じゃ、俺は先に行くんで。」

「お、おう。」

2人は見つめ合ったままで、もう俺は蚊帳の外だった。

「では、よろしくです。」

「そ、そうね。……さ、そこに座りなさい。ぼさぼさ谷君。」

「……へいへい。」

椅子を指差した雪ノ下先輩に、先輩は素直に従う。

そんな2人を見届けて、更衣室から出る。

そうすれば、体育館は様変わりしていることを再び実感させられた。

カラフルな光源やバルーンアート、ミラーボール、まさにパーティー会場である。

床がそのまま木のフロアリングであるのは、高校生らしさが滲み出ているのではないだろうか。

当日も、卒業式を市民ホールで行って、この体育館がプロム会場となる予定である。

「いっしょ。」

その聞き慣れた声でお仕事モードから引き戻される。

「……ニアツテル」

「はい♪、いつきもかつこいいですよー!」

褒め言葉をなんとか絞り出したものの、ちよつとポイントが低かつただろうか。

オレンジを基調としているドレスワンピースで、ボリユームのあるスカートが特徴的である。袖や裾からはすらりとした手足が伸びている。控えめな化粧は女の子らしく、胸元から見える黒いレースは女性の魅力を秘めていた。セミロングの亜麻色の髪は編み込みによって、いつもよりゆるふわ感が増している。薄黄色の小さなリボンがヘアアクセサリーとして可愛さを引き立てている。

「うへへ」

さて、

俺の腕にちゃんと手を添えて、とろんとした顔でご満悦ないろはをあまりじっくり見ているわけにはいかない。

ツツキーつてば、キモいくらい見ていた。

お仕事モードに戻る。会場内にすでに10ペア準備ができており、少し緊張気味に撮影開始を待っている。メンバーは国際科やサッカー部を中心に集められている。各パートナーが彼氏彼女の場合は少ないので、プロムというより合コンっぽい、ちよつと背伸びしたような初々しさが体育館内にはある。

そして、主役の登場に会場内はどよめく。

いつもより大人っぽい由比ヶ浜先輩を、男装した雪ノ下先輩がエスコートして、会場の中心に立つ。2人は校内で1位を争う美少女であることは周知の事実なのだが、いつもと違う雰囲気 of 2人が並んでいるのだ。

女子はキャーキャー、男子はみとれている。

ていうか、2人ともノリノリである。

曲が流れ始める。

『咲いて』というフレーズと同時に、動く。

プロムキングとプロムクイーンの役を任せられた2人は、見事なダンスを披露する。もちろん雪ノ下先輩のエスコートが素晴らしいのだが、由比ヶ浜先輩はそのエスコートに逆らうことなく順応している。

まさに、阿吽の呼吸なのだ。

「さあ」

「いきましようか」

俺たちも自分たちなりのダンスで、参加し始める。

雪ノ下先輩のようにエスコートできればカッコいいのだが、そこまでのスキルはない。

お互いに振り回すようなダンスだ。

ミスをして、それすらも楽しむ。

やはり楽しいことが一番だから。

「こういうの、女の子の夢なんですよ」

「そうなのか、俺のお姫様」

「はい♪ 私王子様」

普段ならこういうことは言わないので、雰囲気になら流されていることは確かだ。

どこのペアも課題点の多いダンスだが、それがいい。異性の手を握ることすら緊張していて、高校生らしさがちゃんと表れている。

撮りたいものが撮れて、運営側としては満足である。もちろん、俺個人としても。

「先輩って、罪作りな人ですよね」

なんだかんだ運動会でやるようなフォークダンスに似ている。気になる異性と触れ合うことのできる時間で、しかもこの曲の間だけは、パートナーを独り占めできる。

少し息切れしている雪ノ下先輩や由比ヶ浜先輩の視線は時折り、先輩と川崎先輩に向けられていた。

### 第35話 陽の満ちるあの部屋から出て

何もかもが上手く進んでいる。

いや、そう見えているだけなのかもしれない。

今もまた、まちがっているのかもしれない。

幸せだけ描いた物語なんてないことはわかっている。

だから、あがいて、少しでもちやんとしたい。

やはりハッピーエンドが好きだから

\*\*\*

この応接室に入るのは何度目だろう。

初めてここを使った時は『大切なきっかけ』が起きた場所だったが、生徒会の仕事においてよく外部の人と話す時に使うことが多くなつた。

「お待たせしました。ここにいる者が中心メンバーです。」

平塚先生がそう告げた。

先輩たちに加えて、生徒会から俺というはだけが来ている。

奉仕部が部室を離れて、この応接室に揃ったことになる。

今まで感じたことのない重々しい空気だ。

俺も、気を引き締め直す。

「プロムについてだけれど、中止するべきだという意見があることは、事前にお伝えした通りだわ。」

先日撮影したプロムの紹介動画は、『高校生らしさ』を周知させるための目的もあった。

「やはり、高校生らしくないんじゃないかって心配していらつしやるみたい。」

偏見だとか価値観だとか、人の考え方はそう簡単に変わることはない。

ドレスコードを推奨した謝恩会自体を懸念しているのだろう。

雪ノ下先輩の母親は、陽乃さんへと視線を向けた。

「……卒業生も、賛否両論みたい。」

発言を促されて答えたような、無機質な行動だった。

「まあ、別に否定的な意見が多いわけじゃないんだけどね。」

「少数意見だからといって、切り捨てていいことにはならないわよ。しつめるように、咎めるように、そう告げる。」

親子の会話には口を挟むことはできないが、同時に俺たちにも意見が伝えられる。

話が上手い、と数分で実感させられた。

「私個人としては、節度を持ってやる分には構わないと思っているのよ。でもね」

「だからっ！」

雪ノ下先輩が言葉を遮る。

「保護者会と、学校側が連携して動けば問題は防止できる。そういうことで、すでに内諾をもらっている……はずよ……」

「懸念事項については、あらかじめリストアップしたはずですよ。」

少し感情的になっている雪ノ下先輩の発言に補足する。

「そうですね。あくまで書類だけを見た段階での、内諾だったわ。」

にこりと微笑み、次に提示する意見に重きをおく。

「最終的な判断は、保留となっていたはずではないかしら。」

事実を述べた。

少数派意見の尊重という感情論と混ぜながら、しっかりと展開してくる。

「……ちよつといいですか。」

「ええ、どうぞ。」

「後でひっくり返ることがないように事前に話をしたんです。」

「その、みんなでちゃんと楽しめるようにがんばろう、っていうか

……」

「問題を起こさないようにしようって、先輩たちはちゃんとできるはずです。」

高校生らしい感情論を投げかけることができるのは、いろはや由比ヶ浜先輩ならではのだろう。

「それに嫉めるのは、保護者の仕事でもありますよね。だから」「一色。」

「……すいません。」

度を越えて感情的になってきたので、注意された。

まあ、これで『流れ』は転換できた。

「もちろん、皆さんもいろいろ考えているのだと思うわ。」

「それだったら……」

「やはり心配なのでしょうね。……縛りつけてしまったとしても、自由にさせてあげたつもりだとしても。」

儂く、そう告げる。

「心配、ですか……?」

「ええ。SNSのトラブルも増えていることだし。こういう派手な催しには過敏になっているのかしらね。」

俺たちに柔らかな笑顔が向けられる。

劣勢となった『流れ』でも、年上の余裕は崩れることはない。

「一色さん、とおっしゃったかしら。今あなたが言ったように、そうした事態は各家庭でも、学校の方でも、ちゃんと教えるようにするべきなのでしょうね。」

一度、言葉を区切る。

「でも、まだ充分とは言い難い。分別がつくはずの大人でさえ巻き込まれるし、引き起こすことさえあるのだから。」

だから、子どもはプロムはやるべきではない。

話が逸れているように思えて、暗喩的にそれを伝えてくる。



当の本人はというと、紅茶に口をつけて、雪ノ下先輩の出方を伺っている。

「企業のパーティーや、友人の結婚式、そういったものに将来的に参加することになりますよね。」

「そうね。」

「ちゃんと見守られているからこそ。今だからこそ。マナーだとか、各懸念事項への意識だとか、この謝恩会で学ぶことができるのではないのでしょうか。」

あくまで高校生として、言葉選びに気をつけながら、教育的意味を事実として述べる。

「それでも、世間にあれこれ言われてしまえば、せつかくの門出に水を差すことにならないかしら。これまでの謝恩会の方は、特に不満があったわけではないでしょう?」

「……そうだよ。」

「その、私たち在校生たちにも、プロムは好意的に受け入れられてます。新しいことに期待する人は多くて……」

「でも、表に出ない意見に耳を傾けることも大事なことよ。上に立つ者にはその責任があるわ。」

変わるべき時に、平穩を求めて変わらないことを選ぶ人は多い。  
俺も、かつてそうだった。

それはさておき、いろはも俺も、個人的な意見は見事に論破された。  
しかし、ここまで一番知れてよかったことがある、

雪ノ下先輩の母親本人としては、プロムの開催がされるかどうかは、どちらでもいいのだ。

「私個人としては即中止という判断はしたくはありません。計画上不備のある部分を適宜修正し、保護者の皆様のご理解を得られるようにすべきかと。」

「先生のご意見はもつともだと思えます。では、後日に」  
「アンチ・プロムって知ってますか？」

話が切り上げられようとした時、  
先輩が意表をついて、そう尋ねた。

「ええ、もちろん。」

「えーと、学校の許可なく自分達で行うこと、だよね！」

「そうよ、由比ヶ浜さん。えらいわね。」

「それって、本当に褒めてくれてるの!？」

2人の仲の良さに、静かに微笑んだ。

嬉しそうに、次の動きを待っている。

「それで？」

「すでに張り切っている人たちがいるんですよ。それも少数どころじゃない。」

「うん。ドレス着なきやだし、いろいろとやらなきやいけないからね。」

「いろいろしてるんですよ。2人とも。」

俺と先輩は、ちよつと気まづくなった。

「と、ともかく、もういろいろ進んでいるんですよ。」

「もし、いきなり中止になったら、自分たちでやる人たちもいるのは確かだね。」

「雪乃、あなたも？」

「自分たちで蒔いた種よ。私個人としてでも、やり遂げるわ。」

「ゆきのん……」

かつての文化祭、生徒会選挙、彼女は独りでやろうとしていた。  
独りでしなければならぬと思っていた。

「だって、ここにいるみんなでやりたいもの。」

そう、凜として言い切った。

「もちろんその時は、わたしたちも奉仕部として手伝いますよ。」

「うんうん。ヒツキーはどうする？」

「いや、まあ、乗り掛かった舟だな。」

「いつもの捻デレですね。」

「小町から聞いたのか、それ。」

「あら、すでに自覚させられていたのね。」

奉仕部という繋がりが、みんな好きだから。

たとえいつか自立したとしても、絶対に忘れない。

「これなら、ある程度管理下にある状況を選択したほうが賢明かもしれないですね。」

「そうみたいですわね。」

「だから、手伝ってほしい、母さん。」

「何を？」

「保護者会への説得よ。そして、できるならプロムを見にきてほしいの。」

「わかったわ。予定を確認しておくわ。……でも、無理はしないでね。まだ夜は暗いものだから、もう少し早く帰って来なさい。」

「心配性ね。ありがとう。」

雪ノ下先輩から、平塚先生に向き直る。

「保護者会に關してはお任せください。」

「えっ、あっ、はい、こちらこそよろしくお願いします。」

「月村君も、お母さんに言っておいて。」

「わかりました。」

同級生らしいしな。

一筋縄ではいかないとところとか、気が合いそうだ。

「雪乃、紅茶また美味しくなっていたわね。あのことも、相談しておくわ。……では、これで失礼します。」

珍しく困惑気味な陽乃さんを伴って退出していく。

最後に、先輩をちらりと見ていた気がした。

静寂が流れた。

すでに温くなっただけでも美味しい紅茶で、一息つく。

「……まさに雪ノ下の母親だったな。」

「そうだね！」

「それは、どういう意味かしら。」

「似すぎなんだよ。」

「そうなのかしらね。」

「これならもう、異動して大丈夫だな。」

「もしかして、異動なのでしょうか。」

「移動？」

「……マジか。」

今日は、早めの追いコンになりそうだ。

### 35. 5話 恋バナ

卒業式があつて、その後プロムがある。

そのどちらもが俺たち生徒会と奉仕部が主体となつて動いていた。多くの在校生を借り出した準備とは違い、プロムの後片付けは終わるまで学校に残っていた有志によつて行われた。

したがつて、あまり体力のない雪乃先輩や、うちのいろははこの1日を乗り切つて、死んだ魚の目となつた。明日は休日にも関わらず、大々的な企画をしたために各書類が溜まつている。だが、今日のところはみんなで休もうと意を決した。

そう、みんなである。

「ああああ」

濁音にも聞こえるだろう、おっさんのような声を俺は発していた。いや、前世を考えると、この場にいる誰よりもおっさんになるのが早いだらうけれど。

流れ続ける汗とか疲労とともに、老化成分も流れでてほしいものだ。

「つべー…これマジ熱いわ!」

戸部先輩もサウナの中に入ってきたようだ。他にも、露天風呂に浸かっていたメンバーがぞろぞろと入ってくる。それはもう、サウナの中に知り合い以外入つてこれないような混み具合である。

「はちまーん、隣いい?」

「ああ」

タオルで上半身を隠した美少年が俺の2つ隣に座りこんだ。

戸塚先輩を見て、八幡先輩はごくりと息を飲んだ。

「つつーか、サウナつてなにすんの?」

静寂に耐えきれなかった戸部先輩が声を発した。

備えつきのテレビでニュース番組をやっているが、それは彼の暇つぶしにはならなかったらしく、サッカー部を中心に話しかけている戸塚先輩はこの熱気でむしろテンションアゲアゲだ。

「つーかき、ヒキタニくん。雪ノ下さんと付き合つてんの?」

座ったまま後ろを振り返るように、こちらへ話しかけてきた。厳密には、隣にいる先輩なのだが。

「八幡、それは誠か？」

俺たちの目の前の席にいるのは材木座先輩なので、会話に混ざることを余儀なくされる。非リア充仲間だったはずなのに、裏切られたような気分なのだろう。それでいて、親友としては祝福したいというジレンマ。

で、質問された八幡先輩はというと、顔を少し逸らす。

赤いのはサウナの暑さか、それとも。

「へえー！ そうなんすか、お兄さん！」

「お兄さん呼ぶなし。でもほんと今日は助かったありがとう」

小町さんと共に協力してくれた川崎大志君は雪乃先輩とも面識があるらしく、懐いている先輩の2人が付き合っていることを素直に祝福している。それに、八幡先輩は早口で照れを隠した。

「その、八幡、由比ヶ浜さんとは？」

「いろいろあつたけど、なんとかなった。

続くだろ、たぶん」

彼女はほんと強い女の子だ。

たぶん八幡が見ていないところで涙を流して、それでも前を向いている。八幡先輩の表情を見た戸塚先輩は『そっか』と笑顔を零した。3人に近い人ほど、その関係がどうなっていくかが気になるものだからだ。

「いいなあ、ヒキタニくん。ほら、なんかアドバイスとかさ」

「んあー、そのまま前向きでいたらいいんじゃないか」

まだ海老名先輩のことを想い続けているらしい戸部先輩に、八幡先輩はそうアドバイスを返した。

「まじり！ おすみつきつてやつり！」

「まあ、結構いい線はいつてるんじゃないか？」

葉山先輩のお墨付きまでもらえて、戸部先輩は歓喜の声をあげる。良くも悪くも海老名先輩にかっこいいところを見せようとしていて、最近戸部先輩はちゃんと気が使えるようになってる。それに、八幡

先輩や葉山先輩よりも、その前向きさが引つ張っていつてくれる男つて感じがする。

「月村先輩は、たしかあの生徒会長の人でしたっけ？」

「ああ。いろはだな」

美少女で生徒会長つていう属性の女子と付き合っているということで、川崎大志君から尊敬の目を向けられた。そういや、君の想い人である小町さんつて、中学では生徒会に所属していたんだっただか。

小町さんもあざとかわいいところあるから、いろいろとアドバイスできると思う。今の君つて結構弄ばれているし。

「よくあのめんどくさいのと付き合つてられるな」

「私もそう思う」

「めんどくさいの引つくるめて好きになつたんで」

八幡先輩が言えたことではないだろう。雪乃先輩も結構素直ではないところが多いし、寂しがりやで甘えたがりであるし、それに雪乃先輩は……

「それに、ほんと優しいですよ。責任お化けだし」

「あいつ自身もかよ」

八幡先輩も責任お化けなところあるしな。

いろはに言われたんだろう。

「葉山くんは、ゆみこといい感じだよね？」

「まあな。あれからアプローチかけられてるよ」

葉山先輩に関しては好きな人がいるとは噂程度に聞いたことがあるが、ここ最近では三浦先輩のことを意識し始めている。元々好きだった人つていうのは、雪乃先輩ではないらしい。

雪乃ちゃんつて名前呼びしていたくらいなの、幼馴染とはいえ。

「先輩、いつ名前呼びするんですか？」

「それは、雪ノ下のやつだつてだな」

まあ、先輩たちなりのペースでいいだろう。

いろは的には、結衣先輩を応援しているらしいし。

「まあ、来年度も奉仕部が続けられそうですよ良かったです」  
部長としても、後輩としてもだ。

奉仕部に所属していないメンバーも大きく頷いた。

この繋がりには、奉仕部を中心にして集まったものだ。

テニスの特訓のため、サブカルチャーに生きる夢のため、姉を助けるため、いつメンの関係を守るため、そして一色いろはを助けるため、奉仕部にもたらされた依頼をこなしてきた。

「じゃあ、俺も奉仕部にはいるっす！」

「不純な動機のため認めない」

えー！と驚愕する川崎大志君だ。

こういうところが小町さん的には好みなのだろう。

「大丈夫。雪乃先輩が部長だから」

「なるほどっす！」

怨めしそうに見てくるが、先輩も大志君のことはそんなに嫌いじゃないだろうに。

「ほんと、みんな熱いね」

「あー、我も青春したーい！」

気づけば、リア充爆発しろって言われる側になるとはなあ。

しみじみと熱気が漂う天井を見上げた。



## お誕生日特別編 4月16日

季節は春、4月も半ば。

3月末から咲き誇り、高校を華やかに彩っていた桜の木が目に入る。それも今は、緑の若葉を見せていた。いつもなら桃色の絨毯のようになつて萎れて枯れていく、そんな桜の花びらも遠くへ飛んでいった。

ほんの少し空いた窓から風が入ってきていた。これが春一番なのだろうか。急に温かくなつたと思つたら、再び寒くなつた。また、風が強い日が続いていて、その割には快晴である。寒暖の差が激しく、先日の雨で桜は一気に散つてしまった。

次に満開の桜を見るには、1年待つことになるだろう。そんなことを考えながら、この空いた時間に窓の外の風景を、ぬぼーっと見つめていた。

「む、そろそろか。おーい、後ろから回してこい」

教卓を机代わりに、別クラスの提出物を確認していた先生がそう促してくる。小学校からよくあることが染み付いているのか、誰もが自然とせつせと手渡ししていく。今のクラスでは席には空白があり、一度立ち上がる場合もある。

先生はトントンと慣れた手つきで、その紙束を整える。物理基礎における力学分野の小テストだったが、古典物理学は2年からは本番だ。教科書のたつた1ページと睨めっこしながら、覚えるのではなく理解に努めることは、俺も何度も経験してきた。

「予習と復習はしっかりするように」

チャイムの音と、号令による挨拶が重なり、こうして今日も6限目が終了する。今年から赴任してきた先生だが、毎度のことそれを伝えて帰っていくので、それが口癖なのだとすでにわかっている。

「おわったー」

物理選択で数少ない女子のうちの1人は、清楚のかけらもなく、ぐでーつとなつた。新しい学年になつたとしても、隣の席にいるのは、いろはである。

生徒会長というのは、その華奢な身体に決して軽くはないプレッシャーがある。『生徒会長Ⅱ人気者or学力高い』というイメージは、昔ほどではないだろうが存在する。上位にまでは届くことはないが、平均より上はキープしている。最近は特に英語の成績が伸びてきていて、いつか追い抜かれそうだな。

「二度、生徒会室に寄るか？」

高校生の放課後の選択肢として、部活に行くか、教室で駄弁るか、生徒会で働くか。何か今日中にやるべきことが事務や先生から渡されるかもしれない。

すでに新メンバーも入ってやる気に満ち溢れているサッカー部の彼らは早速席を立っている。ちなみに俺やいろはは、新入生にサッカー部員とは知られていないだろうから、幽霊部員になりかけている。

「んー、さわちゃんは今日予備校って言ってたし」

いつもよりは放課後の騒がしきは控えめだ。生物選択のメンバーは荷物を持っていてそのまま帰る人もいる。最後の授業が別教室で行う場合は、生徒会書記の沙和子さんもそうする。

いろはは荷物を片付けながら、一度言葉を区切った。そして、桜の花びらがついたシャーペンを、大事そうに制服のポケットに入れた。

「今日くらい、よくないですかねー」

生徒会副会長はそれはもう生徒会長に甘々だ。笑顔で仕事サボりたいと伝えられたら、明日がんばることにするくらい。そして仕事が溜まる。

「はーよ」

荷物をまとめ終えた俺たちは、席を立った。

生徒会室以外なら、向かう先は決まっている。

早すぎても部長が来ているか限らないため、特別棟へ向かってゆっくりと歩いていく。

生徒会長に対して、新入生はちらちらと視線を向けている。その亜麻色の髪的美少女は、校内でトップレベルの知名度だ。それはもう、校長先生より有名かもしれない。堅苦しい入学式でも隠しきれない

ほんわかを醸し出すめぐり先輩も、俺たちの学年で人気だった。

キラキラしたシールが貼られたドアプレートが目に入った。その場所は、元はありふれた空き教室だったらしいけれど。

「やっはろーですー!」

「あつ、いろはちゃん!やっはろー!」

いろはと、キラキラボイスで独特な挨拶を交わしたのは、結衣先輩。まあ、一時期は、塞ぎこまないかどうか心配していたが、心配するほどではないようだ。まだ時間がかかるだろうけれど。

「こんにちは。伊月君、いろはさん」

「こんにちはです」

透き通った声はいつ聞いても、耳に良いと思う。美しい所作で紅茶を淹れていく姿は、見慣れたとはいえ何度も見つめてしまう。俺が初めて訪れた頃よりも、常備されているカップは増えている。

「やっはろーですー!」

明るくてクセのある声とともに、新たに美少女な小町さんが入ってくる。決して目は腐っていないし、むしろ輝いている。いろはと違って意図せず萌え袖となっているのは、あくまで成長を見越した新しい制服だからだ。

「うっす」

そして、続いて入ってきたのは彼女の兄だ。彼自身シスコンであり、ブルコンな小町さんと行動することが多く、4月からはどこか捻くれ度が下がり、お兄ちゃんっぽさが上昇している。最近、奉仕部内でブームが到来しているプリキュアについて、一番詳しい。キュアグレースについて超語る。

その手には、2本目のマツ缶が握られている。

「ほれ、おめでとさん」

「えっ、……ありがとうございますー」

早速とばかりに、いろはにそのマツ缶を手渡した。

「お兄ちゃん、早すぎるよ。フライングだよー?」

「そうだよ、ヒッキー」

テーブルを布巾で拭いたり、紙皿やクッキーを用意したり、ホール

ケーキを出したり、準備している彼女たちからお小言が入る。そういうところは先輩らしいから、咎めるといわけではない。

「本命はあっちだろ」

「2段構えとか、あざといですよ。卑怯です」

今日の主役はかなりうきうきしているようで、もらったマツ缶を靴の中に入れた。

「あれ、小町ちゃん、あの男子は？ ほら、川なんとか君」

「えっ、あー、今日も撒いてきちゃいました」

てへつとしている小町さんも、負けず劣らず小悪魔だ。彼女とは別クラスとなった川崎君だが、いまだ奉仕部に入ることには叶ってはいない。俺でも彼が去年から彼女にアプローチかけているとわかる。もちろん兼部でもいいのだろうが、きっかけを掴み損ねていることが大きい。今日も戸塚先輩が部長をやっているテニス部で、青春の汗を流しているだろう。

いろはと小悪魔同士で仲良く意気投合しているが、もしかすると同族嫌悪で反発し合っていたかもしれない。それが、腹の探り合いとか。

「さあー準備もできましたし、さっそく！ セーのっ！」

誕生日おめでとうー！という声が、部室に響いた。

「……ありがとうございます」

少し頬を赤く染めて、いろはは身を縮ませながら返事する。

そこに、いつものような余裕はない。何度も言われてきたはずの言葉だろうが、今年からのものは今までよりずっと特別なものなのだろう。新年早々は雪乃先輩だったし、奉仕部員の誕生日会は、恒例のことになりそうだ。

結衣先輩は今回も、奉仕部の思い出をスマホで何枚も写真を残していく。

「さっ、食べよっか」

雪乃先輩が領き、写真のモデルとなったケーキを6等分に切り分けていく。

「じゃあ、私たちからプレゼントということだ！」

小町さんから手渡されたラップリングからは、度の入っていない伊達メガネ。それは雪乃先輩もパソコンを使うときによく使っているものだが、ブルーライトカットのものだ。

生徒会の仕事も、パソコンをよく使う。慣れている俺とは違って、いろはは目が疲れると話していた。

「なんか頭良くなった感じするよね。これで、いろはちゃんも仲間入りだね。」

結衣先輩は、赤い縁の眼鏡をクイツとする。

「ふっふーん、わかります」

「なんだかお二人共インテリっぽいです！」

いろはも真似して、桜色の縁のメガネをクイツとする。こつちを向いて、ニコニコしているので『似合っている』という本心を伝えておく。いつもかけていないからこそ、ギャップ萌えである。

「比企谷君、おかわりをいれるわね」

「ん、おう」

微笑ましく見ていた雪乃先輩が、先輩のコップに紅茶を注ぐ。

俺も初めから少し温めになっている紅茶に口を付ける。そりゃあ、猫舌の先輩を優先的に気遣うよな。間接的にガールズトークの内容をいろはから聞いたが、雪乃先輩の姉の陽乃さんどころか、あの母親からも、先輩結構気に入られているみたいだし。

その時の会話を思い出していたせいか、思わずいろはを見つめていた。幸せそうにケーキをもぐもぐと食べている手が止まり、フォークを唇にちよこんと当てる。眼鏡で少し大人っぽく見え、いつもと違う色を見せる彼女はにこりと微笑んだ。

「なんだか1年が始まったなって感じですよ」

4月16日、その特別な日は彼女にとっては新年度の始まりなのだろう。彼女にとっては、満足に始まっているようだ。

平塚先生が離任し、奉仕部の存続は危ぶまれた。同時に、人間関係

から崩壊する可能性は確かにあった。もし俺がいない世界だとして、奉仕部はどうなっていたのだろうか。まだいろはは、本物を探しているのだろうか。まあ、あざとく上手いことやっただけだ。

「……ああ。誕生日おめでとう」

生まれてきてくれて、出会ってくれてありがとう。我ながら、そんなクサイことを考えてしまう。その台詞を口に出せるほどのイケメン力はない。

転生を経験した俺が再び、こんな人間関係を築けるとは思っていない。目の前にいる5人みんなが素敵な何かを持っていて、俺はそれをちゃんと知っている。まさか俺を主人公とする青春ラブコメ、だなんて勘違いしてしまいそうだ。

それでも、少しくらいなにか気の利いたセリフをだな。

「あと、……今年もよろしく?」

「なんですかそれ。お正月ですか」

いろははクスッと微笑んだ。

あざとかわいい彼女と違い、俺はかっこつけるのはどうも苦手だ。まあ、別に、主人公なんてガラじゃない。ちゃんと見てもらえる人たちがいるから、目立たない脇役でいい。最近よく見かける転生もののように、ハーレムなんて築く気概もない。彼女がいるだけで贅沢だ。純愛万歳。

やはり転生オリ主の青春ラブコメもまちがっている。って脇役の1人は思う。

### 第36話 風花雪月

季節は巡る。

桜が咲いたと思えば、ドタバタと入学式の準備に追われる。新年度の仕事の山を片付けている間に休めたのは、俺やいろはの誕生日会くらいだった。由比ヶ浜先輩の誕生日会もあったし、これからもなにかと俺たちは特別な日を祝うのだろう。

夏休み前には先輩たちが受験モードに入ってしまった、奉仕部は事実上活動休止となった。しかしその行動理念は、俺たち生徒会に引き継がれているし、後輩に伝えていこうと思う。少なからず、奉仕部に影響を受けた人はいる。

文化祭、体育祭、生徒会選挙。

たのしいたのしい夏休み明けには多くの学校行事が続いて、また激動の日々である。生徒会にも新たな後輩たちが入り、牧人さんが引退することになった。八幡先輩の妹の小町さんと、川崎先輩の弟の大吉君だったので、引き続き身内つばさが溢れる生徒会である。

何かと海浜とは交流が続いている。

今回クリスマスパーティーは、スムーズに進んだ。

冬になれば、先輩たちは追い込みの時期に入り、そして俺たちが3年生0学期と言われ始めた。何度目かの進路相談会を開催したり、卒業式やプロムの準備を進めたり。雪乃先輩が主導していただけあって、保護者や外部との連携にはなかなかきついものがあった。

「あの人たち、なにしにきたのかなーって思ってたら、雪乃先輩見たいだけですよね。」

雪乃先輩の母親との打ち合わせとか、超緊張した。

ダメ出しされるのかと思って、ひやひやした。

1年前より、少し髪を伸ばし始めたいろはがオレンジジュースの入ったコップを手渡ししてくれる。この甘酸っぱさが疲れた身体に染みる。蛇口から出るオレンジジュースのブースにはちよつとした行列ができている。

「先輩たちの晴れ舞台だからな。」

将来の、義息子（義弟）候補な先輩は、濃紺のドレスを着た雪乃先輩にリードされている。

体力不足の雪乃先輩が踊り疲れた頃には、いつメンと合流し始めた。

「さっちゃんは？」

「牧人さんのところだ。」

制服を着た生徒会書記、新品スーツの元生徒会会計。  
高校2年生、高校3年生。

今までのように、頻りに会えなくなる。

それは、同級生であつても同じだ。

八幡先輩、雪乃先輩、結衣先輩。

牧人さん。

戸塚先輩、川崎先輩、材木座先輩。

三浦先輩や海老名先輩。

葉山先輩や戸部先輩たちサッカー部。

彼ら彼女らは卒業して、それぞれの道へ行く。

「比企谷！いいものを持ってきたぞ！」

「えっ、ちよ、それ、いつの作文ですか」

黒歴史作文を先輩に手渡した。

海浜に異動した平塚先生なのだが、もちろん忙しい。

今日のプロムだけは、絶対に来ると言ってくれた。

先輩たちに限らず、平塚先生のところへ卒業生は集まっていく。俺たちで、サプライズを画策したことは為になったようだ。

「先輩ってば、今じゃリア充ですよね。」

「シスコンから、愛妻家にクラスチェンジしそうだな。」

リア充爆発しろ、だっけか。



ふとした時に連絡を取り合って、同窓会で集まって。

この絆はかけがえのないものだ。

俺はかつて転生して、すべてを失った。

それでも、また本物を手に入れることができた。

「私たちも、あと1年ですね。」

彼女も少し背が伸びて、俺も元の身長に近づいた。

「卒業しても、好きでいてくださいいね。」

「ああ。もちろん」

エピソード　青い春が幕を閉じ、そしてまた。

春夏秋冬、季節は巡っていく。

平成が終わりを告げて、約2年だ。先輩と一緒に、かばんちゃんとサーバルちゃんのことと嘆いたことが今となつては懐かしい。ぶつちやけ去年の東京オリンピックより鮮明に憶えている。

さて、

かの俳人、正岡子規は季節が変わる度に妹の句を詠んだという。幼少期はいじめられっ子だった兄を自ら守ってきて、青年期は病に伏せる兄の看護に献身的だったとされるし、そして晩年には兄の歌を後世に残すことも行つた。そんな素晴らしい妹なのだから、子規はシスコンにならざるを得ない。

そう言い切つた。

「いや、そうかもしれないんですけど、断定しないでくださいよ。」

晴れ晴れとした青空、桜の花びらが舞っている。

季節は春。

スーツを着た新生たちは初々しきがある。広大なキャンパスをキョロキョロとしながら彷徨い、未知の生活に不安がいつぱいであつて、しかし確かな希望を持っている。ここから1ヶ月ほどは授業に身が入らないだろう。

「こまちい、こまちい……」

対して、ここにはどんよりとした空気が流れている。

「ていうか、まだ吹っ切れてないんですね。」

「当たり前だ。最期を看取ってもらうことを決めているまである。」

「まあ、先輩のシスコンは今に始まつたことじゃないですけど。」

「ふっ、月村もいつかわかる時がくるさ。」

「うちの妹ってまだ1歳なんですけど。ていうか平塚先生、いい男性と会えたでしょうかね。」

「……報告はないよな。」

新しく赴任してくる先生もいるし、職場結婚の可能性は高まる。奉仕部の顧問である恩師との付き合いはたった1年だったが、いまだに連絡を取り合っている。今日の近況報告では、入学祝いと、多忙による愚痴だけだった。

「とうか、ここにいていいのか？」

「今日は入学式だけですし、新歓に巻き込まれたくないですし。」  
「それもそうか。」

新入生たちが、一斉に出てくる。

入学式は講堂で行われるとはいえ、さすがに全学部の新入生が入る余裕はない。だから、時間帯ごとにくつかの学部ずつ行われる。運営側からすれば、同じ内容を数回行わなければならないことになる。

ともかく、文系と理系では入学式の時間が異なる。

「お待ちせしました♪」

「おつかれ。」

「おつかれさん。」

背中まで届く亜麻色の髪は、いつも以上に手入れされている。いつも萌え袖を意識しているのに対して今は完璧に採寸されたスーツを着ているし、気合いの入ったメイクをしているし、出会った頃のような幼さはない。しかし、あどけなさがちゃんと残っていて、女子大生としての可愛さを放っている。

隣にいるスーツ姿の雪ノ下先輩と同様に、周囲の大学生の視線を集めている。言葉を交わすことはなく、1時間ほど座っていたベンチから立ち上がって講堂からひとまず離れていく。

「残りの学部のはやっはいいの？」

「ええ。学生挨拶の担当は他にもいるから。」

「ぶつちやけ、式の中で一番反応良かったですよ。」

「練習の成果、出ましたね。」

「そうね。比企谷君の前ほど、緊張することはなかったわ。」

先輩はもちろん、言った本人も動揺している。

いまだに、付き合っただけでもないカップルみたいな反応をしてくれる。

「ゆ、由比ヶ浜はどうするって?」

「テニス同好会を手伝いに行くと言っていたわ。結衣さんも戸塚君も、夕食はこちらへ来るそうよ。」

手持ち看板が大量のビラを持った学生が、広場の方向へ急いで向かっている。大学どこでも新歓行為を行っていいわけではなくて、指定エリアでのみ許可されるのだ。いろはたちをチラチラと見ながら、惜しそうにすれ違っていく。

「なるほどな。今日、部室は?」

「借りられなかったわ。音楽系のサークルが使うそうよ。」

「あー、どこのサークルも借りたいですもんね。」

「……部屋、借りていいか?」

「もちろんよ。比企谷君から言ってくれるのは珍しいわね。」

「戸塚たちみたいに新歓の活動も積極的にしない上に、発足したばかりのサークルだ。それなのに、新生が2人も入ってくれるんだからな。」

「えっ、先輩が先輩やってるんですけど……」

「やっぱり、新歓はしなくてよかったかしらね。」

笑顔で、2人はそう告げる。

むず痒しそうに、先輩は頭をかく。

「そうそう、先輩。着替えてきていいですか?」

「ん、ああ、そうだな。一度解散にするか。」

「準備とか、手伝いましょうか?」

「大丈夫よ。簡単な料理を作るくらいだから。」

知り合いだけになりそうだし、飾りつけもしないのだろう。いまだ本気かどうか知らないが、専業主夫志望の先輩もいるから問題はなかったか。主に由比ヶ浜先輩のためのお料理会で、先輩も同様に鍛えられている。

T字路で、別々の方向に進んでいく。

自宅通いとすることもできたが、一人暮らしを経験しておこうということでアパートを借りている。由比ヶ浜先輩同様、いろはは女子専用の場所である。家賃はかなり高いが、防犯設備が揃っているのだ。大学生活について、義理の父が一番不安でいっぱいのようなのだ。

先輩も強制的に宅通を阻止されていて、小町さんと会えない日々だ。

「あつ、ここにもいっぱい桜咲いていたんですね。」

「そうだな。大学生活、不安か？」

「何から始めればいいのかわからないっていうか。」

「明日からはガイダンスがあつて、大学生活の注意喚起。明後日カリキュラム作成だろうな。進路のこと気にするよりも、早いうちに授業に慣れることをすべき、かなー。」

将来的にどのコースを選択するかを決めておかなければならない。コースによって履修すべき授業が変わってくる。しかし、1年生では一般教養科目でほとんどのコマは埋まってしまうだろう。

「分からないことあつたら、先輩に聞くのが一番だろうな。」

「それもそうなんですけどー、結衣先輩の話を聞くと、不安になつてくるんですよ。」

「いろいろ、ギリギリだったらしいからな。」

それぞれの授業を履修して『単位』を集めていかなければならない。成績の出し方はレポートだったり、期末テストだったりする。特に必修科目がそうなっているが、授業によって難易度が異なるのだ。先輩

の体験談は引き継がれて、隠れてブラックリスト入りする授業だってある。

第二外国語に関しては、いろは自身の趣味嗜好もあるけれども、先輩たちがどれを履修しているかも判断材料に加えたい。

「桜、綺麗ですね。」

見上げながら、そう呟いた。

こちらを微笑んだいろはは満開の笑顔で、魅せる。

「これからもよろしくな、いろは。」

「はい、いつき♪」

スタートラインは同じだけれど、道は違う。

何度別れと出合いの季節が訪れようとも、ずっと一緒にいたい。

桜の季節が一番好きなのだ。

\*\*\*\*

「行きましょうか。」

お互いの部屋で私服に着替えて、来た道を引き返す。

長袖シャツと膝丈スカートのいろはは立派に女子大生である。まだ夜は肌寒いので、トレンチコートを持ってきている。対して、俺や先輩はパーカーの一般大学生のだが、他人の恋愛ことにはあまり深く踏み込まないのが大学生である。

「先輩から、みたいですねー?」

『ヘルプ』

俺というのはスマートフォンが、同時に通知音を鳴らした。

グループラインで発信された文の、続きを待つ。

『新歓に來たい新入生がいる』

『Twitterを見たらしいわ。』

『どうするんですか』

『どうすればいい』

『先輩が、先輩してくださいよ!?!』

スタンプ

『なにそれウケる』

スタンプ

スタンプ

『姉さんは来ないで。新入生が怖がるから。』

スタンプ